
ミール・ストーン

澄空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミール・ストーン

【Nコード】

N5087A

【作者名】

澄空

【あらすじ】

1人の少女の出発から始まる、世界を救う旅。まずは、世界に散らばる仲間を求めて、各国をまわる。たくさんの出会いと別れ。急がなくては世界は滅びてしまうのに、ゆっくりとした、マイペースな旅物語。「・・・もう私たちは友達であり、仲間ですから。」（第13部本文より）

序章（1）

序章 一故国出発一（1）

―ここはサリナ国。陽の光があまりあたらない、暗い土地。しかし、住人は皆明るく、優しく、活発的だ。そんなサリナ国の住人は、みんな過去を隠して生きている。誰も過去を聞こうとしないし、詮索するフリもない。そう、みんな孤児や罪人などの、何らかの理由で他の国を追放された、もしくは住めなくなったというような人々がここで生きている。住人はみんなこの地を訪れ、住人登録を済ますと、心を入れ替える。サリナ国王も、過去について咎めたりはしない。

そんなサリナ国に一人の少女が居た。

テューサ。彼女の名だ。彼女は3歳のとき、親に捨てられた。久々に街の外を散歩していたサリナ国王に、横たわっていたところを救われたのだ。15歳まで、身寄りのないテューサを養ってくれた。髪の色が金で、瞳はグリーン。姿はとても綺麗で、国民に恨まれることもなかった。そして真っ白の、綺麗なビー玉のような物を持っていた。3歳の捨てられたとき、ずっと手の中で握っていたものらしい。テューサはそれをペンダントに仕立て、いつも肌身離さず身に付けていた。

そんなテューサは、15歳の誕生パーティを開いてもらったときに、国王に告げた。

「・・・国王様、私、明日から城下町で暮らそうと思います」

「何故だ？」

いきなりのテューサの告発に、少し驚いた様子を見せた。

「私は、サリナ国の王女でも何でもありません。15歳はもう大人です。これ以上、国王様にご迷惑をお掛けすることは出来ません」
テューサは正直に自分の考えを述べた。

「別に、迷惑だとは思っていない。しかし、自分の考えがあるのなら、それに従うこともよいだろう」

「ありがとうございます」

王様の意外な返答に、内心喜びながらも、きっちり礼を述べた。

そして、この次の日から、国王が用意してくれた家で1人で暮らすことになった。隣人たちは近くでテューサと一緒に暮らしてくれることを大いに喜び、テューサにわからないことがあると、何でも快く教えてくれた。彼女はとてもよく働いていたので、城内でなくても十分な生活を送ることが出来た。

序章（1）（後書き）

初めて投稿しました。

まだ続きは書き途中ですが、結構続きます。

これから、よろしくお願いします。

一生懸命頑張って、自分の書きたい小説を投稿したいと思います。

序章（2）

序章 一故国出発一（2）

そんな生活を送って早1年。

「うー・・・ん。あつ、おはよう、チキ、ウナ」

外に出て洗濯籠を地面に下ろし、伸びをしていると隣の家のドアが勢いよく開き、子供が2人出てきた。隣に住む、5歳くらいの双子の兄妹だ。

「あ、おはようテューサ」

「おはようテューサお姉ちゃん。ねえ、今日もお洗濯終わったら編物教えて？」

「ウナ、お前は不器用だから無理だよーだ」

「ちゃんと出来るもんー！ チキの馬鹿ー」

ウナがテューサの後ろに隠れて負けずに言った。

「そうよ。この前ウナが編んだマフラーはとても上手だったわ」

テューサは腰を屈めてチキの身長に合わせ、丁寧に補った。

「・・・ちえっ。2対1じゃ負けるよ。じゃな、テューサ！！」

少年は先程出てきたドアから家の中に入っていった。入れ替わりに、後ろからテューサを呼ぶ声が聞こえた。

「テューサちゃん！ テューサちゃん！」

振り返ると、逆隣の家の住人が家からではない方向から走ってきた。すくっとテューサは立ち、ウナはまだテューサの腰にしがみついている。

「どうしたの？ ベツカおばさん」

ベツカおばさんと呼ばれた中年の女性は息を切らせながら話し始めた。

「どうしたもこうしたもないわよ！ 今すぐにお城へ行ってちょうだい！」

「どうして？」

目を見開き、テューサは聞いた。

「私が主人と仕事で遺跡発掘に関わっていることは知ってるわね？」

「ええ」

「昨日の発掘で書物が1つ見つかったの。古字だったけど、オルマジっちゃんを読めたから、発掘報告と一緒に今朝、国王様の前で解読したの。はぁ・・・。そしたら・・・」

いっぺんに口を動かしてしまって苦しいベツカは、やっと一息入れた。

「それで？ 何が書いてあったの？」

続きが気になるテューサはそんな様子のベツカに悪いと思いながらも聞いてしまった。

「テューサちゃんの持つてるそのペンダント。真ん中の真っ白な石が関係あるのよ！」

「何で？」

胸元に掛けられているペンダントの白い石に手を触れて言った。

「わからない。そこまで国王様は聞くと、すぐに『テューサをここに呼べ』とおっしゃったの。それで私が走ってきたのさ」

「よく・・・わからない」

「私もよ。とにかく、行っておいで。こうやって話しているうちに、国王様はお待ちだろうから」

「うん。行ってくる」

石に手を掛けたまま、ベツカに頷く。テューサの後ろで話を聞いていたウナはおそるおそる会話に入ってきた。

「お姉ちゃん。戻ってくるよね？ 編物教えてくれるよね？」

慌てた様子でウナは聞いた。チキにやったように、腰を屈め、テューサは諭すように言った。

「・・・大丈夫よ。あとで、ね」

頭を撫でながら言い終えると、着ていたエプロンを脱いだ。

「ベツカおばさん。ちょっとお洗濯頼んでいい？」

「ああ、いいよ。任せときな。家の中のことも心配しないで行ついで」

「ありがとうございます。行ってきます」
エプロンをベツカに預け、テューサは城の方角へ走り出した。

序章（3）

序章 一故国出発一（3）

サリナ城に着いた。それほど距離はないが、緊張・不安などの感情からテューサは肩で息をするほどはあはあ言っていた。城を守る兵隊たちに軽く頭を下げ、なおも走り続けた。階段を何回も上り・・・謁見の間。国王の前に到着した。

「・・・失礼・・・します。国王さま・・・呼びで、しょうか」息を切らせながら床に両膝をつき、国王の顔を伺う。隣にはお妃がいて、テューサの跪いている横にはオルマたち、発掘隊もいた。

「すまない、テューサ。単刀直入に言おう。今からお前には旅に出てもらう」

「何故ですか!？」

国王の言葉に驚きを隠せず、間髪入れずに尋ねてしまった。

「うむ・・・。大方お前を呼びに行った発掘隊から聞いただろう。

お前が小さいころから持っているそのペンダントの石は・・・。＜平和＞の証なのだ」

「おっしゃっている意味がよく理解出来ません」

しどろもどろ話す国王に向かって、勇ましく問うた。

「昨日、発掘隊によって発見された書物には、大昔のことが書かれている。昔、荒れ果てていた自然と人間を治めるべく、神なる者が5つの宝石に魔術を込め、それらを使ってこの地に平和を築いたと書かれているのだ。そして、その魔石こそが、テューサ。お前の持っている石なのだよ」

「どうして、私の持っている石が、その魔石だと言えるのですか？」

「・・・その白い魔石には意味があつてな。お前の持つ魔石の意味は＜孤独＞だそうだ。お前は小さいころ親に捨てられ、私が拾うまでは＜孤独＞だった」

「でも・・・！」

「オルマ、先程の呪文を教えてやってくれ」

オルマと呼ばれた腰の曲がった老人は、テューサの肩に手を置き、そつと言った。

「は。テューサ。＜サリテュード＞と唱えてごらん」

言われるまま、テューサは両手で首の石を包み込み、唱えた。

「・・・＜サリテュード＞！」

唱えた瞬間、テューサの手の中が白く光り輝いた。

「今のは、ウィテュードしか唱えても効果が発しない呪文だ」

驚き、戸惑っているテューサに国王が優しく言った。石はまだ光っている。

「どこにいるかはわからないが・・・。あと、4人。仲間がいるはずだ。お前はこの城下町から出たことがないからわからないかもしれないが・・・。他の国などでは、草木が枯れ、人々は争い、書物に書いてある、昔と同じようなことが起こっているのだ。一国の王として命ずる。そして、頼む。世界を救っておくれ」

「書物によりますと、他4人は、自然を癒すラルウィ。海を癒すウィーシャ。空を癒すディザード。時を癒すミヤウイザがおります。テューサは孤独を癒すウィテュードです」

オルマが付け足す。いつのまにか、手の中の石は元に戻っていた。
「・・・わかりました。私は、国王様に今まで育てていただいたお礼をしなければなりません。・・・喜んで、その命をお受け致しますよう」

テューサは立って深々と頭を下げた。

「頼んだぞ」

「はい。では、用意が出来次第、旅立つことに致します。国王様もお妃様も、発掘隊の皆様も、お元氣に毎日をお過ごしください」

言い終えると、テューサは頭を上げ、くるりときびすを返し、出て行った。

序章（4）

序章　一故国出発一（4）

「はあ。なるほどねえ」

成り行きをベツカに話しながら小さな皮袋に荷物を入れた。タオル、ナイフ、ありったけの食料とお金。水筒には水をいっぱい詰め込んだ。どれだけこれから汚れるか分からないので、一番清潔なワンピースを着た。上から毛糸で編んだカーディガンを羽織り、皮袋を背負う。靴も、しっかりとした丈夫な靴を履く。

「じゃあ、ベツカおばさん。行ってきます」

ベツカの方を向いてテューサが挨拶をした。ベツカはにやりと口を歪ませ言った。

「こちら。これからの行き先は分かっているのかい？　ほら」

ベツカは筒状に丸められた紙を投げてよこした。テューサは紐を解いて紙を広げた。・・・世界地図だ。

「ありがとう」

「せいぜい迷子にならないように、ね」

「ええ。頑張るわ」

歩いて、テューサはドアノブに手を掛け、言った。

「・・・ベツカおばさん。ウナに、編物教えてあげられなくってごめんって伝えて。チキには、ウナと仲良くねって」

「ああ。・・・ちゃんと伝えとくよ。心配しないで行っておいで」

「行ってきますす！」

勢いよくドアを開け、振り返らずに言って外へ飛び出した。家のドアが閉まる。

街から外に出る門を通り抜け、街と城よりかなり来たところで、テューサは立ち止まった。くると振り返り、3秒間、小さくなった故国の姿を頭の中に焼き付け、また前へと歩みだした。目から、微

かな涙を流して。

序章（4）（後書き）

やっと序章が終わりました。
そしてこれからが本番です。
長い長い旅が始まります。
温かい目で見守ってください。

第1部(1)

第1部 ―初めての出会いとその別れ―(1)

テューサは森で彷徨っていた。故郷を出てからまだ1日しか経っていない。いきなり直面した森に入ってしまった、1日中テューサは植物と悪戦苦闘していた。

「もう！ 何よ、ここ……。せつかくの服が泥だらけになっちゃうじゃない……」

そこらじゅうに生えている中の、1本の木の幹にしがみつき、雨が降ったあのような、ぬかるんだ地面からなんとか逃げ出そうとしていた。

そんな四苦八苦していた途端、テューサは何か柔らかい物を踏んだ気がした。気になって足元に目をやった。男が1人、倒れていた。テューサが踏んだのは男の太い腕だった。驚いてぱっと足を腕の上から退けた。

「あの……。大丈夫ですか？」

テューサはおそろおそろ聞いてみた。……返事がない。死人かしら……？

「……。あの……。…」

「……。ず……。…」

微かに声が聞こえた。テューサはしゃがみこみ、もう一度尋ねた。

「どうしました？」

「み、水を……。くれ……。…」

男はテューサに水を要求した。テューサは背負っていた皮袋を下ろし、水筒を取り出してコップに水を注いだ。

「どうぞ。お水です」

テューサはコップを男に差し出すと、急に男は起き上がり、コップをむしり取ってがぶがぶと飲み干した。

「・・・ぷはーっ。生き返った。ありがとうよ、お嬢ちゃん」

「どういたしまして。体の方は大丈夫ですか？」

返してもらったコップと一緒に水筒を皮袋へしまいながら言った。

「ああ。山菜を探しに来てたんだが、いきなり何かに襲われてよお。なんか森が暴れてるような感じがしたんだ。それで・・・2日かな。倒れてたんだ」

「そうだったんですか・・・」

「よし！ お嬢ちゃん！ 俺の村へ来い！ 助けてくれた札をしな
いとな。なに、すぐ近くだ。妻も子供も喜んでくれるさ」

急な招待にテューサは戸惑ってしまった。

「えっ・・・そんな・・・で、でも・・・」

「いいって、いいって！ さあ、行くぞ！」

強引な誘いに断ることも出来ず、男に着いていった。

（森から抜けれるならいいか・・・）

第1部（1）（後書き）

第1部が始まりました。

先は長いです。かなり続きます。

楽しく書かせて頂くので、楽しく読んで頂けると嬉しいです。

第1部(2)

第1部 ―初めての出会いとその別れ―(2)

「お嬢ちゃん、名前はなんて言うんだい？」

男は横倒れの木々を跨ぎながらテューサに話し掛けてきた。

「テューサです。テューサ・レクナシア」

「テューサか……。俺はリユードだ。よろしくな」

「は、はい」

しばらく歩くと森から出て、村が見えてきた。リユードの後ろを付いてきて、迷ったりはしなかったが、もう辺りは真っ暗だった。村の門をくぐると、夜のせいか、通りは静かで人の気配はなかった。

「俺の家はこっちだ」

リユードは親指を立てて方向を示しながら言った。

「あの……。こんな時間にお邪魔しちゃってよろしいんでしょうか？」

「大丈夫だ。……。さ、着いたぞ。ただいまー！」

リユードはドアを開け、家の中の者に声を掛けた。少しして、奥からパタパタと音を立てて人がこっちへ向かってきた。

「あなた！　今までどうしてたの！？　村の人みんな心配してたのよ！　……。あら、そちらのお嬢さんは？」

「森で倒れてたところを助けてくれたんだ。テューサってんだ。テューサ。こっちは俺の嫁、フィリアだ。あと息子が1人、モナクつてのがいる」

フィリアは夫の言葉に驚いて悲鳴をあげた。

「まあ！　倒れてたの！？　またどうして……。テューサ、ありがとう。あなたは大丈夫？」

フィリアはテューサを気遣い、まず2人を家の中へ入れた。

「ありがとうございます。私は、平気です」

「健康自慢のリユードとして知られるあなたがまた・・・どうしてかしらね。」

「とにかく、俺は体中泥だらけだ。風呂に入ってくる」

「命の恩人が先でしょう！ さ、テューサ。体を洗ってきなさいな」

「あ、ありがとうございます・・・」

言われるまま、タオルを渡されて案内された風呂へ入ることにした。

第1部(3)

第1部 ―初めての出会いとその別れ―(3)

「はぁ・・・気持ちいいー」

お湯を体にかけて、泥と一緒に疲れも流れていくような感じだ。服を脱いでも、ペンダントは外さなかった。

「ありがとうございました」

風呂から出て、泥のついたテューサの服を、フィリアが洗ってくれているのか、用意してくれた衣服を纏い、テューサはリビングへ向かった。キッチンでフィリアを見つけた。

「あら。お風呂はどうだった？ 服はぴったりね。私のお古なんだけど。テューサの服は明日には乾くから、待っててね。さ、そこに座って。お腹減ってるでしょう。ちよっとお待ちなさい」

ジュージューとガスコンロの上で山菜が炎に包まれている。いい匂いだった。そんな匂いを嗅いだテューサのお腹はぐうっと鳴った。仕方なく、テューサは

「ありがとうございます・・・何かお手伝いしましょうか」と素直に言った。

「大丈夫よ。ああ、今日はもう遅いし、泊まっていきなさいね。部屋はあるから。それに、何か訳有りなんですよ？」

フィリアは炒めた料理を皿に盛りながらにやりと笑った。ちょうどその時、風呂上りのリユードが、熱って湯気を出した体を、2人の前に見せた。

「お、面白そうな話をしてるな。俺も混ぜろ」

「あなた。モナクはもう寝てるのだからもう少し声のトーンを落としてくださいな」

テューサは2人に見透かされたような感じがして、今までのことを

話すことにした。

フィリアの手料理は美味しかった。テューサは今までのことを話し終わると同時に、ご飯も食べ終えた。リユードはそれ以上に速く食べ終えていた。

「へえ……。お嬢ちゃんが『平和』の石を持つ者、ねえ」

「学生時代、そのことを授業で習ったことがあるわ」

「ああ。だがほんの少ししか教えてもらわなかったな」

リユードとフィリアが学生時代の話を始めた。

「そうだわ、村長がこの世界の歴史書を持っているから、朝起きたら訪ねてみたらどうかしら」

フィリアは提案した。

「そうですね……。そうします」

「よし、モナクを案内人につけてやろう。あいつ、喜ぶぞー」

「そうと決まったらもう寝なさい。今日は疲れているはずなんだから」

確かに、テューサの体は限界が来ていた。お腹いっぱいご飯を食べ、疲れも溜まっている。眠気が急に襲ってきた。

「はい。じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみなさい。部屋は階段を上って突き当たりよ。好きなだけ眠るといいわ」

「じゃな、おやすみ」

「ありがとう。おやすみなさい」

テューサは礼を言って皮袋を持ち、階段を上った。部屋に着き、皮袋からナイフを取り出して枕元に置いた。そして、自分の体も布団の中へともぐりこませた。数分もしないうちに、テューサは眠りに落ちた。

第1部（4）

第1部 ―初めての出会いとその別れ―（4）

『テューサ・・・テューサ・・・』

どこかで私を呼ぶ声がする。辺りを見回した。一面真っ白。果てしなく真っ白。でもこの真っ白は、どこかで見たことがあるような・・・。

『テューサ・・・テューサ・・・』

また呼ぶ声が聞こえた。

「誰？ 誰が私を呼ぶの？」

私は見えない声の主に尋ねてみた。

『テューサ・・・。我を操るウィテュードよ・・・』

“我を操るウィテュード”。確かに今、そう言った。私ははっと気づいた。

「あなたは・・・私の持っている魔石なの？」

『テューサ・・・。＜プネマ・テルヌーラ＞を唱えて・・・』

「え？・・・＜プネマ・テルヌーラ＞！」

私が唱えた途端、辺りがぱっと光り、真っ白な一面が一瞬で薄桃色に染まった。私は急な出来事にあぐりしていた。

『あなたにしか使えない呪文・・・。優しさの意味を持つ・・・』

「ねえ！ 何か、仲間たちのことを教えてちょうだい！」

我に返り、今まで溜まっていた質問を飛ばした。

「ねえ！ ここはどこ？ 仲間はどこに居るの？ 私はどこに行けばいい？ 最後はどこに辿りつくの？ 何故、私が？ ねえ、教えて！！」

『・・・また・・・夢の中で会いましょう・・・』

「ここは、夢の中なの？ ねえ！ ちょっと・・・」

『何かあったら、我をあなたの手で包んで、想いを込めて耳を傾け

て・・・』

視界がぼやけてきた。見えない声の主に両手をかざして叫んだ。相手の次の言葉が被る。

『我はテュク・・・。覚えておいて・・・』

「あなたの名前？　・・・忘れない！　テュク！　また、夢の中で会いましょう！」

第1部(5)

第1部 ― 初めての出会いとその別れ― (5)

テューサは目を覚ました。テューサの顔を覗き込んでいる小さな少年がいる。テューサが目を覚めたことを確認すると、少年はいきなり叫んだ。

「お母さーん！ お姉ちゃん起きたよーっ」

少年は母に事を伝えた後、またテューサの元へ戻ってきてはしゃいだ。

「おはよう、お姉ちゃん！ 早く早く！ 村長さん家に行くんですよ？」

「え、ええ……。モナク、かしら？」

テューサは昨晚、リユードから聞いた息子の名を少年に尋ねた。

「うん！ 僕、モナクだよ。村長さんのお家に行くんでしょ？ 僕が案内してあげるね！」

モナクは胸を叩いて自信たっぷりに言った。テューサは笑ってその笑顔に答えた。

「ありがとう。それじゃあ行こっか」

「お母さんがご飯作って待ってるよ。先に食べようよ」

テューサはモナクと一緒に階段を下りて行った。

「はい、これが世界の歴史書だよ。大切な物だからあげることは出来ないけど、この村に滞在する間貸してあげるよ」

村長の家をモナクと一緒に訪れたテューサは、歴史書を村長から受け取った。モナクは、

テューサの手の中の本を覗き込む。

「むつかしい」

「ありがとうございます」

「リユードに今朝会ってね。話は聞いているよ。その本にも書かれているけど、あの大昔の、『平和』の石を持つ者なんだってね。昔のことに詳しい人がいるから、紹介してあげようか」

親切にも村長は、歴史に詳しいというその人の住所も教えてくれた。テューサとモナクは村長に見送られて、家を後にした。

数分歩くと、その人の家が見えてきた。家の前まで着くと、家の戸をノックした。

「はい」

中から声が聞こえた。女の人の声だった。そして、戸が開く。

「はい？」

「こんにちは。あの、村長さんからカントという、歴史に詳しい人がこちらに住んでいる

と聞いたのですが」

「ああ。お父さんのことね。まだ若いのに歴史を勉強してるの？

偉いわねえ。ささ、中に入って。お父さんも喜ぶわ」

テューサとモナクは女に案内されて中に入った。

第1部（6）

第1部 ―初めての出会いとその別れ―（6）

リビングのソファで座って待っているとすぐにカントはやってきた。杖をついて、

笑顔だった。

「やあ、いらっしやい。わしがカントだ」

立ち上がってカントを迎えたテューサは深々と頭を下げた。

「テューサといいます。あの、実は・・・」

テューサは名を名乗ってから、今までの出来事を話した。カントは頷いたり、驚きの表情

を見せるだけで、テューサが話している間は、一切口を挟まなかった。

「・・・というわけなんです。私はこの先どこへ、何を目安に旅を続けられようか」

「ふむ。わしにも、旅の行き先などは分からん。だが、わしの知っている限りでは、お主の他に、石を持つ者は4人いる。その4人は、いずれもお主と同じくらいの年頃じゃ。残念ながら、この村にはおらん。いれば、わしが知っているはずだからな。そして、世界の歴史博士たちの一番有益な理論だと、5人はそれぞれの国に1人ずついるらしい」

「え？ でも、この世界に国は3つしかありませんよ？」

テューサは疑問に思ったことをすぐさま尋ねてみた。

「確かに、3つしかない。しかし、これまた博士たちの不確かな理論じゃが、あと2つ幻の国があるというのじゃ」

「幻の、国？」

「その通り。お主も聞いたことがあるじゃろう。『城の農民姫』というお伽話じゃ」

「え、ええ。聞いたことがあります」

「僕も知ってるー!」

娘の運んできた紅茶を飲みながらカントは話を続けた。

「その話に、ライソカスという国が出てくる」

「はい。そのライソカス国の王女が家出をして農民の子を偽る、というお話ですよ」

「そうじゃ。博士たちは、そのライソカス国がこの世界のどこかに存在すると思うのだ」

「そんな・・・」

「もう1つ、名前は・・・忘れてしまったが、幻の国と呼ばれている国がある。まあ、それらの国の話は、これから行く町々で情報を探るといい。・・・世界地図は持っているかね?」

テューサは頷き、持ってきた皮袋から筒状に丸めた世界地図を取り出して紐解いた。それを

をカントが机の上に広げる。

「お主の仲間には、ウィーシャという海を癒す者が居る」

カントは地図の上で指を滑らせながら、目的地に指を止め、場所を指した。

「・・・ここじゃ。ここ、シャシル国の国民はこよなく海を愛すという。海に一番近い街まで行けば、ウィーシャが居る確率も高い」

リユードたちの家へ帰ってきたテューサは、部屋に戻り、ベッドにうつ伏せになって借りた歴史書を読んでいた。1ページ1ページ、読み忘れが無いように大切に読んでいった。

本が物語っていることは、大体がカントから聞いたことと被っていた。しかし、唯一歴史書に書かれていないことがあった。ーライソカス国などの、幻の国のこと。

全部読んでみたが、カントから聞いた情報以外に、『平和』の石についての情報は載って

いなかった。

「とにかく、シャシル国へ行ってみましようか」

テューサはベッドから下りて、村長に本を返しに行った。

第1部（7）

第1部 ―初めての出会いとその別れ―（7）

翌朝、テューサは荷をまとめて、一家を起こさないようにそうつと1階へ下りた。リビン

グに着くと、リユードとフィリアが立ってテューサを待っていた。

「・・・行くんだろ、次の街に」

リユードは片目を瞑ってウインクしながら言った。

「怪我をしないように、気をつけてね・・・」

フィリアは少し目に涙を浮かべていた。テューサは2人に頭を下げて礼を言った。

「短い間だったけど、有難うございました。」

「気をつけてな」

「・・・これ。今朝の朝ご飯と、この辺は夜寒いから、火熾し木が入っているわ」

フィリアはテューサに小さな包みを渡してくれた。テューサは目頭に熱いものが集まってくるのを感じた。

「有難う、ございます」

ぽろっと水滴が頬を伝って零れ落ちた。フィリアも、流していた。

「行って、らっしゃい。全て、が、終わっ、たら顔を、み、見せて、ね？」

フィリアの発する言葉は、既に途切れ途切れで文を成していなかった。リユードはそんな

妻を見て、片手を妻の肩に乗せて落ち着かせるようにした。ひくつ、ひくつと、肩が震えている。

「じゃあ、な。気をつけて行って来い。近くに寄ったらいつでも来

い。歓迎するぞ」

「有難う。有難う・・・」

テューサは頬に残る水も拭かぬまま、2回心を込めて礼を言い、戸を開けて外に出て行った。

街を出る前に、リュードの家・村長の家・カントの家の前で立ち止まり、深々と頭を下

げて回った。――そして、街を後にした。

第1部（7）（後書き）

ついに、第1部一初めての出会いとその別れーが終わりました！
ただ今、第17部まで書き終わっておりまして、テューサの旅はまだまだ続く模様。これから頑張って書いていきますので、応援よろしくお願いします。

そして、いつのまにか50hitを超えていました。嬉しいです・
・！これからも、読者が増えて下さるよう、面白いストーリーを書きたいです。

第2部（1）（前書き）

『第2部一遭遇一が始まりました！！』

やっと、長くこの小説内容とお付き合いすることになる人物が書けます！

結構、恋・・・？しちゃいそうな感じに書いてます。

自分的に、かっこいいです。

第2部(1)

第2部 ― 遭遇 ― (1)

『テューサ・・・テューサ・・・』

また私を呼ぶ声がある。確か・・・。

「テュク？テュクなの？」

私は姿の見えない声の主へ尋ねてみた。どこからか声が返ってきた。

『有難う・・・名前を・・・忘れないでくれて・・・』

「約束したもの、忘れないって。」

私はテュクがどこかで見てると信じて、少し笑ってみせた。

『テューサ・・・これは忠告です・・・』

「忠告？」

『この先・・・大変な事態に・・・巻き込まれます・・・』

テュクの放った言葉に私は驚いた。

「・・・え？私に、何か危ないことが起きるの？」

口早に出た私の言葉と違い、静かでゆっくりとしたテュクの言葉が返ってくる。

『その時は、＜サリテュード＞か＜プネマ・テルヌーラ＞を唱えて・・・』

「・・・わかったわ。あなたのチカラを信じる。」

『有難う・・・有難う・・・』

テューサは夢から現実へ戻ってきた。昨晩は、そこらへんにポツ、ポツと生えている雑木の根元で野宿をした。

少し、こんがらがった頭を整理するのに、時間がかかった。

「これから行く国で、何が起きているのかしら。」

ぼそっと呟いてみたが、聞いてくれる人はいない。分かりながらも口に出してしまった。

テューサは、早く仲間を見つけたかった。今現在、打ちひしがれるような孤独感に襲われているのだから。・・・3歳の、捨てられた時のように。

すつくと立って、進む方向を確認した。リユードたちの住む村を出て、もう5日が経つ。フィリアに少し食料をもらったが、水も含めて底を尽きかけていた。・・・急がなくては。焦る気持ちを抑えた。もう少しでサリナ国とシャルル国の国境線だ。そしたら、すぐに街がある。そこへ着いたら宿を取って体を休めよう。テューサは計画を立てていた。そして、一晩宿代わりにした木を発った。

しかし、太陽が真上に昇る時間帯の頃、テューサはテュクの言っていた『大変な事態』に襲われた。

第2部 (2)

第2部
——遭遇——
(2)

国境線に必ずある、関所が見えてきた。方向を間違つてはいなかった。ここを通れば仲間のいる国に行ける。仲間に出逢える。

関所の門番は人柄のいい人ばかりで、テューサはほっとした。事情を話すと門番は、

「ああ、君が『平和』の石を持つ者なのかい？サリナ国の王様から書簡が届いているよ。さあ、通るといい。」

と、快くテューサを通してくれた。書簡を送ってくれた国王に感謝した。

関所を出ると、すぐに海の匂いがした・・・こんなにもサリナ国と違うなんて。テューサはしばらくの間、初めて見る壮大な美しい景色を眺めていた。果てしない地平線上の、奥の、奥の、奥の方に水平線が見える。テューサは海を見たことがなかった。川が大きくなったもの、とだけしか知識はない。西の方角には・・・地図で確認すると、砂漠がある。街まであと少し。ただ、これから立ち寄る街よりもっと海に近い街がある。仲間のいる確率は低かった。

景色を堪能したあと、テューサは歩き出した。しかし、数分も経たないうちに、テューサはテュクの言っていた大変な事態に襲われた。

「お嬢さん、怪我して綺麗な顔に残したくないなら、金目の物を置いてきな。」

「なあ。そんなことしなくても、こいつを闇商人に売っちゃえばいいんじゃないですか？」

世間で、盗賊と呼ばれる危険な団体に、テューサは取り囲まれた。テューサはナイフを出して、振り回しながら逃げようかと、作戦を講じたが、相手は5人くらいの多勢に無勢。更に全員男。ナイフま

で持っている。

「お、そいつはいいな。結構上等な女だから、高く値がつくかもな。」

・・・私をどこかに売る気だ。テューサはそう考えると、自分を囲んでいる男たちの隙間から、縫うようにして走り出た。

「あっ!!！」

男たちは隙をつかれながらも、すぐさまテューサの後を追ってくる。速い。1人の男がテューサに追いつき太い腕でテューサをがっしりと捕まえてしまった。

「きゃあっ!!！」

「ふう。首領は決断を下すのがいつも遅いんすよ。」

テューサはもがいているが、男の腕は容赦なく力を入れてテューサを放そうとしない。

「うるせえな。女は捕まえたんだし、終わりよければ全てよし、じゃねえか・・・。」

男たちに首領と呼ばれる男が仲間と話していたその時。

「お前ら、女の子に何やってんだよ!!！」

第2部(3)

第2部 ― 遭遇 ― (3)

首領の男の後ろから、テューサと同じ年頃の少年が木刀を持って叫んでいた。テューサも含め、その場にいた者全員が一瞬、動かなかった。首領が振り返り、少年を見て笑った。

「ははは。どんな助っ人かと思ったら。まだ全然ガキじゃないか。」
「さ、首領。行きましようぜ。こんなガキに構ってたら日が暮れちゃう。」

「ガキ、ガキとうるせえな。早くその女の子を放せよ。」
少年は盗賊に恐れを抱く様子もなく、話し続けた。

「放さないんならどうなっても知らないからな？ 言っとくけど、手加減はしないぜ。」

少年は言い終わると同時にその場から消えていた。首領の男の後ろに回り込んでいた。

「首領、後ろ！！」

気づいた仲間が忠告する。

「遅えよ。」

仲間が忠告した時には遅かった。木刀が振り上げられ、テューサの前で男が1人どすん、と倒れる。

「こ、このガキ。ボ、首領をやりやがったな！！」

「やっちまえ！！」

盗賊たちは一斉に少年へナイフを抜く。テューサを捕まえていた男も、首領が倒されたことにより、頭に血が昇ってテューサを放し、同じくナイフを抜いていた。少年は溜め息をついた。

「はあ。だってお前らがちゃっちゃと放さないから悪いんじゃない。」
テューサは逃げることも、言葉を発そうとも思わなかった。少年に立ち向かう盗賊たちが、次々となぎ払われていく。

「俺をナメてんの？それとも俺を誰だか知らない？」

少年は、気を失った男たちに問いかけた。もちろん返事は返ってこない。少年はふっとテューサの方を見て、言った。

「シャル国一番の剣術使いだ。」

にやっと笑って少年は木刀を腰に戻した。それから、テューサの方へと歩み寄ってくる。ぼーっと見ていたテューサは、びくっと体を震わせてしまった。

「何？怖い？」

「あ、や、い、いえ……。あ、有難うございました。」

少しびくびくしながらもぺこっと頭を下げた。頭を上げると、少年はテューサの目の前に立っていた。少年はテューサより頭半分くらい身長が高かった。黒髪に、琥珀色の瞳。

「大丈夫だった？」

テューサはまた体をびくっと震わせた。にこっと笑っていた少年の顔が急に見えなくなり、目の前が真っ暗になった。……。気絶。遠くなる意識の中、2人の声が聞こえたような気がした。

「お、おい！？」

『テューサ……。』

第2部(3) (後書き)

本日100hitを超えました！
有難うございます！！感謝感謝。

第2部(4)

第2部 ― 遭遇 ― (4)

『テューサ……。テューサ……。』

……。またあの声が聞こえる。すぐに私は夢の中だと悟った。

「テュク？ ああ、またあなたに会えたのね！」

私は姿の見えないテュクの声が聞こえただけでも嬉しかった。今、仲間はテュクだけなのだから。

『テューサ……。あの少年を捜しなさい……。』

「え？」

『あなたを危機から救った、あの少年を捜しなさい……。』

テュクは私が聞き返したことによって、もう一度、同じ事を繰り返した。私は現実のことを思い出した。

「……。そうだわ！ あの人！ 私を助けてくれたあの人！ 助けてくれたお礼を言わなくちゃ。」

『違う……。あの少年はウィーシャ……。魔石の強い力を感じた……。』

テュクの放った言葉に私はびっくりした。

「……。え？ あの人、ウィーシャなの？」

『確信は出来ない……。だから、彼を捜して……。』

「捜す？ あの人、もう近くにいないの？」

『捜して……。我は少し疲れた……。テューサ……。頑張つて……。』

気づくと、テューサは心地の良いベッドの上に寝かされていた。まだぼやける目で、辺りを見渡してみる……。知らない場所だ。すると、ばたん、とドアが開かれ、中年の太った女がコップに1杯の水を持って入ってきた。

「あら、気づいたのかい。ほら、水。1杯しかないからね。おかわりが欲しいなら自分で井戸から汲んできな。」

だん、と中に入っている水が零れそうなほど、大きな音を立てて乱暴にコップを置いた。テューサは音にびくつとしながらも、微かな冷たさを感じた。・・・水の？ううん、違う。この女から。中年の女は水を置くと出て行ってしまった。・・・これまた乱暴にドアを閉めて。

テューサはせっかくなので水を飲み干し、布団の中から出た。立ったときにくらくらと目眩がした。軽い貧血のようだ。弱った体に鞭を打ち、テュクに言われた通り、あの少年を捜しに出かけた。多分、彼はテューサをここまで運んでくれたのだろう。礼も言わねばならない。そして、ウィーシャであるか、問わねばならない。

テューサが寝ていた部屋は2階で、階段で1階へ下りた。ここは宿屋らしい。

「あら、出掛けるのかい。悪いけどお金を払ってちょうだい。あんたを連れてきた男は金を持ってなかったんだよ。」

先ほどの中年の女はこの宿の女将らしく、フロントの脇にある椅子に腰掛けていた。テュ

ーサは指定された金額を払い、女将に聞いてみた。

「・・・あの、彼はどこに行くとか、言ってませんでしたか？」

女将は無愛想に答えた。

「さあね。あたしや知らないよ。」

「じゃあ、ここはどこですか？」

テューサは地図を広げて返答を待った。女将はいかにも面倒くさそうに答えた。

「・・・ここだよ。シャシル国でサリナ国に一番近い街。」
指で示した。

「有難う。」

テューサは礼を言い、宿から出た。

宿から出た瞬間、テューサは寒気に襲われた。気温が寒いとかじ

やない。恐い。恐怖。

しばらくの間、一般の市民には感じない悪寒を、宿屋の前に突っ立って感じていた。テュ

ーサの前を通りがかる人、一人一人に、テューサは寒気を感じた。

（何？なんか・・・恐い。）

別に、何も変わった様子はない、普通の街。商店街では魚類を売る男たちが大声を張り上げて売り捌いている。

第2部(5)

第2部 ―遭遇― (5)

少しずつ、テューサは歩き出した。止まっている場合じゃない。ウィーシャを、彼を捜

さなきゃ。

少年の手がかりを探ろうと、通行人に尋ねてみた。

「すいません。この辺を、木刀を持った私くらいの年の男性を見ませんでしたか？」

「知るかよ。」

「さあね。」

「五月蠅いわね。早くどこか行ってちょうだい！商売の邪魔になるだろー！」

数人に聞いてみたが、皆、呆気ない、冷たい返事を返すばかりだった。

状況に困り果てたテューサは、無意識のうちにテュクを両手で包んでいた。そして、目を瞑った。心を落ち着かせ、未だ続いている寒気をなんとかして振り切ろうとした。

『・・・<プネマ・テルヌーラ>・・・』

テュクの声が聞こえる……。テューサはテュクの唱えた呪文を復唱した。

「<プネマ・テルヌーラ>！」

テューサが両手で包んでいた石と共に、辺り一面がぱっと輝いた。その瞬間、寒気がなく

なり、温かいものがテューサを包んだ。

『話し掛けてごらん・・・。』

テュクの微かな声が聞こえた気がした。こくりとテューサはテュクに頷いた。

「あのー……。すいません、ちよつとお聞きしたいのですが。」
恐る恐る、ちよつと通り掛かった男に聞いた。

「なんだい？」

「この辺で、木刀を持った男性を見ませんでした？」

「知らないな。この街は広いけど、住人は皆顔見知りだよ。他の街の住人なんじゃない？」

男は優しく丁寧な答えてくれた。

「有難うございました。」

テューサは頭を下げ、道を歩き出した。今の男の言葉からは冷たさは感じなかった。それ

どころか、さっきまで商店街で大声で乱暴に魚を売っていた人々も、言葉に丁寧さを生み

出していた。

「これが、私の呪文の能力なのかしら。」

ぼそつと呟いた。

もう日が暮れる直前だったが、一刻も早く彼を見つけないければならない。そう思ったテューサは、迷いもせず、街から出た。目指すは、城もある、海に一番近い街。テューサはまだ目眩のする頭を抱えて、一步一步前へ踏み出した。

第3部（1）（前書き）

いつの間にか第2部が終わりました。

第3部は少し長いです。

頑張って更新しますので、感想などください。
これからよろしく願います。

第3部 (1)

第3部 ―海を癒すウィーシャー― (1)

頬にふわふわと当たる潮風が心地よかった。今がこんなに暑い日でなかったら、この風は不快に感じるだろう。

テューサはシャル国に着いて、初めて立ち寄った街を出た後、まず、海を目指した。海に直面すれば、あとは海岸づたいに西へ歩くだけだ。これで迷うこともない。

海岸を歩いていたテューサは、ふと、海を見てみた。

「綺麗……」

思わず呟いた言葉。この国にはウィーシャーがいるから、それだけで海は魔力の影響を受けているのかな。一人で確信のない答えに答えるテューサ。海はデープブルーに染まり、他色に淀む箇所は一つもない。果てしない水平線の先は、空のスカイブルーと混ざっている。

海に沿って歩くこと、2日。いっこうに城下町は見えてこない。

テューサは疲れきっていた。心は逸るばかりで、体は素直に音を上げている。仕方なく、その場に座り込んだ。皮袋から水を取り出し、コップに1杯飲み干す。水も食料も、雀の涙ほどしかない。早く街に着かなければ……。なんか以前にもこんなことがあったような。

テューサは座った状態で後ろにごろんと寝転んだ。うとうとと、睡魔がテューサを襲う。睡魔と悪戦苦闘しながらも、疲労の溜まった体では睡魔に及ばず、くーくーと寝息をたてて眠ってしまった。

ざっざっざ……。何か音がする。しかし、テューサは疲れきっていて起き上がれなかったし、目も開けられなかった。開けようとも思わなかった。眠りに就いたと思った矢先に、聞こえた音。半分の意識のない中、テューサは必死に考えを巡らせた。(何……? 足音・

・・・？誰・・・？お、起きなきゃ・・・。）自分の体に命令しても、起き上がることが出来ない。脳は生きているのに、体は死んでしまったようにぴくりとも動かない。横たわった自分の体は、体の周りがある、ざらざらとした海岸の砂しか感じる事が出来なかった。ざっざっざっざ・・・。音がどんどん大きくなる。確実にこちらへ向かって来ている。（人だ・・・。自然じゃない・・・。）足音がテューサの近くへ来て止まった。

「あれ？」

声が聞こえた。男・・・の声。男はテューサの横に跪く。そして、テューサを抱え起こした。

「こいつは・・・。」

テューサは力を振り絞って睡魔を退散させ、目をゆっくりと開けた。男は、目を開けたテューサを見て笑った。

第3部(2)

第3部 ―海を癒すウィーシャー―(2)

テューサは力を振り絞って睡魔を退散させ、目をゆっくりと開けた。男は、目を開けたテューサを見て笑った。

「やっぱり。お前、この前盗賊に襲われてた奴だろ。」
おぼろげな風景で、まだ焦点が合わないテューサも、男の声を聞いて分かった。

「あなたは・・・ウィーシャー？」

「はあ？頭がおかしくなったか？そういえばこの前気絶したもんなあ。」

唐突な質問に、彼は答えてくれなかった。いや、分かるはずもないのだが。

だんだん景色が彩られ、細やかに映っていく。その間ずっと、少年はぐったりとしたテューサの頭を抱えていてくれた。(いつの間に、私はこんなにも弱っていたのだろう。)テューサは自分が情けなく思えてきた。

そして、テューサはまだぼーっとする頭ですべきことを考えた。まず最初に出てきたこと。

「あなたは・・・。」

「シャネラ・ルーキース。俺の名前だ。」

石を持っているか尋ねる前に、少年が口を挟んだ。

「シャネラ・・・。い、し・・・。」

「俺が名乗ったんだから、お前も名乗れよ。」

シャネラは他人が話しているとき、いつもこうなのだろうか。再度、口を挟み、テューサの質問を邪魔した。

テューサは仕方なく、まず自分の名を述べた。

「テューサ。テューサ・レクナシア・・・。」

テューサが名乗ると、満足げにシャシルは笑顔を浮かべた。

「そっか。で、何だ？何が言いたい？」

「こんな・・・石、持ってる？」

体調が回復して、頭がはつきりしてきたテューサは自分で起き上がり、シャネラの正面に座りなおした。そして、首から下げている自分の『平和』の石を見せながら聞いた。

シャネラはテューサの石を見て、ぴくっと、驚いたような態度を取った。

「持って・・・るかもな。そんな真っ白な色じゃなく、濃い青だった気がするけど。」

その言葉を聞いた瞬間テューサは、正面であぐらをかき、座っているシャネラの首に抱きついた。・・・やっと仲間が見つかった！！

第3部 (3)

第3部 ―海を癒すウィーシャー― (3)

急な事態に驚きを隠せないシャネラ。こいつは一体どうしたんだ？倒れてたり、同じような石を持っていたり、抱きついてきたり……。シャネラは戸惑いながらも、まずテューサを自分の首から離そうとした。しかし、テューサはシャネラに負けない力でぎゅっと抱きついている。

「ちょ、おい……。どうしたんだよ。急に……。」

テューサは肩を震わせていた。……。ひつく。……。ひつく。

「え？泣いてんの？え？俺なんかしたっけ？」

シャネラは一生懸命心当たりを探す。

「あ、この前宿屋に置いてったこと？悪かったな。大変だったろ。」

テューサはぶんぶんと首を横に振った。

「え？違うの？ちよつと……。おい。」

シャネラはテューサの腕を掴み、思いっきり自分の首から離れた。テューサは目に涙を浮かべ、頬にそれを伝わらせていた。両手で、自分の顔を覆い隠す。

「み、つけた……。私の、仲間……。」

「仲間あ？」

こくこくと、今度は首を縦に振るテューサ。

「石……。見せて？」

「今は持ってたねえよ。家だ。」

呆気なく答えるシャネラは、ふうと溜め息をついた。

「海……。好き？」

「ああ……。まあな。」

「石……。見たい。」

「家だ。」

「行こう？」

テューサは隠していた顔を上げ、涙を拭いてしっかりとシャネラを見る。

「げ……。本気？」

シャネラは嫌そうな顔をした。

「だめ？」

「うーん。」

考え込んでしまった。テューサは質問を変えた。

「何でこんな時間にこんなところにいるの？」

じっと見つめるテューサの緑の瞳に負け、シャネラはもう一度、溜め息をついた。

「ちえ。話すよ。俺は、軽く家出をしてきたんだ。」

「はい？」

「俺、海は好きだけど、漁業は嫌いなんだよ。……。臭いから。」

「……。えーと……。。」

「親父が手伝えってうるさいの。だから夜から明朝にかけてまで、毎日家出。シャル国での一般的な職業は漁師なんだよ。俺は、それに成りたくない。」

「そ、そうなの……。。」

「だから……。。」

「無理？」

シャネラの言うセリフを、テューサが取ってしまった。

「……。お願い。一刻を争うの。早く、他の仲間も見つけなきゃ。」

「すまん。さっきからお前の話す内容についてけないんだけど。」

確かに、まだ石のことについて一切触れていない。シャネラの要望で、テューサはゆっくりと『平和』の石について語り始めた。

第3部(3) (後書き)

自分で言うのもなんですが・・・。
シャネラ好きですっ!!

第3部（4）

第3部 ―海を癒すウィーシャー―（4）

空が茜色に染まっている時間から話し始めて、辺りが暗くなって、お互いの顔も見えなくなるまで話した。全部聞き終わり、シャネラは哑然としていた。

「俺が？俺が、そのウィー・・・とかいうやつなのか？」

「ウィーシャー。」

「そう、それ。どこに証拠があるんだよ？」

シャネラはふてくされたような顔で言った。夜風が冷たく感じたので、テューサは火熾し木で火をつけ、焚火をした。

「だから、石が必要な。」

「よくわかんねえけど・・・。昼になったら家に帰るから見せてやる。」

「有難う。」

につこり笑ってテューサは礼を述べた。温かい熱風が、海の風に負けないくらいテューサに吹きかかる。それが心地よすぎて、ふわっと欠伸をした。

「・・・私、眠っていい？寝不足・疲労蓄積その他諸々でとても疲れているの。」

「ああ。」

「・・・逃げないでね。」

自分より少し大きめのシャネラの手を握り、用心深く、テューサはそっぽを向いたシャネラの顔を覗き込んで言った。

「ち。分かったよ。早く、寝るんなら寝ろ。」

「シャネラは寝ないの？」

転がり込みながらテューサは尋ねた。

「2人で寝て、また盗賊とかに襲われたら嫌だしな。」

「見張り・・・をしてくれるの？」

「一晩だけ、守ってやるよ。」

テューサはシャネラの言葉に軽く赤面した。

「安心しろ。女1人、それも俺と同じ年のような女を、見捨てる奴じゃねえから。」

更に赤面した。そして気づいた。口が上手い・・・。

「お、おやすみなさい・・・。」

「おう。」

シャネラの最後の言葉を聞いてから、目蓋を閉じた。数分もしないうちに、シャネラの隣では寝息をたて、心地よい眠りに就くテューサがいた。

久しぶりに落ち着いた眠りに就く、と語っているようなテューサの顔。シャネラはそんなテューサの頭に、繋いでいない方の手を乗せ、くすつと笑いながら海を見つめた。

「変な奴。・・・俺、この先どうなっちゃうのかなあ？」

ぎゅっと、自分の手を握り締めている、自分より小さな、細く白い手を握り返した。

第3部(4) (後書き)

・・・シャネラ、かつこいいと思いませんか？

自分で言うのもなんですが・・・。

こんなふうに言われてみたい！！と思っちゃいます。

第3部 (5)

第3部 ―海を癒すウィーシャー― (5)

ゆらゆらと、自分の体が揺れていることに気づいたテューサは、目を覚ました。ぼっ、と起き上がる。

「おう。起きたか。昼はとっくに過ぎてるぞ。」

テューサはシャネラの背中に乗っていた。・・・おんぶされてる。

「寝坊すんなよな・・・。石を見たいっていう張本人が。」

「・・・重くない？」

顔を赤らめて恥ずかしそうに聞いた。

「は？別に。いつも練習ではもっと重いの担いでるし。」

「練習？」

「これ。」

腰から木刀を抜き、テューサに見せた。

「ああ。そういえば、剣術上手いんだっけ？」

「まあな。」

「ねえ、どのくらい歩いたの？」

「かなり。もうすぐ街に着く。」

「・・・降ろしても、いいよ？」

振り返らずにシャネラは言った。

「いいよ。疲れてるんだろ。街に着いても、今日の練習は終わってるだろうから、体慣らしとしてはちょうどいい。」

「そ、そう・・・。」

テューサは頭をシャネラの肩に凭れかかせた。

「お、見えてきたぞ。・・・おい？」

シャネラの背中から寝息が聞こえる。一瞬シャネラは、自分でも分かるような困った顔をした。

「げ。また寝たのかよ。・・・そんなに疲れてたのか？」

シャネラは独り言を言いながら、街へ入っていった。

シャネラは家に着くと、まず、テューサを自分の部屋のベッドに寝かせた。心配した母親は、慌てふためいていた。

「シャネラ！今までどこに行っていたの？あなたその子に何をしたの？また木刀で切りかかったんじゃないでしょうね？」
ふうと溜め息をつく。

「違うよ。いくら俺でも女の子にそんなことはしないさ。それよりも・・・母さん、『平和』の石って知ってる？」

「え？そりゃあ知ってるわよ。学生時代に習ったもの。」
きよとんとして母親は答えを出す。

「俺、その使い手らしいんだ。」

「何ですって？」

「俺、ウィーシャ？とかいうのなんだとさ。」

「海を癒す者・・・。じゃあその子も？」

母親の様子がおかしくなってきたことに気づきながらも、シャネラは続けた。

「ああ。孤独を癒すらしい。サリナ国を出てきて、疲れてるらしいんだ。」

「ウィテュード・・・。」

母親は呆然として、息子と、少女を交互に見た。こんな子供たちに世界の運命がかかって
いるなんて。

第3部 (6)

第3部 ―海を癒すウィーシャー― (6)

「母さん？俺、旅に出るかもしれない。」

「ええ、そ、そうね。世界が、危ないのよね。」

「よく知ってるね。親父はどこ？」

「え？あ、ああ。書斎よ。今のことを報告してきなさい。」

「そのつもりだよ。ちよつと、その子見えてあげて。」

「ええ。任せなさい。」

シャネラは父のいる書斎へ向かった。

「父さん、入るよ。」

書斎のドアをノックして、返事も聞かず入るシャネラ。いきなり喝が飛んだ。

「シャネラ！！またお前漁をすっぱかしたな！いい加減にやる氣を出さないか！」

父親はだん！と机を叩く。

「俺は漁には出ない。覚えるつもりもない。それよりも大切な話があるんだ。」

「漁よりも大切な話？ウチはなあ、俺が漁を引退した後、お前が出てくれなきゃ、食ってけないんだぞ！？」

「分かってる。それよりも大切な話。」

大人は面子を大事にしたがる。おおよそ、自分の父親も近所の人に「お宅の息子さんは

まだ漁に出ないのかね」とでも言われているに違いない。そう、シャネラは分かっていた。

「俺、ウィーシャーかもしれない。」

黙り込んだ父親が、ぴくつと動いた。

「何？」

「俺、海を癒すウィーシャかもしれない。」

シャネラはもう一度繰り返した。

「馬鹿なことを言うな。ウィーシャは海を癒すんだぞ？ お前なんかにそんな大役が務まるか！」

「俺、漁は嫌いだけど、海は好きだ。」

父親に負けずにシャネラは言い返す。

「今、俺の部屋で、仲間が眠ってる。そいつが起きて、俺の能力が覚醒したら旅に出る。」

「・・・。」

父親は黙ってしまった。

「じゃ。」

シャネラは書斎から出て行った。父親はそれを止めずに、下を見て、ずっと俯いていた。

「お父さんには言ってきたの？」

シャネラは自分の部屋に戻り、タンスの中を引っ繰り返して石を探した。

「まあね。・・・それにしても、こいつ、起きないの？」

「よっぽど疲れているのね。」

母親と話をしているうちに、シャネラは石を見つけた。海と同じ色のディープブルー。テ

ューサの首に掛かっている真っ白な石に対し、真っ青な物質だった。

「あった、あった。」

「見せて？・・・綺麗ね。あなた、いつの間にこんな物を持っていたの？」

息子の手の中の青い石を覗き込みながら母親は問うた。

「昔、海岸で昼寝しようと思って、寝転んだら急に空から俺の顔の横に落ちてきたんだ。」

「・・・そうなんだ。」

感想を言ったのは母親でなく、テューサだった。目を覚まし、上半身を起こしてこちらを見ている。

第3部（7）

第3部 ―海を癒すウィーシャー―（7）

目を覚まし、上半身を起こしてこちらを見ている。

「起きたのか。」

「ええ。あ、お母さん？ すいません、ご迷惑をお掛けして……。」「ベッドから下りて礼をしようとしたテューサを、シャネラが止めた。」「横になつてろ。また倒れられたら困るんでね。」

シャネラはそう言いながらテューサをベッドの中へ押し戻した。

「ふふ。じゃあ、元気になれるように、ご飯作ってきてあげるわ。」「シャネラも食べるでしょ？」

「ああ。」

母親は台所へ向かった。

シャネラはベッドの隣に座った。

「テューサ。これだ。」

真つ青な石をテューサに見せた。

「へえ。」

「……。？ それだけ？ どうやってウィーシャーだって証明すんだよ？」

「知らない。私、あなたの使う呪文知らないもの。」

横になったまま会話するのは、正直楽だった。

「ちょ……。」「

「そうだわ。シャネラ。今から私の言うことをそのままやって。」

「いいけど……。手本を見せろよ。」

テューサは起き上がった。今回に対して、シャネラは布団の中に押し戻すことはしなかった。

た。そして、テューサは両手で首に掛けてある石を包み、心を落ち着かせた。

「＜サリテュード＞！」

呪文を言い放つのと同時に辺りがぱっと白く光る。

目をぱちくりさせながら、シャネラはテューサを見ていた。

「すげえ……」

テューサは直接的な感想を述べられて少し恥ずかしくなった。

「えっとね、私は呪文を知っているからすぐ出来ただけで、シャネラはまず石を持って、心を落ち着かせ、石に耳を澄ましてみて。」

言われた通りに、シャネラは目を閉じ、石を握りしめた。何か声が聞こえてくる……。

この時、シャネラは目を閉じて集中していたから気づいていなかったが、隣で見ていた

テューサは、シャネラの手の中から微かな青い光を見た気がした。

『……ネラ……。シャネラ……。』

誰かが俺のことを呼んでいる。誰だ？お前は誰だ？

『目覚めなさい……。シャネラ……。』

……。何を言っている？

『僕はシャーマ……。聞こえたかい？』

ああ。聞こえた。でも、俺はなぜか口に出すことは出来なかった。

『有難う……。これから頑張ろうね……。』

頑張る？ああ、海を癒すことか。シャーマとかいう奴が話しつつけてるってことは、俺が思っていること、分かってんのかな？

『呪文……。覚えてよ。<オールズ・シャナー>……。』

「<オールズ・シャナー>！」

声が出た。

「<オールズ・シャナー>！」

シャネラは無意識のうちに声を出していた。隣で見守っていたテューサは急にシャネラが叫んだのでびっくりした。

続けざま、シャネラの手の中の石が光った。その光が、辺りまでも青く輝かせていく。

「なんだ、これ・・・。」

シャネラは自分がしたことにも関わらず、素っ頓狂な声をあげていた。テューサはにっこり笑って、もう一度シャネラに抱きついた。

「ウィーシャー！あなたはウィーシャーなのよ！」

「・・・ああ。そうらしいな。」

ぽんぽん、とシャネラは抱きついてきたテューサの背中を軽く叩く。まるで幼子をあやすかのように。

「さて、他の仲間を捜すんだろ。さっさと飯を食って、出発しよるぜ。」

「うん!!」

シャーマの青い光は消えていた。

テューサは出発に先立ち、着替えをしていた。サリナ国から来ていた服は汚れてしまい、ぼろぼろだった。シャネラの母親は

「はい。これ着なさい。私が昔着ていた服だけど。」

と、優しく気を使ってくれた。

デニムのロングスカートに白いブラウス。上から薄桃色のカーデイガンを羽織った。

「おーい。用意できたか？早くしろよ。」

シャネラはこれから起こることに好奇心を抱いていた。他国はどんな姿をしているのだろう。強い奴はいるかな、と。

着替え終わり、皮袋を持って、シャネラの前にテューサは姿を現した。

「じゃ、行ってきます。」

「お世話になりました。」

「気をつけてね。世界の為だから・・・頑張ってくださいね。」
旅立つ息子を一生懸命目に焼き付けて母親は言った。

「ああ。父さんにもよろしくな。」

「お父さんも、あなたがウィーシャーだってこと、認識してくれてるわ。本当よ。」

「有難う。行ってきます。」

2人の若者は旅立った。シャネラの母親はそれを見送った。悲しいことながら、父親は最後まで姿を見せなかった。

第3部 (7) (後書き)

第3部も終了です。

やっと仲間が増えて、会話が出来、楽しく書かせてもらっています。
これからよろしくお願いします。

第4部

第4部 ― シャネラの過去 ―

テューサとシャネラは商店街を歩いていた。

「・・・ったく。母さん、飯くらい持たせてくれたっていいのに・・・。」

シャネラはぶつぶつ文句を言っていた。シャネラの住む街を出るとき、テューサが問題に気づいた。

「食料がない!!」

ふいに叫んだテューサの声が、シャネラの耳をきーんとさせる。

「はあ？」

シャネラは両手で自分の耳を塞ぎながら聞き返した。

「だから、食料がないのよ! あ、水もない!」

「早く言えよ!!」

こうして、一旦街を出た2人は、街へ戻って買い物始めた。歩きながら、テューサが疑問に思ったことを尋ねた。

「・・・シャネラの石は何て名前？」

頭の後ろで腕組みしながら面倒くさそうにしているシャネラ。

「名前・・・?」

「聞いてないの? 私の石はね、テュクっていうの。」

「それよりも、買い物は終わったのか?・・・行きたい所があるんだけど。」

「別にいいけど・・・。」

名前を聞けなかったことに対し、テューサは少し膨れた。

買い物が終わり、街を出て外れにある灯台へ来た。そこから綺麗

な海が見渡せる。

「うわあ。綺麗ー！」

テューサは海に向かって感想を叫んだ。

「海に向かって叫んだって、木霊は帰ってこねえよ。」

シャネラは皮肉った。いつもと何か様子がおかしいことに、テューサは気づいた。

「・・・どうしたの？」

「・・・俺、以前この海で友人を亡くしたんだ。」

シャネラはディープブルーの海を見つめながら語り始めた。

「15歳くらいの頃、剣術が強い奴と戦いたくて、ネイス国へ旅に出たんだ。ちょうどその頃、海が波立って荒れていた。でも、その波と一緒に魚もたくさん集まってきた。だからどこの家也大漁だっと言って年頃の男を漁へ出したんだ。」

悲しそうにシャネラは続ける。

「今思うけど、あの時海が荒れていたのは俺のせいなんだろうな。ネイス国の手前の砂漠で何か胸騒ぎがして、街に飛んで帰ってきたのさ。でも、もう遅かった。俺が戻った頃には海は静けさを取り戻していたけど、あいつは・・・。」

シャネラは一息いれた。ズボンのポケットから石を取り出し、握り締める。

「だから、これから他国へ行く俺は、その前にやるべきことがある。俺がここから離れても、誰一人海で悲しい思いをしないように・・・」

・<オールズ・シャナー>・・・！」

あっ！とシャネラが唱えた瞬間辺りが光った。そしてその光は、だんだん青に染まっけき、海の方へと向かって伸びた。一定時間輝いた後、石は光を出さなくなった。

「・・・よし、行くか。」

シャネラの海を見ていた琥珀の瞳が、テューサの方を見て笑った。

「ええ。」

テューサは笑顔を返し、相槌を打った。（私も、サリナ国に呪文をかけてこれば良かったかなあ？）

そして、2人はネイス国へ旅立った。

第4部（後書き）

第4部は1話だけです。

次話からは第5部に入ります。

まだまだ頑張りますよ？

第5部（1）（前書き）

ついに第5部突入！！

第5部 (1)

第5部 ―ネイス国を目指して― (1)

「私たちの共通点ってどこだと思う？」

テューサは隣で歩いているシャネラに尋ねてみた。シャネラは少し考えた。

「・・・石を持っているところ。」

「それもそうなんだけど。」

「じゃあ、何なんだよ？」

シャネラは困った顔をした。テューサは目を大きくして言った。

「私たち2人とも、それぞれの国の城下町出身なのよ！」

「・・・それが？」

欠伸をしながらシャネラは興味なさそうに聞いた。

「少し遠くなっちゃうけど、ネイス国の城下町へ行きましょう！」

「・・・あのさあ。食料足らないと思うよ。」

シャネラはテューサの言ったことに指摘した。

「・・・その点は・・・まあ、頑張りましょう！」

「げ。・・・また倒れるなよ？」

更に指摘した。

「その点も頑張るわ！」

「何でもいいけど・・・。そろそろ寝床探さねえ？もうすぐ日が暮れるぞ。」

空を指さした。スカイブルーから、オレンジ色に染まってきている。

「そうね・・・。この辺何もないから・・・寝床も何もないわね。」

テューサが辺りを見渡してシャネラに言う。

「ここで寝ましようか。」

「・・・ここ・・・。」

啞然としてシャネラが呟く。

「何か文句でも？」

「いや……。」

シャネラはその場に寝転んだ。……あまり心地よいとは言えない。
「……ご飯は？」

テューサが寝ているシャネラの隣に座って、尋ねた。

「明日の朝まで食べて食う。おやすみ。」

素っ気なく答えて目を閉じた。テューサは皮袋からナイフを取り出して、すぐに持てるような場所へ置いた。そして、シャネラの街で買った干し魚を半分食べた。

テューサの周りは闇に包まれた。火熾し木で火をつけ、暖を求めた。心地よい温かさがテューサを覆う。すると、眠気がテューサを襲ってきた。（寝ちゃだめかな……？）

以前、盗賊に襲われたこともあり、夜野宿する時は神経が敏感になっていた。それでも睡魔は勢力を増し、テューサに襲いかかる。何かして気を紛らわし、眠気を振り払おうとした。

「ネイス国はどんな国だろう。地図を見ると、木や山が多いみたいだけど……。」

頭の中で思うより、声に出した方がいいと思ったテューサは、1人で話しつづけた。

「木や山……ってことは、自然の……ラルウィ……かしら？」
睡魔が再度襲ってきた。顔をばんぽんと叩いて、シャネラが起きるまで少しでも長く起きていようと必死になった。

「その後……どうすればいいのかしら。そういえば、シャネラの居た街で情報収集するのを

忘れたわね。……ふわあ。」

ついに欠伸が出た。……今まで我慢してきたのに。まだまだ夜は長い。隣ではシャネラが気持ちよさそうに寝ている。

「眠って……いい……？」

聞こえないことは分かっていたが、シャネラに向かってそっと囁いてみた。

「・・・もうちょっと起きていよう・・・。」

その頃のシャネラは、夢の中でシャーマに捕まっていて、目を覚ますことが出来なかった

第5部(1) (後書き)

そいえば、いつのまにやら200hit!!
有難うございます。

第5部(2)

第5部 ―ネイス国を目指して―(2)

「だあかあらあ……。そのことじゃなくて、もっとこれから使え
そうなことを教えてくれよ！」

俺は夢の中でいらいらしていた。

『さつきから言ってるでしょ……。？君はこの僕『平和』の石を持
つ者なんだから……。そんな攻撃的な呪文はないの……。』

「テューサは2個あって、なんで俺は1個しか呪文ないんだよ!？」
俺は見えないシャーマと口喧嘩をしていた。

『あるけど君にはまだ使えないの……。』

呆れたような口調で俺の言葉の攻撃を避けるシャーマ。俺は1人叫
んでいた。

「力不足ってことかよ！」

『違う……。最後の最後にしか使わない呪文なんだ……。あの
子も、その呪文は知らない……。テュクは教えてないだろうから
……。』

「ちっ。俺はもう起きるぞ。多分テューサが寝ていない。」

『優しいんだね……。』

「うるせえよ。」

『最後に1つ……。教えてあげる……。テュクも感じているだろ
うけど……。』

俺はシャーマの言いかけた言葉に興味を持った。

「何だよ？」

シャーマはゆっくりと口を動かした。……。実際には見えないが。

『砂漠は……。通らないほうがいい……。』

「……。はあ？そんなけ？」

俺は聞き返した。興味を持ったその事柄の答えが呆気なさ過ぎた。

『一直線に・・・街へ向かって・・・。』

「どこの街に仲間はあるんだよ？」

『わかんない・・・。』

「・・・ちつ。もういいよ。俺は起きる。またな。」

俺は今日2度目の舌打ちをした。

『また・・・何かあったら呼ぶね・・・。』

シャーマの声が遠くなっていた。

テューサはシャネラの隣で膝を抱え込んだ状態で、うつらうつらしていた。こんな状態ではテュクもテューサを夢の中へは誘えない。

（砂漠のこと、聞いてないだろうな。）

シャネラは起き上がり、うたた寝から完全に普通の睡眠へ移行か
けているテューサを、起こさないようにゆっくりと体を倒して横に
してやった。

「まったく・・・。世話のやける・・・。俺こそ街を出てから全然
寝てねえよ・・・。」

ぶつぶつ文句を言いながら、自分がTシャツの上から着ていたジャ
ケットを脱いでテューサの体にかけた。そして、自分はテューサが
熾した焚火で体を温めた。

「砂漠か。何で通っちゃまずいんだろ。」

シャーマからついさっき聞いたことを、いろいろ考えを巡らせて一
晩を明かした。

第5部(2) (後書き)

自分で言うのも恥ずかしいんですが・・・。

私、結構シャーマのキャラが好きです。

優しい・・・感じなところがね。

みなさんは、どのキャラクターがお気に入りでしょうか。

これから登場してくるキャラも好きになってくれると嬉しいですよ☆

第5部(3)

第5部 ―ネイス国を目指して―(3)

翌朝、シャネラが朝ご飯を食べているときにテューサは起きた。

「・・・あれ？」

目を擦りながらテューサがむくつと上半身を起こす。

「おう。飯食うか？」

干し魚を差し出しながらシャネラはもう片方の手で自分の口の中に魚を放り込んだ。テューサは魚を受け取り、じいっと見つめた。

「・・・私、寝ちゃった？」

「ああ。」

「・・・ごめんなさい。」

「何が。」

「シャネラも疲れているのに・・・。」

テューサが悲しそうな顔をしているのに気づき、シャネラは話題を変えた。

「・・・それより。聞いたか？石から。」

「砂漠？」

俯いていた顔を上げ、テューサはシャネラの顔を見た。

「ああ。聞いたなら話は早い。・・・街へ行くぞ。」

「もともと寄り道する気はなかったわ。」

「あっそう。」

シャネラは水を1杯飲み、鞆に物を詰め込んで立った。

「よし。行く・・・。」

シャネラは言葉が終わる前に、自分の口を閉じて鞆を地面に下ろした。テューサはシャネラがどうしたのかと疑問に思っていた。

「テューサ。逃げろ。」

「え？」

がしつと後ろからテューサは捕えられた。

「きゃっ！」

「ちっ。」

どうして今まで足音・気配に気づかなかったのだろう。シャネラは悔いた。そして、木刀を手にとった。

「・・・放せよ。」

勇んだ言葉を放つシャネラ。それをにましながら見る男たち。

テューサは自由な範囲で顔を上げ、自分を捕まえている人間を確認した。・・・この前の、自分を襲った盗賊たちだった。しかも、以前より人数が多い。4・5人どころではなく、倍はいた。

シャネラは舌を鳴らし、木刀を構えた。

「おおっと。下手な真似すると、女が痛い目見るぜ？」

首領と呼ばれている男が笑いながら言った。先日シャネラにぼこぼこにされ、顔や腕には包帯がしてあった。他3・4人もそうだった。

「シャネラ、逃げ・・・んっ！」

テューサはシャネラに言葉を発した途端、自分を捕まえている男が腕に力を入れたので、首を軽く絞められた。男は腕の力を元に戻すと、テューサは咳き込んだ。

「けほっ。ほっ。は・・・けほんっ!!」

残念ながら、寝る前にナイフは取りやすい場所に置いておいたが、今、男に捕まっているので取れるはずもない。

「テューサ！」

第5部（4）

第5部 ―ネイス国を目指して―（4）

シャネラは咳き込むテューサを呼ぶようにして叫んだが、何も状況は変わらない。今回は多勢に無勢。シャネラでも、この人数では余裕はなかった。何か手はないか、必死に考えを巡らす。

「おいおい。かかってこねえの？こっちから行こうか？仕返ししたくてうずうずしてるんだよねえ。」

盗賊の首領はまだにたついている。そして、仲間に目配せすると、こくつと仲間は頷き、短剣を取り出した。シャネラはぞくつと背筋に悪寒が走った。

一斉に盗賊の男たちがシャネラ目掛けて走りよってくる。短剣を構えて。シャネラは木刀で自分を襲ってくる短剣だけに集中し、なぎ払った。しかし、全部はかわし切れない。ずばっ、と肉の裂ける音がした。赤い液体がシャネラの腕から流れ落ちる。

「ちっ。」

シャネラは傷口をおさえた。血は止まらない。

「シャネラ、逃げて・・・！」

血を見たテューサは顔を真っ青にして、叫んだ。テューサを捕まえている盗賊は首を絞めず、テューサを見ながらくつくと笑っていた。「黙ってる・・・。」

シャネラは苦しそうな声で一言言った。テューサは自分に何か出来ないか、考えた。

「運がいいガキだな。今度は、心臓だ。」

首領の一言で、またもや盗賊たちがシャネラを襲う。シャネラは次々にかわしていったがキリがない。膝、腕、頬・・・かわす度に斬られていた。ついにシャネラの体は真っ赤に染まる。テューサはシャネラを見て、叫んだ。そして石に祈った。

「シャネラ！シャネラ！・・・テュク、助けて！」

『＜プネマ・テルヌーラ＞！』

「＜プネマ・テルヌーラ＞！」

テューサは唱えた。ウィテュードの呪文を。ぱっと辺りが薄桃色に輝き、元に戻る。シャネラはそれを肩で息しながら見ていた。

盗賊の男たちは短剣を落とし、その場に倒れこんだ。当然、テューサは自由になる。そして、シャネラに駆け寄った。

「シャネラ！大丈夫？」

「あ、ああ・・・。一体、何やったんだ？」

辺りを見回しながら、疑問に思ったことを口に出す。

「えっと・・・多分、魂が優しくなる呪文。」

「へえ・・・。」

「とにかく、少し移動しましよ。ここは危ないわ。」

第5部(5)

第5部 ―ネイス国を目指して―(5)

「とにかく、少し移動しましょ。ここは危ないわ。」

シャネラが歩くのを助けながら、少し歩き、倒れこんだ盗賊が見えなくなるくらいまで来た。そして、血塗れのシャネラを座らせた。

「・・・っ。」

一瞬、シャネラの顔が歪む。それを見たテューサは、自分の着ているカーディガンの袖を裂き、1枚の長い布きれにした。

「おいっ。服・・・。」

「いいの。ほら、腕貸して。止血しなきゃ。」

シャネラの傷口に、布を巻いた。すぐに布も赤く染まる。

シャネラは両腕、右膝、左頬、背中を怪我していたので、テューサのカーディガンだけでは全部手当てしきれなかった。

「いいよ。これだけで。」

「でも・・・痛いでしょう？」

ふうと溜め息をつく。

「当たり前。ほら、行くぞ。あいつらが追ってこないうちにな。」

「そんな体で動けるわけない！」

「動けるよ。それにさっさと仲間を見つけなきゃなんねーだろ！」

「そうだけど・・・。シャネラの体が心配なの！」

「すぐにぶっ倒れる奴に心配されたかねえよ！」

2人は喧嘩を始めた。一帯の自然がざわめく。

「だから動けるって言うてるだろ！ほら、立てよ！行くぞ・・・っ。」

「その場に立ったシャネラだが、傷口が開いたのか、苦しそうな顔をした。しかし、すぐになんともない顔をして、テューサに手を伸ばした。」

「ほら。」

差し伸べられた手に頼らず、テューサは立ちあがった。そして、自分の皮袋とシャネラの鞆、木刀を持った。

「返せよ。」

テューサはふいつと顔を背けた。そして、シャネラより先に歩き出す。シャネラも後から付いてきたが、テューサはその1歩前を歩いた。

しばらくの間、2人の間には沈黙が流れ、その沈黙を破ろうとする者はいなかった。

第5部(5) (後書き)

第5部もいよいよ終わってしまいました。

テ

ユーサとシャネラはどうなってしまふのでしょうか!!

ね。

第6部も楽しみにしていて下さい
頑張ります!

第6部（1）（前書き）

第6部突入です。
しいです☆

早く新しいキャラが出てきてほ

第6部（1）

第6部 一 仲直りまでの道のり―（1）

ネイス国とシャルル国の狭間にある、関所に辿り着いた2人。依然として沈黙が流れていた。1歩前を歩くテューサは膨れっ面、後ろを歩くシャネラは少しだるそうだった。

残念ながらこの関所にはサリナ国王からの書簡は届いていなかったが、テューサが事情を説明すると、門番は何も言わず、2人を通してくれた。

「ちようどいい。ネイス国の城下町ではこの時期に祭があるんだ。今日から城下町を目指して歩けば、2日で着くと思うよ。祭には十分間に合うから、楽しむといい。」

門番は親切にも最近のネイス国の近況を教えてくれた。更にシャネラの、血を纏った赤い服を見て、「これ。」とだけ言って包帯2つと消毒液をくれた。

門番に礼を言い、2人は歩き出した。

ネイス国は、シャルル国と違い、木々に包まれていた。潮風じゃない、澄んだ空気が美味しかった。靡く風が木々を揺らし、木の葉がたてる音も耳にやさしい。テューサは立ち止まり、その空間にうつとりしていた。シャネラは立ち止まるテューサを追いつ越し、先を歩いた。立場が逆転し、今度はテューサが彼の後を追う。

2人は言葉も交わさずに、夜になるまで歩いた。そしてついに、前を歩いていたシャネラがきよろきよろと辺りを見回し、1本の木の根に腰を下ろした。テューサはそれを見て、シャネラの隣に鞆と木刀を置き、自分はシャネラが凭れている木の裏側に腰を下ろした。ご飯を別々に食べ、別々に眠った。

『仲直りを・・・しなさい・・・。』

夢の中で、愚痴をこぼしていた私に、テュクは頼んだ。

「だって・・・シャネラが悪いのよ。せっかく心配してあげてるのに・・・。」

私はふてくされていた。

『迷惑をかけたくなかったのです・・・分かっておあげなさい・・・。』

「迷惑だなんて・・・私助けてもらってばかりだもの。私のほうこそ、迷惑をかけているわ。」

今度は泣きそうな顔をした。

『仲直りをして・・・今、彼は深手を負っています。今度襲われたら・・・。』

「・・・死んじゃう？」

悲しそうな顔を上げる。もう仲間を失いたくなかった。

『嫌でしょう・・・さあ、目覚めて・・・そして、怪我の治療を・・・。』

再度私は俯く。

『彼は怪我を・・・そのままにしてシャーマに逢っています・・・。化膿しないうちに・・・。』

決心したような鋭い目つきで、顔を上げた。

「・・・意地張っても仕方ないわよね・・・。」

テュクは、テューサが見ることの出来ないその顔で笑った。

第6部(2) (前書き)

2人は仲直りするのでしょうか・・・。

第6部(2)

第6部 ―仲直りまでの道のり― (2)

『喧嘩しないでよ……。仲直りして……。』

うろたえるような声でシャーマは俺に頼んだ。俺は見えない相手に
対し、どこでもいいから顔を背けた。

「あいつが勝手に怒ってんだよ。俺は悪くねえ。」

『シャネラ……。次に襲われたら、今度こそ死んじゃうよ……。？』

悲しげな声が鬱陶しく聞こえた。うっとう

「だから！俺はあいつを助けようと……。」

『怪我を心配してくれたんだよ……。自分のせいで怪我をしてしまったと思ってる……。』

俺はシャーマとも喧嘩し、怒鳴り散らさなければならぬのか。夢
の中とはいえ、体中に痛みが迸る。ほとばし

『現世の体の傷が開いちやうよ……。』

「……。っ！」

俺は唇を噛み、痛みを堪えた。そんな俺を見ていて、何も出来ない
シャーマ。

『仲直りしてよ……。3人目が近いんだから……。』

「近いのか!？」

シャーマの言葉に、つい大声を出してしまった俺はまた痛みを堪え
るため、歯を噛みしめた。

『仲直りしてくれるなら教えてあげる……。』

俺は癖になっているのだろうか。舌打ちをした。

「……。しょうがねえ。起きたら、謝るから……。で？3人目は？」

『……。今とは言っていない……。何か分かったら夢の中へ誘うね。』

・・・」

シャーマの悪戯っぽい笑った顔が見えた気がした。

「ちよっ……。おい！嘘かよ……。！？」

俺は夢の中で眠りについた……。現世に戻ってゆく……。

テューサはテュクとの約束どおり、目が覚めたら木の幹の裏側にいるシャネラの隣へ移った……。寝ている。（石と逢ってるのかな……。？）シャネラの、少し苦痛に歪んだ寝顔を見ながら、皮袋を開けて門番から貰った包帯と消毒液とタオルを取り出した。

時刻は朝。陽が山々の狭間から見えていた。

シャネラが起きないようにそっと腕を上げ、袖を包帯代わりにしたテューサのカーディガンの切れ端を取った。傷口はまだ化膿していない。自分がサリナ国から持ってきたタオルに消毒液を浸け、まだ赤いその傷をタオルで拭いた。

びくっとシャネラが体を震わす。しかし、目覚めない。テューサは手当てを続けた。

この時、シャネラはシャーマと言い争っていたのだ。

両腕・右膝・左頬……。同じことを何度も繰り返した。でも、包帯が足りなかった。（このままシャネラを置いていくのは心配だけど……。）

第6部(3)

第6部 ― 仲直りまでの道のり― (3)

地図で見た、近くの川へテューサはカーディガンの包帯を洗いに行った。

川の水が冷たくて手が悴^{かじ}む。冷たさを我慢して、血で汚れた布を洗った。赤い水が染み出す。しかし、布から出る赤い水とは別で、上流から汚水が流れてきているようで、川の水は綺麗とは言えなかった。それでも、テューサは布を洗った。大体綺麗に落ちたら、ぎゅっと絞る。繰り返した。

シャネラは目を覚ました。腕の包帯が変わっていることに最初に気づいた。(あいつか・・・) 昨晚、そこで寝たはずの、自分の凭れかかっている木の幹の裏を、痛む体を引きずって覗いてみた。・・・いない。どこへ行ったのだろうと、きよろきよと辺りを見回した。

・・・いない。

シャネラは体に激痛が走ったので、テューサを探すことを諦めた。(そのうち戻ってくるだろう。) 先程の凭れていた木の幹へ戻る。

「シャーマ・・・。約束は守れよ・・・。」

シャネラは石を握って呟き、テューサに謝ることを決めた。

テューサは全部の布きれを洗い終わり、もとの場所への帰途についた。冷えた指先が温まらない。拳を握り締めても、息を吹きかけても、石を包んでも・・・。その上、冷水で洗った冷たい布を持っているせいで、体全体まで寒くなってくる。体を温めようと、テューサは走った。

もとの場所に戻ってきた。足音に気づいて、シャネラが後ろを振

り向いた。

「あ……。お、起きてたんだ……。」

ぎこちない言葉をかけるテューサ。少し戸惑いの様子が窺^{うかが}えるシャネラ。

「あ、あの……。ご、ごめんなさい……。」

噛みながらも、最後まで口に出して詫びた。テューサはシャネラが振り向いたときから、その場に突っ立ったままだった。それに気づいて、シャネラの方へ歩み、正面に座った。

「いや、俺のほうこそ、悪かった。心配、してくれたのにな。」

「う、ううん。私のせいで、こんなにも怪我させちゃってごめんね……。」

テューサは俯いて次第に声が小さくなっていった。

シャネラはテューサの、垂れている頭の上にぽん、と手を置き、
「……。包帯、巻いてくれよ。」

と言って、Tシャツを脱いだ。テューサは俯いたまま手の甲で目を擦り、その後顔を上げた。そして、丁寧に巻いていく。

「……。ねえ。今、呪文唱える体力ある……?」

テューサは先程布を洗った川のことを説明した。シャネラは黙ってそれを聞いていた。

「ああ。いいぜ。行こうか。」

テューサの話を聞き終わり、包帯も巻き終わって服を着たシャネラは木刀を支えにして立った。テューサは急いで自分の皮袋とシャネラの鞆を持った。そして、川へ案内した。

「へえ。確かに汚いな。」

淀んだ川を見ながらシャネラは呟いた。そして、石をズボンのポケットから取り出し、右手で握った。

「……。俺はウィーシャだから、川まで癒せるか分からないぞ。」
独り言のようにテューサに言いながら、瞳を閉じた。

(シャーマ……)

シャネラは石に呼びかけた。シャーマの声が聞こえてくる・・・。

『頑張れ・・・。＜オールズ・シャナー＞・・・！』

呪文と共に、声援まで聞こえた。石が輝きだした。

「＜オールズ・シャナー＞・・・！」

シャネラの声に答えるかのように石は青く光り、川をその青で満たしていった。

シャネラは目を開け、石を握っていた手を下ろした。

「・・・ふう。」

「ありがとう。」

にっこり笑ってシャネラに笑顔を見せるテューサ。「ああ。」とだけシャネラは言って、街へと続く道を一足先に歩いていった。

第7部（1）（前書き）

さあ、3人目のラルウィ探しのはじまりはじまり。

第7部（1）

第7部 ―自然を癒すラルウィー―（1）

城下町は賑わっていた。祭とやらはまだ始まっていない様子。準備に忙しそうな人々が街中を行き交っている。あちらこちらの壁には祭の広告が貼られていた。

「・・・すごいね・・・」

「ああ。」

「こんな中、どうやってラルウィーを探そう？」

2人の目の前を横切る人々は話し掛けることも困難なくらい、早足で駆けていく。

「とにかく宿探さねえ？休もうぜ。」

重症を負っているシャネラにとって、仲間を捜すより、一刻も早く体を休めたいというのが本心だった。

「そうね。宿はどこかしら・・・？」

テューサはシャネラの体のことを思い出し、辺りを歩いて宿を探した。

宿が見つかり、2人はそこに入った。

「あら、いらっしゃい。」

女将らしき女はつんけんとした物言い、客であるテューサとシャネラを迎えた。「泊まりたいんだけど。」と言いかけるシャネラの服の袖を引っ張って、テューサは止めた。シャネラはテューサの方を振り返り、

「どうした？」

と聞いた。テューサは何も答えず、小声で唱えた。

「＜プネマ・テルヌーラ＞。」

両手は、シャネラの袖から離し、ちゃんとテュクを包んでいた。ぱつと辺り一面が光る。大体事態が把握できたシャネラは今度こそ女

将に告げた。

「泊まりたいんだけど。」

「お2人かい？一宿一飯で400セルトだよ。」

テューサは皮袋からお金を取り出し、代金を払った。

「毎度。ちょうど祭だし、もう一飯サービスしてやるよ。」

「ありがとう。」

女将に部屋を案内され、シャネラは早速ベッドに転がり込んだ。そして、瞬く間に寝息が聞こえ、夢の中へと誘われてしまった。

「・・・まだお昼なのに・・・。」

テューサは、眠るシャネラに毛布を掛けて呟いた。

仲間を捜しに行こうと、シャネラを部屋に置いてカウンターへ行った。

「すみません。この街で歴史に詳しい人いますか？」

まずは、情報集めから。女将の女はうーん、と考えて、言いにくそうに言った。

「そうねえ。居ると言っちゃあ居るんだけど。」

「どこに住んでいますか？」

「街外れの林の中に住んでるよ。この街へは、時々歴史書を買ってくるのさ。」

「ありがとう。」

「林の中は、邪魔な植物が濛々と生え茂っているから、行くなら気をつけな！・・・一緒にいたあの兄ちゃんには行かないのかい？」

テューサは苦笑した。

「疲れてるみたいなんです。もし私のこと聞かれたら、林へ行ってるって伝えてもらえますか。」

テューサは女将に伝言を頼んだ後、宿から出て、林へ向かった。

第7部(2) (前書き)

シャネラとシャーマの会話です。

第7部(2)

第7部 ―自然を癒すラルウィー―(2)

俺は夢の中で笑っていた。

「ああ、なんとか喧嘩は丸く収まったぜ。」

『シャネラ・・・ごめん、て言っていない・・・。』

「悪かったって謝ったよ！それより約束！」

俺は1人大声を出していた。シャーマの優しい落ち着いた声がそれを包む。

『それより・・・君が寝ちゃってる間にあの子は捜しに行っちゃったよ・・・。』

「何い!？」

『だから・・・君が今ここにいる間にも・・・彼女はラルウィーを捜しに出掛けているよ・・・。』

俺は何も言えなかった。テューサが俺を待たずに行ったのも、俺が怪我で休みたいと思う本心を見抜いたから。待っててくれなかったのも、世界が危機に曝^{さら}されようと迫っているから。これでは、テューサに謝ることも、礼を言うことも出来ない。

俺が今思っていたことを見抜いたのか、シャーマは優しく囁いた。

『・・・君の今やるべきことは、一刻でも早く怪我を治すことだよ・・・。』

「ああ・・・。」

俺はシャーマに相づちを打ったが、気は急いていた。

『ここで僕と話しているよりも・・・もっと深い眠りについて傷を癒しなよ・・・。起こしてあげるから・・・。』

「ああ・・・。」

シャーマの言葉と共に姿を現した夢の中での眠気に、俺は身を委ねることにした。

一方、街を出たテューサは林の中で迷子になっていた。目印がなく、何度も同じところを歩いている気がした。脹脛ふくらはぎが痛くなってくる。

「ここどこだろ……。小屋なんてないじゃない……。！」

ぶつくさ文句を言いながら、いつかの森に入ったときと同様、生い茂る植物に四苦八苦していた。

「ここ、誰も植物の手入れをしないのかしら……。夜までに街に帰れるといいんだけど……。」

しばらくの間、一生懸命になって歩いていると、家の屋根らしきものが見えた。

テューサは思いっきりその方向目指して走った。草が足に絡みつこうが、虫に噛まれようが、お構いなしに走った。そして、広い場所に出た。

家……。小屋があった。テューサははっと肩で息をしていたが、深呼吸をして息を整えた。整ったところで、小屋のドアを2回ノックした。

応答がない。もう一度ノックした。

やはり返事はない。テューサは思い切って、ノックしたドアを開けてみた……。鍵はしていなかった。というよりも、無かった。

「あの……。すみませーん……。」

勝手に人の家？のドアを開けてしまったことに、ようやく罪悪感を感じてきたテューサは、小さな声、しかしはっきりと言った。小屋の中からの返事はない。ついに、テューサは小屋の中へ入ることを決心した。

ぎし……。ぎし……。軋む床を恐る恐る踏みしめながら、一步奥へ歩んでいった。1階には誰もいない。1つしかない部屋に、1つの机と椅子があるだけ。そして、その机の上には本の山が積まれている。

テューサは誰もいないことを確認すると、奥にある梯子はしごから2階

へ上った。

2階は1つしかない窓から、微量の日光が射すだけで暗い場所だった。しかし、見える。壁一面にずらりと設置された本棚。まるで図書館のようだった。

「すごい・・・！本ばかり。頭よさそう・・・。」

本棚に入っている書物から、住んでいる人物像が描けてしまう。書物の題をひとつひとつ見て回った。歴史書、医学、哲学、そして物語・・・。あらゆる種類の本があった。

本を見ていたテューサの耳に、1階からの物音が飛び込んできた。ぎくつと体を硬直させる。（どうしよう。怒られちゃうよね・・・。）そんなことを思いながらも、先程上ってきた梯子を使って1階へ下りた。

第7部(3) (前書き)

ラルウェイ発見はなるのでしょうか。

第7部(3)

第7部 ―自然を癒すラルウィー―(3)

「あれ？どちら様？」

梯子を伝って下りてくるテューサに向かって、驚きもせずに声をかけた。テューサは全部下りきると、ぺこっと頭を下げて詫びた。

「ご、ごめんなさい！！私、ここに住んでいる方に用事があって来たんですけど、いらっしやらなかったみたいで……。」

「ここに住んでいるのは僕だよ。」

テューサの下げている頭をぽんと叩いた。テューサは頭を起こし、相手を見た。

テューサと同じくらいの年の少年。茶色の髪に蒼い瞳をしていた。シャネラと同じくらいの身長で、テューサは少し彼を見上げなければならなかった。

「で、もしかして君、『平和』の石を持つ者？」

唐突に投げられた言葉を、テューサは受け止めきれなかった。聞き返す。

「え？」

「君は……ウィテュードか、ウィーシャかい？」

分かりやすいように言い換えてくれた少年。テューサは目を丸くして答えた。

「え、ええ……。ウィテュードです……。」

テューサの答えに、少年はとびっきりの笑顔を返してくれた。

「そっか。じゃあ、これからよろしくね。」

テューサはこんがらがり、場面を把握できない頭を整理した。

「えっと……私、ここに住んでいる歴史に詳しい方を訪ねて来ただけですけど……。」

少年は笑顔のまま話しつつけた。

「それ、僕。街のみんなから、よくそうやって呼ばれるんだ。本名はルビス・カーソン。ルビスって呼んで。」

ルビスと名乗った少年は、本に埋もれる机に向かっていった。そして、本に埋もれている机の中央に手をつ込み、出した。ルビスの手の中には、木々の色、緑色した石が入っていた。

「これでしょ。君の探している石と人。」

石を見せながらルビスは微笑む。

「僕はルビス・カーソン。そして、ラルウィ。君のその、首から下げている石を見てすぐ分かったよ。」

ルビスはもう一度名を名乗り、一言付け加えて自己紹介をした。

だんだん状況が分かってきたテューサは、仲間が目の前にいることを改めて認識した。

「ここに来るのを待っていたんだ。待っていればいつかきつと、君が来ると思っていたからね。下手に動いてすれちがいになったら困るし。」

ルビスは笑顔をやめなかった。絶えず笑っていた。

「ルビス！ルビス！」

テューサは彼の名を何度も呼び、抱きついた。

「あはは。仲間が見つかって嬉しいんだね。」

シャネラみたいに、抱きつかれたことに騒いだりはしなかった。冷静だ。

「さて、質問するけど、君は？」

はつとテューサは思い出した。そういえばまだ名を名乗っていない。

「テューサ・レクナシア。ウィテュードよ。サリナ国から来たの。」

慌てて、ルビスから離れ、名乗った。

第7部（4）（前書き）

幻の国は…？

第7部（4）

第7部 ―自然を癒すラルウィー（4）

「テューサ。君は今1人かい？」

「ううん。その街にウィーシャがいるわ。シャネラっていうの。」

テューサは玄関の方を指差して、街に仲間がいることを示した。テューサの話を聞きながら、ルビスは荷造りをしていた。カチャカチャと瓶と瓶とが触れ合う音を奏でている。

「・・・ということは、僕で3人目なわけか。」

「そうなるわね。」

鞆の中に一通りの荷造りを終えたルビスは、ふうと溜め息をついた。

「そしたら、これから幻の国を探さなきゃ、仲間も何もないね。」

「そうだった。2つの幻の国。どこにあるのかしら・・・？」

ふふっと笑いながらルビスは机の上の1冊の本に手を出した。たくさん葉が挟しおりんである。その印をした中の1ページを開いた。

「ここ見てごらん。」

ルビスはテューサに本を寄越した。テューサはたくさん文字の書いてある本を眺めた。しかし古字らしく、テューサには読めなかった。

「古字・・・？読めない・・・？」

素直に読めないことを主張した。ルビスはなおも笑って、

「世界地図持ってるかい？」

と優しく聞いた。「うん。」とテューサは答えると、皮袋から地図を取り出して広げた。ルビスは指で場所をなぞる。

「今はここ。それで、ネイス国の端っこ・・・。ここ。ここから幻の国、ライソカス国へ行けると書物には書いてある。」

ルビスの指が示す場所は、山々がその場所へ行かせまいとでも言うように道を取り囲んでいた。そしてよく見ると、その出っ張っている陸地から、点々と小さな小さな島とも呼べそうにない島が続いて

いた。しかし、そこから先は地図には記されていないかった。

「普通の地図にはここまでしか書いていない。世界でたった1つの、地図を作る地学院が、その場所を知らないからだ。僕たちのことを知る歴学院とは別々に活動しているからね。」

「だから・・・幻の国なんて呼ばれているの？」

テューサは悲しげな顔でルビスに問い掛けた。

「そうとも言える。でも、その2つの国は一切交流をしない。更に、地学院の奴らは皆、面倒臭がりで、船に乗って地理情報を確認するときも、ある程度しかないんだ。だから人々は、本当に幻だと思っちゃうんだ。でも僕は、存在していると信じてる。」

ルビスは笑顔をやめて、テューサに初めて真剣な顔を見せた。

テューサは目を鋭くして、ルビスを見、「行きましょう。」と小声で囁いた。

第7部(5) (前書き)

シャネラとルビスのご対面…！

第7部(5)

第7部 ―自然を癒すラルウィー(5)

『起きて……。シャネラ……。起きて……。』
シャーマが俺を呼んでいる。

『起きてよ……。強い石の魔力を感じる……。あの子たちが帰ってきたよ……。』

俺は寝ぼけていたが、シャーマの今の一言で完全に目が覚めた。

「……。あの子『たち』!?!」

俺は『たち』を強調して聞いた。

『うん……。多分、仲間だよ……。ラルウィーだ……。ランクルがいる……。久しぶりだなあ……。』

「よくわからねえが……。とにかく起きればいいんだな!?!」

『うん……。ランクルによろしく……。』

「知るかー!?!」

俺は叫びながら現実の世界へ戻っていった。

ちょうどその時、テューサがルビスを連れて部屋に入ってきたところだった。

「知るかー!?!」

部屋に木霊するシャネラの声。テューサはびっくりして目を見開いていた。

「……。ど……。どうしたの!? 傷が痛むの?」

慌ててシャネラのもとに駆け寄ったテューサは、かなりの心配をして容態を聞いた。

「い、いや……。大丈夫。シャーマがちよっと……。」

シャネラは急いで誤解を解いた。最後の言葉に対し、テューサは頭の上にクエスチョンマークをつけているように、首を傾げた。

シャネラはテューサの後ろに突っ立っている少年に気づいた。テューサはその少年を紹介した。

「あ、シャネラ。彼はルビス。ラルウィよ。・・・ルビス、こっちはウィーシャのシャネラ。」

「よ、よろしく・・・。シャネラ・ルーキース、だ・・・。」

ぎこちなく挨拶をするシャネラ。ルビスは笑ってシャネラの隣に座り、怪我を診た。

「ルビス・カーソンだ。・・・シャネラ、どこでこんなに怪我をしたの？」

包帯の巻かれた腕を手にとって見ながらシャネラに尋ねる。その答えはテューサが返した。

「えっと・・・。盗賊に襲われちゃって・・・。」

「成程ねえ。彼ら最近、不穏な動きが絶えないよねえ。」

ルビスは笑って、包帯を解き、自分の鞆から透明な液体の入った瓶を取り出した。

「・・・それ何？」

シャネラはごくつと唾を飲んだ。瓶の蓋を開け、次に鞆から取り出した綿に少し浸ける。

「大丈夫。ただの消毒液だから。化膿したら困るしね。僕、医学の本も読んでるからそれなりの知識はあるし、心配しないで。」

けたけたと笑いながらそれで傷口を拭いていく。傷にみるのか、顔を歪ませていた。そしてルビスは再度包帯を巻いていく。手馴れているようで、すぐに全ケ所終わった。

「・・・ありがとう。すまないな。」

照れくさそうにしながらシャネラは礼を言った。

「どういたしまして。」

ルビスは変わらない笑顔で言った。

「そういえばシャーマが、『ランクルによろしく』だってさ。」

いつの間にか、辺りは暗くなり、宿の厨房からは香ばしい、いい匂いが漂っていた―。

宿の1階・・・食堂で、テューサたちが食事をしていると、宿の女将が食後のデザートを運んできた。一人一人の前に置きながら言う。「あら、歴史博士サマも一緒なの？お代金払いました？」

意地悪っぽくウインクしながら女将はにやっと笑った。ルビスも笑顔を返す。

「払ったよ。そうそう、この人たちと旅に出ることになったんでね。しばらくの間、本は買いに来ないよ。」

「そうなのかい？せっかくの祭なのに、見ていかないのかい？」
ルビスはその言葉に、考え込んだ。

「うー・・・ん。どうしようかな。一刻を争うんだよね。テューサ、シャネラ、見たい？」

デザートの果物のシロップがけを食べながら、テューサはシャネラを見た。シャネラは片

肘を机の上について、はあ、と溜め息をつく。

「どっちでもいいよ。お前等の判断に任せる。」

「見たいけど・・・。今は、仲間を捜すことが先決だと思う。全部終わったら・・・皆で見ようよ。」

テューサは笑った。ルビスもにっこりと微笑んで、

「じゃあ、今年の祭は僕欠席するよ。町長さんによろしく言つて。」

「はいはい。気をつけて下さいね。最近、他国で木々が人を襲うとか、訳の分からない噂が広がっているからね。」

女将はそこまで言って、厨房に引き返していった。シャネラは、自分のデザートを手

サに寄越していた。テューサはシャネラに笑って「ありがとう。」と無邪気に言っている。ルビスには、いつもの笑顔が影もなく消え去り、表情が険しくなっていた。女将の後姿が見えなくなると、ルビスは呟いた。

「一刻も早く・・・。」

第8部（前書き）

番外編のようなものです。

第8部

第8部 ―番外編・・・各自の休憩時間―

テューサたち一行は、ルビスの小屋の近くの街から出た後、ある場所を目指していた。地図にも載っていない、人々にも知られない、世界と無縁の孤島、幻のライソカス国。3人は、国が存在すると信じて、毎日足を前へ突き出し歩いていった。

そして、行く手を阻む自然。異様に連なる山々や薄暗く続く森林。まるで、ライソカス国を自然が隠しているかのようだった。

テューサたちはそんな山々を越え、草木を分け入り、いつしかぼろぼろになってまでいた。ルビスは、怪我をすると、どんな些細な傷でもすぐに治療をした。

「化膿するといけないから。」

が、ルビスの口癖だった。心配性なのかもしれない、とテューサとシャネラは気づきかけていた。

街を出てから、数週間。時は容赦なく流れて、時間が惜しい3人にとっては、「時間が止まって欲しい」とさえ願うほどになっていた。それほど、ライソカス国への道は厳しい。もしくは、本当に存在しないのかもしれない。しかし、一行は願うことはあっても、諦めることはなかった。・・・自分たちが諦めたら、世界は破滅してしまうかもしれないのだから。

そんな緊張感を背負った彼らは、休憩する時間だけは、というこ

とで好きなことをやることにした。テューサは、普段歩くのに必死でゆっくりと見ていられない周りの景色を眺めたり、ルビスと喋ったりした。越えている最中の山の上から見る世界。麓で眺める世界。森の中でも、光として僅かに見える世界。故郷を出て、どれだけ異国の姿に感動をしただろうか。故郷の姿を目に焼き付けてきたテューサ。目蓋を閉じて、思い返す。

王様やベツカおぼさんは元気かな。チキとウナは喧嘩していないかな。考えることは心配事だらけ。一刻も早く仲間を全員集め、世界を危機から救わねばならない。でないと、自分の大好きな人々が消えてしまいかねないのだから・・・。

夜は、テュクと話す。テューサはテュクから面白い話を聞いていた。・・・シャネルが持つ石・シャーマが、ルビスの持つ石・ランクルに恋していること。テューサがテュクに「あなたは恋をしていないの?」と聞くと、『さあ・・・どうでしょうね・・・。』とあやふやにされてお終いにされた。テューサは短い時間を利用して、いろんな人とコミュニケーションをとった。そして、歩いた。

一方、シャネラは休憩中、いつも寝ていた。ネイス国にはそこらじゅうに木が生えて無造作に伸びているので、手当たり次第に凭れかかる場所を探しては、そこに凭れて眠る。立ってはいようが、座ってはいようが、横になってはいようが、凭れることが出来るだけで、シャネラは夢の中へと入っていくことが出来た。そして、シャーマとの時間を過ごす。シャーマとの会話は、対した情報を仕入れることもできなかったが、楽しむだけ楽しんだ。だが、仕入れた情報が1つだけあった。・・・シャーマは昔、ランクルに恋をしていたらしい。恋人同士だったとか。今はどうか知らないが、シャーマが好意を寄せていることは大体察しがついた。

シャネラの傷は大分治っていたので、「リベンジがしたい。」と、いつもシャーマに愚痴をこぼしていた。こんなことテューサの目の前でルビスにでも言ったら、怒鳴られてしまう。夢の中なら入ってこれない。ストレスというストレスは溜まっていなかったが、目を覚まし、現実に戻ってきたシャネラはいつでも清々しい気分だった。

最後にルビスは、休憩するとなると、シャネラと違ってどこでもいいから座り込み、読書を始めた。それも、分厚くて、書かれている文字はとても小さい。おまけに古字らしく、テューサが興味を抱

き、読んでみようと思っても読めなかった。・・・愛読書らしい。持っていて重くないかとテューサは聞いたことがあった。しかし、答えは

「これには僕の知識が全部というほど詰まっているからね。重くても仕方ないよ。」

だった。読書をしているときでも、テューサが話し掛けてくるとそれに応じた。

そして、やはりルビスも夜は夢の中でランクルと会っていた。ランクルの姿はテュクやシャーマと同様、見えやしないが、話し方などから女だということがルビスにはわかっていた。シャネラとこの話はないが、ランクルから、シャーマへの想いを夢の中でうんざりするほど聞かされていた。ただ、ルビスは笑って、目覚めを待っていた。

こんな生活を数週間送った。まだまだライソカス国は遠い。なぜなら、まだここはネイス国の領土だから。唯一地図に記されている、点々と続く微小な孤島にすら行き着いていないから。しかし、誰も弱音を吐かず、歩き続けた。口には出さないが、3人ともライソカス国という幻を現実にしようと、毎日足を地に踏みしめていた・・・。

第8部（後書き）

いかがでしたでしょうか。

本音を言うと、少し続きの旅をどうやって書くか、迷ってたからです。

たまには、こういうのもいいですね。

また書こうかな。

第9部（1）（前書き）

第9部に突入。

さあ、夢幻の国を目指して旅立ちます。

第9部 (1)

第9部 ―いざ、孤島へ……― (1)

数週間、いや、数ヶ月歩き続けたテューサ、シャネラ、ルビスは、ついに幾つかの孤島に一番近い、ネイス国の端っこまで来た。3人のいる場所から一番近い孤島まで、ざっと100mはありそうだ。跳んで渡ること^{いまだ}も出来ないし、舟もない。3人は渡る術を考えた。

まずテューサが筏^{いかだ}を作ろうと提案した。しかし、持っている刃物は、テューサの持っているナイフだけ。ナイフ1本で木を切ることはかなり困難だ。ルビスに以上のようなことを指摘され、一時保留となった。

次に、シャネラが「泳いで渡る」と意見した。今度はテューサが指摘した。「鞆の中の食料がぐちゃぐちゃになっちゃうじゃない!」と。しかし、「大丈夫」の一点張りのシャネラ。2人が喧嘩をおっぱじめようとするところを、間一髪でルビスが止めた。

「……泳ごうか。」

結局、会議の中に採用される案は出てこなかった。しばらく考えて、ぽつりと言ったルビスの言葉に、テューサとシャネラは動きを止めた。

「泳ごうか。」

もう一度、ルビスが2人に笑って言う。そして、続けて口を開いた。「でも、テューサの言うことも一理ある。この先、食料なしでは大変だからね。だから……。」

「俺がああ島まで無事に運べってか?」

シャネラが口を挟んだ。ルビスは笑いながらこくりと頷いた。

「そう。だって『泳いで渡る』っていう意見はシャネラが出したんだもの。」

シャネラは、ちっ、と舌打ちをして、テューサから食料の入っている皮袋をもぎ取った。今まで喋らなかったテューサは、やっとここで口を開いた。

「・・・ねえ。本当に泳ぐの？」

シャネラはテューサの言葉を聞いて、「今更何を言ってるんだよ。」という顔をして振り返った。

「大丈夫。荷物は全部シャネラが持ってくれるから。」

ルビスがテューサに優しく言った。テューサは俯いていた顔を上げて、ルビスを見た。そして、次にシャネラを見た。

「・・・私・・・泳げない・・・。」

「・・・はあ？」

シャネラはテューサに詰め寄る。

「お前、海に入ったことある？」

「・・・ない・・・。」

「ちょ、お前そんなんでどうするんだよ!？」

「だから、泳ぐのやめようって言ったじゃない!」

「テューサ、大丈夫。僕も泳げないから。」

口喧嘩を始めたテューサとシャネラの間に、ルビスが割って入った。シャネラはルビスに鋭い目を突きつけた。

「普通、シャシル国以外の国の民は海に入らないよ。」

付け加えて、ルビスは自分を有利にさせた。

「大丈夫。ちゃんと、初心者なりに泳いでいくから。君は先に行っていいよ。僕はテューサとゆっくり、溺れないようにいくから。」ルビスは喋っている間中ずっと微笑んでいた。シャネラはまた舌を鳴らして、靴と靴下を脱ぎ、裸足になった。それらを靴の中に入れる。ルビスとテューサと急いで脱ぎ、靴に詰めた。シャネラは木刀に皮袋を括りつけ、海に入ってしまった。ルビスとテューサも後に続く。

第9部(2) (前書き)

死なないで!! テューサ!!

第9部(2)

第9部 ―いざ、孤島へ・・・―(2)

この日の気温は低かったので、水温はもっと低く、水に体が触れた瞬間、テューサは身震いした。顎が震え、歯がかちかちと鳴り出す。止めようと思っても止められない。ルビスはテューサの左手をぎゅっと握っていてくれる。シャネラはもう、かなり遠くまで泳いでいってしまった。

だんだん海が深くなる。そしてついに、呼吸のため顔を水面から出す状態になると、足が海底につかなくなってしまった。・・・ルビスはまだついているようだった。衣服が海水を含んで、重くなる。まるで、^{おもり}錘を着けたかのようなだった。テューサは冷たい水を、重くなった右手でかき、前へ進もうとした。ルビスも同じことを左手でやっていた。少しずつ、少しずつ前に進む。目の前にある島へは、まだほど遠い。水を帯びた服は体に張り付いて鬱陶^{うっとう}しくなる。

すると、島の陸地に人影が見えた。・・・シャネラだった。一足先に島へ到着し、服の水を絞っているところだった。そして、シャネラは次に皮袋から火熾し木を出して火を熾した。

テューサとルビスは時間を費やして、やっとあと少しで島につく、というところまで泳いできた。その時だ。テューサは足にちくつとした痛みを感じた。

「きゃっ！」

急にテューサが叫んだので、ルビスは驚いた。焚火で体を温めていたシャネラも驚いていた。途端、ルビスとテューサの繋いでいた手が離れてしまった。ごぼつ、と溺れかかるテューサ。

「テューサ！」

両手をばたつかせているテューサに、ルビスが手を差し伸べても、無意味であった。シャネラが見かねて、海へ跳び込んだ。ばしゃん、

と音がするのと同時に、テューサは海水を飲んでしまった。シャネラはすぐに2人のところまで泳いできた。そして、テューサを抱えて島まで引き返していった。ルビスも一生懸命、今までよりも速いスピードで、後を追った。

「ごほごほっ！っは・・・。っげほっ！」

陸に上げられたテューサは一気に咳き込む。そして、寝転んだまま起きようとしなかった。シャネラはもう一度、Tシャツを脱ぎ、絞っていた。

「はあ・・・。おい。大丈夫か？」

シャネラが苦しそうなテューサに声をかける。ルビスも島へ到着し、服を絞っていた。

「・・・ん。う・・・っ。」

水を飲んだせいで荒れた息も、もとに戻ってきたが、何かテューサは苦しそうだった。ルビスはそんなテューサを見て、ふと思い、服の水気を切る作業を止めて、別の行動に移した。

「テューサ、ちょっとごめんね。」

「・・・ん・・・っ。」

ルビスは一言謝り、テューサの足を診ていった。テューサの顔は、海で溺れただけなのに、青ざめている。

「おい、どうしたんだよ。」

何も分からないシャネラがルビスに聞いた。シャネラも、Tシャツを着ながらテューサの近くに寄る。

「・・・あった。これだ。」

ルビスは、テューサの右足首の箇所を指さした。そこには2カ所、針を刺したかのように見える、小さな穴があった。

「蛇だ。海蛇。まさかこんなところにいるなんて・・・。多分、毒がある。薬を・・・！急がなくなちゃ。シャネラ、テューサの上半身を起こしてあげて。」

ルビスが真剣な顔つきになって、てきぱきと判断を下し、シャネラに指示する。ここはルビスに任せざるを得ない。自分には医療の知

識など無いのだから。言われるがまま、ルビスの指示に従った。シヤネラはその場に座り、テューサの体をそっと起こして、支えていた。

第9部（3）（前書き）

ルビス、頑張って・・・！
テューサを救えるのは、貴方しか・・・！！

第9部(3)

第9部 ―いざ、孤島へ……― (3)

青ざめて、苦しそうなテューサにルビスは顔を覗き込みながら、声をかけた。目をぎゅっと瞑っていて自分の顔など見えるはずもないと知っていながら。

「テューサ。大丈夫だよ。僕、毒消しの薬の作り方知ってるから。今、作ってあげるね。頑張って。」

「う……ん……。……っう……。……。」

そして、鞆の中に手を突っ込みながら、シャネラに言う。

「シャネラ。悪いけど、僕が薬を作るまですつとそのままでいてね。動くと、毒の回りが速くなるし、上半身を起こしておくことで毒が心臓に達するのを遅くするから。」

「毒が……。心臓に達したらどうなるんだ？」

シャネラが、ルビスは薬作りに忙しいと分かっているながら質問をぶつけてしまった。鞆から

沢山の薬瓶や植物を出しながら振り向かずにルビスは答える。

「……。死んじゃうね。」

「そうか。」

死ぬ、という言葉聞いたシャネラは、テューサの体を強く抱きしめた。テューサの体は、

とても冷たかった。海に入ったせいもあるが。ぐったりとして、自分の力で座っていられ

ずに、自分の腕に凭れかかるテューサを見て、シャネラは申し訳なく思った。

「ごめんな……。無理して泳がせたからだな……。。」

シャネラはテューサに謝った。そして、自分のズボンのポケットから<シャーマ>を取り

出した。自分の胸の前で、強く握り締める。

「畜生っ……。＜オールズ・シャナー＞あっ！！」

シャネラの叫んだ呪文と共に、光った石の色が、海を取り巻いていく。一見、海の様子は

変わらないが、シャネラには水中がどうなっているか、想像は出来た。

「それが、君の呪文？」

これまた、てきばきと手を動かすルビスが、辺りが輝いたことを感じ、シャネラの方を向かずに関心した。

「ああ。」

短く答えるシャネラ。シャネラもルビスの方は向かなかった。ずっと、海を見ていた。

「そっか。僕も、この島で危険なことが起こらないように、唱えておこうかなあ。」

そう言って、一旦忙しく動いていた手を休め、その手で緑色の石＜ランクル＞を取り出して包んだ。そして、歌うように口ずさんだ。

「＜チャールク・ネス・アーソイリー＞……」

ぱっと辺りが緑色で染まり、すぐに元通りに戻った。清々しい澄んだ風が、口ずさんだ呪文のリズムに合わせるかのように吹いた。水を含み、重くなったテューサの長い髪をも揺らす。そんな髪や服が乾いていくような、暖かな風だった。

「お前……」

「自然を癒したんだよ。ラルウィだもの。」

ルビスはにっこりと微笑んで、シャネラの聞きたいことを答えてしまった。そしてすぐに作業へと戻る。ルビスが呪文をシャネラの目の前で唱えたのは初めてだった。それ故、『平和』の石を持つ同類なのに、何が起こったか聞きたくなってしまった。

葉を作っているしばらくの間、沈黙が流れた。聞こえるのは、テューサの苦しそうな吐息だけ。シャネラの腕の中で、テューサは更

に青ざめて冷たくなっていた。

「う……っは……。あ……。っ……。」

「……。おい、まだ薬は出来ねえのかよ。」

痺れを切らしたシャネラが、背を向けて薬を作っているルビスを問いただした。

「待つて。あと少し……。」

その言葉を信じ、シャネラは急く心を抑えて、もうしばらく待つことにした。

それから待った時間はとても短かった。また沈黙が流れたかと思ったら、すぐにルビスが「出来た！」と叫んだ。

そして、出来た薬をテューサの口に運ぶ。

「テューサ。薬だよ。口を開けて。飲んで。」

短い言葉で、テューサに声をかけた。

「う……。ん……。」

僅かに開いたテューサの口からルビスが、深い緑色に濁った液体状の薬を半分流し込んだ。そして、残りの半分を、足首の噛まれた痕にかける。そして、以前までシャネラが使っていた包帯をそこに消毒液を浸けて巻いた。

「これでよしと……。」

一言言って、ふうと安堵の溜め息をついた。しかし、シャネラはテューサがまだ心配で、未だ強く抱きしめていた。

ルビスは、使った薬品や植物を片付け終わると、次は火熾し木で体を温める為の暖を作った。

第9部（4）（前書き）

テューサも、無事生還しそうです。

第9部（4）

第9部 ― いざ、孤島へ・・・―（4）

辺りが、夜の真っ暗闇を朝焼けが包む頃、テューサの息はやつと落ち着いてきた。体も温かくなってきて、頬も赤らんできている。シヤネラはやつと安心をした。テューサはシヤネラの腕の中で眠っている。ルビスも手近な木の幹に凭れて眠っているようだった。

「テューサは？」

シヤネラは、ルビスは眠っていると思っていた。現実には眠っていて、ふと、目を覚ましたただけだ。そんなルビスがいきなり話し掛けてきた。目はこつちを見ている。しかし驚きもせず、ルビスと視線を交わさないまま、シヤネラは言った。

「ああ。息も整っててきたし、温かい。もう、大丈夫だ。」

「よかったー。」

ルビスは笑った。顔を見ていなくても、声で分かった。

「・・・ありがとな。」

シヤネラはルビスになんとか届くような小さな声で礼を言った。それを聞き取れたルビスは、またにっこりと笑って、目蓋を閉じ、眠っていた。

シヤネラは眠ることが出来なかった。今晚だけは。横に寝かせても大丈夫だと思ったが、なぜか、テューサを腕の中に入れておきたかった。・・・何か起きるといけないから。

ぼーっと海を見つめていると、声が聞こえた。

「・・・う・・・。」

シヤネラはすぐに、自分の腕の中からだと悟った。何度も名を呼んでみる。

「テューサ？・・・テューサ？」

「ん・・・。シヤネ、ラ・・・？」

「ああ。・・・ごめんな。大丈夫か？」

シャネラはテューサの顔を見ながら聞いた。テューサはしょぼしょぼする目で一生懸命微笑んだ。

「大丈夫・・・。」

「寝ろ。容態が悪化したら困る。」

自分のせいでテューサは苦しんでいるのに。なぜこんな不器用な言い方しか出来ないのだろうか。シャネラは今自分が発した言葉に後悔の念を抱いた。テューサは、別に気にも止めず、返事だけした。

「ん・・・。」

「おやすみ。」

テューサはシャネラの優しい「おやすみ。」の声を聞いて、すぐにまた目を瞑り、眠った。くーくと、気持ちのよさそうな寝息が聞こえる。シャネラはテューサの頭を片手でぎゅっと抱きしめて、

「ごめんな・・・。」

と、もう一度呟いて謝った。

結局、シャネラは一晚中起きていた。そして、朝ご飯の干し魚を食べているところで、ルビスが目を覚ました。

「・・・おはよう。・・・テューサは？」

目を擦りながらルビスは尋ねた。テューサは未だシャネラの腕の中で眠っている。シャネラは魚を食いちぎって、口の中に放り込んでから喋った。

「多分・・・大丈夫。昨日、少しだけの間目を覚ました。」

「そう。・・・後遺症が残らなければいいんだけど。」

ルビスは鞆の中に入っている干し魚に手を伸ばしながらぼつりと呟いた。そして、魚を食べ始める。

「・・・え・・・。」

あまりよく聞き取れなかったシャネラは、聞き返そうかと思ったが、テューサが起きないことには、それについて口論しても仕方ない。諦めて、食事に没頭した。

第9部(5) (前書き)

テューサが久しぶりに登場。

第9部(5)

第9部 ―いざ、孤島へ……― (5)

「テューサを背負って海を渡れる？」

朝食を摂り終わったルビスはシャネラに聞いた。シャネラはルビスの問いに対して少し考えたがすぐに「ああ。」と返事をした。

「じゃあ、行こうか。」

ルビスは靴等を脱いで、前日と同じことをし、3人分の荷物を持って立ち上がった。シャネラはその行動に疑問を抱いた。

「……おい。お前そんなに持って、泳げるのかよ？」

「大丈夫。昨日泳いでみて、コツは掴んだから。それに、テューサを今危険な目に遭わせるのは嫌だからね。君は無事に次の島まで行ってほしいんだ。」

にっこり笑ってルビスは歩き出した。シャネラも立ち上がり、眠っているテューサを背負ってルビスを追った。

海に入ろうとするルビスに、シャネラは木刀を貸した。

「これ使えよ。食料が台無しになるのを、少しは防げる。」

ルビスは笑って礼を言った。そしてシャネラの靴を入れ、昨日シャネラがやったように、鞆を全部木刀に括りつけた。あつと何かを思い出したかのように、ルビスが突如顔を上げてシャネラを見た。

「海を癒してくれない？」

こくりとシャネラは頷き、腰を曲げて背中中のテューサが落ちないようにした。そして、ポケットから石を取り出す。目を瞑って唱えた。

「＜オールズ・シャナー＞。」

いつも通り、明るく輝いて光が海を包んだ。その光が消えてからルビスは海に入った。シャネラもそれに続く。

『テューサ……。無事ですか……。？』

テュクの声が聞こえた。私はなぜか声が出ない。目蓋さえ開けられない。

——私は大丈夫よ。

心の中で返事をした。それが届いたのか、テュクが話を続ける。

『心配しました……。良かった……。』

——心配？何の？

私は疑問に感じたことを素直に心の中で描いた。テュクはそれに答えてくれた。

『あなたは……。毒性のある……。海蛇に……。噛まれたのです……。』

——ええ！？そんな……。私知らなかった。確かに、海を泳いでいて、足が痛くなったけど……。足がつったのか、溺れたのだと思っていたわ。

『ルビスが薬を作ってくれました……。シャネラは一晩中、あなたを看っていてくれました……。』

——そうだったの……。本当に知らなかった。目覚めたら2人にお礼を言わなくちゃ。

『良い報せです……。ミヤウイザは……。この先に居ます……。』

私は目を瞑っているけれど、テュクが今、笑ったような気がした。

——ミヤウイザ？ああ……。仲間ね。っていうことは……。ライソカス国もあるってこと？

『頑張っ……。ここである程度休んだら、目覚めなさい……。2人は、あなたが目覚めるのを待っています……。』

——うん。ありがとう。

私はテュクにお礼を言って、目覚めることにした。2人が待つ、現実へ。

第9部(5) (後書き)

目指せ、400hit!!

第9部(6)

第9部 ―いざ、孤島へ……―(6)

テューサが目覚めたところ、ルビスとシャネラは2つ目の島まで泳ぎきり、休憩をしていた。

た。昼頃らしく、体を横にして寝かされているテューサの目には太陽の光が真上から差し込んで眩しかった。

最初はぼやけていた視界も、すぐに回復してその目で2人を捜した。テューサが目覚

ましたことに気づいたルビスは、駆け寄って、笑った。

「大丈夫？自分が誰だか分かる？僕の名前は？」

ルビスはすっかりテューサの主治医になっていた。後遺症のことを心配し、いろんなこと

を聞いた。テューサは起き上がらずに、笑った。

「私はテューサ。あなたはルビス。」

笑ったのはいいが、テューサは足に違和感を感じていた。右の足首が、痺れている感じ。

ルビスにこのことを言うべきかどうか迷ったが、心配させたくないことから黙っておくことにした。

テューサはもう一度辺りを見回した。シャネラがいないことに気づいた。

「……シャネラは？」

ルビスに聞いた。ルビスは笑って、

「昨日寝ていないからね。その辺の木陰で寝てるよ。」

と言った。「昨日寝ていない」をテューサは聞いてテュクから聞いたことを思い出した。

「あ……。私……。」

「昨日泳いでる最中に毒蛇に噛まれたんだよ。・・・覚えてる？」
テューサは首を横に振った。テュクにも言ったように、テューサは何も覚えてはいなかった。

「・・・ありがとう。」

そして、薬を調合してくれたことに対し、礼を言った。

「どういたしまして。・・・どこか痛いところとか、ない？」

ルビスは優しい。気を配ってくれた。

「あ・・・えっと・・・。」

黙っておこうと思ったが、ルビスが優しく聞いてきてくれるので、痺れのことを相談して

みた。ルビスは少し悲しそうな笑顔を見せた。

「そっか。ごめんね、僕、ちゃんと治せなかった。」

「ううん。ありがとう、ルビス。あなたのおかげで死なずに済んだのだもの。・・・この痺れはいつ消えるかしら？」

テューサは笑って、ルビスを元気付けようとした。しかし、ルビスはいつものようには笑

わず、浮かない顔をしている。

「分からない・・・。多分、ただの後遺症だからすぐに治るよ。それまで、僕がおんぶしてあげる。」

「え・・・。大丈夫よ。歩けるわ。」

テューサはやつと起き上がり、立ってみた。そして、歩いてみた。突き刺さるような痺れ

が痛いのか、顔を歪めながら歩いていた。精一杯普通に歩いたつもりだったが、ルビスは

見逃さなかった。足を引きずっていることに。

ちょうどその時、シャネラが姿を現した。

「・・・テューサ・・・。大丈夫なのか？」

振り返るテューサの瞳には、間近に立ったシャネラが映し出された。いつの間にかこんなに

も近くへ来ていたのだろう。

「えっと……。だ、大丈夫よ。ありがとう。」

咄嗟とつぱに嘘をついてしまった。テューサはシャネラの肩越しに見えるルビスに、目で

合図を送った。シャネラには黙ってて、と。ルビスはそれを認識したかのように、片目を

瞑こってウインクした。ただ顔は、仕方ないなあ、と言いたげだった。

「あっ、ねえ。聞いて。話があるの。」

テューサはそう言うと、シャネラから離れてその場に座り込んだ。シャネラも座り、ルビスは近寄った。

「テュクが言うには、この先にミヤウイザが居るんですって。」
.....

第9部(6) (後書き)

第9部終了です。

これからよろしく願います。

第10部（1）（前書き）

ルビス優し〜い♪♪

第10部 (1)

第10部 ―最後の微小孤島― (1)

ミヤウイザが自分たちの向かっている先に居ると聞いたシャネラとルビスは、いっそうやる気を増し、さっさと荷造りをして、目の前に憚る孤島へ泳ぐ準備をした。
はばか

テューサはそんな2人を見ていた。自分の足は、痺れていて動かすのは辛い。でも、泳がなくてはミヤウイザに逢えない。心の中で葛藤が揺れて、今何をするべきか考えられなかった。

ルビスは、そんなテューサが目にとまり、優しく言った。

「・・・大丈夫だよ。さっきも言ったでしょ。僕がおんぶしてあの島まで連れて行ってあげる。」

テューサは心配を掛けなくなかった。「ううん。自分で泳いで行くわ。」と言いたくて首を

横に振ったが、ルビスはもう、地べたに座っているテューサの腕を取り上げて、自分の肩

に掛けていた。ひょいっとテューサを背負う。

「ルビス・・・っ。私、泳げるから・・・っ。」

テューサは降ろしてもらおうと、ルビスの背中の上でじたばたする。しかし、ルビスはテ

ューサを1人で泳がせる気はさらさら無かった。自分の背中でもがくテューサを無視し、

彼女の足をぎゅっと持って海へ向かっていった。

テューサの慌てる声と、いつにもなくルビスが人の言葉を聞かずにいることが、シャネ

ラは気になった。そして、2人に歩み寄る。

「・・・おい。・・・テューサ泳げねえのか・・・？」

ぴたっとテューサはもがくのを止め、ルビスは普通にシャネラの方

を向いた。テューサは

焦った。シャネラは自分の足のことを知らない。知ったら、シャネラは自分をもっと責めるだろう。それが分かっていたからだ。

「え・・・あ、えと、泳げるのだけれど・・・。」
焦り過ぎて、テューサの声は上擦うわすった。

「この前言ったでしょ。傷がまだ完全に治っていないから、危険な目には遭わせたくないんだ。」

ルビスは笑ってシャネラに言う。先程の、テューサとの目で交わした約束を守ってくれる

ようだった。だが、シャネラは笑ったルビスに、少し考えてから口を開いた。

「・・・何か・・・隠してないか・・・？」

シャネラはルビスに言っていたが、目はしっかりとテューサの瞳を見ていた。テューサはそれに気づき、たじろいしてしまう。

「何も隠してなんかいないよ。さあ、呪文唱えてよ。泳げないじゃないか。」

ルビスは笑みを絶えずに、さらりと話題を変えた。自然すぎた。でも、シャネラには違和感―わだかまりが残る。

「・・・お前は、テューサを担いで泳げるのか？」

シャネラは性に合わず、ゆっくりとした口調で喋る。表情は暗くて、笑ってはいなかった。

「大丈夫。昨日、君がおぶってってくれたからね。次は僕の当番だよ。」

「そんなの、関係ねえよ。・・・＜オールズ・シャナー＞・・・。」
手を突っ込んでいたシャネラのポケットから青い光が零れる。それは、今唱えたシャネラ
のぼそつと言った呪文のように、小さく、憐れだった。

ルビスは、小声だったシャネラの呪文をしかと聞いて、また海へと歩き出した。もう、
テューサは暴れなかった。何も言わなかった。ただルビスの背中で、
後ろで寂しげな顔を
して佇むシャネラを見ていた。・・・自分が、この空気を作った原
因なんだと。ルビ
スにも、シャネラにも、ごめんと謝りたかった。

第10部（1）（後書き）

祝☆400HIT！

有難うございます。

更新遅れています。頑張ります。

第10部（2）（前書き）

久しぶりに、ゆっくりとしたお話です。

第10部（2）

第10部 ―最後の微小孤島―（2）

張り詰めた空気の中、一行は最後の孤島に着いた。あれから、幾日も費やした。どのくらいの数の島を泳ぎ渡ったことだろう。もう、サリナ国・シャル国・ネイス国のある島は見えやしない。見えるのは、自分たちが泳いできた、昨晚の宿にした島と、今足をつけている島。そして、先に見える今までの孤島より遥かに面積の広い島だ。あとは、全部青の世界。海だ。

テューサの足は、まだ治ってはいなかった。傷跡は消えたが、痺れが残っていた。傷が消えたことによって、包帯は取れたが、痺れが残っていると、言わなくても分かるルビスは、ずっとテューサを目に掛けていた。

まる1日を、最後の孤島で過ごした。シャネラは昼寝、ルビスは読書。何もすることのないテューサは島を歩いてみることにした。

ゆっくりとその場から立ち上がり、ふらりと歩き始めるテューサに、ルビスは少し目を向けたが、何も言わなかった。すぐに読書に戻った。テューサはこちらを見ていないルビスにひっそりと微笑んだ。

リハビリにもなるこの探険は、あまり変わらない青の風景を楽しむことも出来た。

青い中から時々魚が顔を出す。体も出して水面で飛び跳ねる。太陽が水面に反射して眩しい。海岸に下りて、水を両手ですくってみる。真っ青に見える海水は、手の中では無色で透明だった。その透き通った水はきらきらと輝き、綺麗だった。風が吹くと、潮風が香る。また、島に生える少数の木々は木の葉を揺らして音を奏でる。

テューサは、変わりばえのしない景色を、変に興味を抱いてずっと見ていた。その場に座り込み、何秒も、何分も、何時間も……。

時間が過ぎるのを忘れて、ただただ見入っていた。

夕方、赤く染まる空。それを真似たかのように、海も表情を変える。青は赤を混ぜた、紫のような色になっていた。またそれも、今までの何時間かは見られなかった風景で、ゆ

っくり堪能していた。自分でも可笑しいと思ってしまうほど、見入っていた。昨日までも見ていたはずなのに。

テューサはこうしてぼーっと景色を眺めていると、いろんなことを考えてしまった。これからの行き先、仲間、チキやウナの待つサリナ国……。 (チキやウナは海を見たことがあるのかしら。見せてあげたいな……。こんなにも綺麗なんだから。ウナ、泣いていないかしら。チキは、喧嘩をふっかけていないかしら……。) 考えることは心配事ばかりでも、心はしゃんとしていた。

ぼーっとして、心を休めたかったのかもしれない。思いをまとめたかったのかもしれない。空が薄闇に包まれていく頃、テューサはぱたんと横に倒れてみた。体の下に敷かれている砂が冷たかったが、大して気にも止めなかった。そして、そのまま夢の中へと誘われていった。

シャネラとルビスは、夕刻まで自分らのもとへ帰ってこないテューサが心配になっていた。直に辺りは、近くの物まで見えなくなるほど、暗くなる。2人は、テューサを捜すことにした。

捜し始めてから数分。小さな島だけあって、すぐにテューサは見つかった。横に転がっているの、見つけたとき、シャネラとルビスは驚いてすぐに駆け寄った。しかし、近づいてみると、心地良さそうな寝息が聞こえる。2人は顔を見合わせて、一緒に安堵の溜め息をついた。そして、シャネラはテューサを、海岸から少し離れた場所まで担いでいった。揺らしても、少し手荒に扱っても、テューサは起きなかった。

ルビスはそこで火を熾し、食料を出して炙り始めた。シャネラはテューサに、自分のジャケットを被せて、ルビスにならない、食事の

準備をした。

そして、最後の微小な孤島で、床に就いた。

第10部(2) (後書き)

目指せ、500HIT!!

第10部は短く、今話で終了です。

第11部をお楽しみに。

第11部（1）（前書き）

ついに、ライソカス国に！？

第11部 (1)

第11部 ― 幻の紅いライソカス国 ― (1)

最後の微小な孤島から、目の前にあった、それよりも遥かに大きな島へ辿り着いたテューサ・シャネラ・ルビス。ライソカス国があるかはまだ分からないが、幻と言われていた国が存在するかもしれない島が存在したことは確かだ。面積がとても広いので、国がある確率が高いとルビスはふんでいた。その言葉に、テューサもシャネラも期待を寄せる。

この島は、サリナ国・シャシル国・ネイス国の3つを兼ね備えたような島だった。天候が少し悪そうに見え、海は穏やか。木々などの自然もたつぷりと生い茂っていた。

3人が周りを見渡してみると、人工的な部分が見つかった。洞穴のようになった洞窟。森の中には葉や枝をたくさんかけて、屋根に仕立てた小屋のような建物。これらを見て、確かに人がいる気配はした。

島に着いて幾日か歩いていた。すると、街のような、集落が見えたような気がした。テューサの足は、ルビスの必死の治療で回復していた。痺れはもうない。それで、3人で歩いていると、ルビスが言った。

「あれ・・・集落じゃない？」

ルビスの指さした方向を、テューサとシャネラが見てみる。よくは見えなかったが、家の屋根と煙突らしきものは見えた。3人で顔を見合わせ、疲れきった顔が、喜びの表情でいっぱいになった。

「・・・そうかも！」

「行ってみよう!!」

シャネラの言葉が合図となり、3人は一斉に駆け出した。

先程見つけた集落の、一歩手前まで来た。距離が長かったので、3人とも肩で息をしていたが、それ以上に興奮していた。

見つかった！幻とまで言われていた国が、今、自分たちの目の前に存在している！思っていることは皆同じだった。

シャネラが、一歩先を踏み出して、集落の門をくぐろうとした。

その時、テューサが彼の服を引っ張り、歩みを止めた。

「・・・ああ」

何がしたいか気づいたシャネラは、テューサを手招きして先に行かせた。テューサはシャネラにっこりと微笑んで、首に掛かっているくテュク>を両手で包んだ。一歩前に出て、目を瞑る。

「<プネマ・テルヌーラ>」

テューサの優しく囁いた呪文は、光を帯びて、街の中へと引き込まれていった。

「さ、行きましょ」

テューサはシャネラとルビスの方を振り返り、笑顔で言った。

「ああ」

「うん、行こう」

2人も少女に笑顔を返した。しかし、この笑顔はこの後すぐに消えることとなる……。テューサの呪文は意味を成さなかった。

第11部(2)(前書き)

紅く紅くお国へ到着。

第11部（2）

第11部 ― 幻の紅いライソカス国 ―（2）

門をくぐると、活気的な雰囲気に包まれた。商店街のような通り。その裏には住宅地が広がっている。ずっと奥には、ライソカス城と思われる、城が見えた。

3人は街の雰囲気圧倒されてその場に突っ立っていたが、すぐに馴染み、街を歩き出した。

通りを歩いていると、ルビスはあることに気づいた。

「・・・皆、髪と瞳が赤色だね・・・」

ルビスに言われて、遠くから人々を見ていると、テューサとシャネラもようやくそのことに気づくことが出来た。

「本当だ・・・」

「俺たち、目立っちゃうな」

シャネラが、自分の髪の毛を引っ張りながら呟いた。見渡す限り赤色。テューサ金髪、シャネラの黒髪、ルビスの茶髪は嫌でも目立ってしまう。

「ね、それよりも早く情報を集めましょうよ。」

テューサはそう言って、商店街を歩き始めた。シャネラとルビスも後に続く。

すると、すぐに商店街の人々の目は3人に向けられた。そして、騒ぎ出す。

「ちよつと・・・。この島の子じゃないんじゃない？」

「赤くねえぞ・・・」

「サリナや、そっちの国から来たんじゃない？」

そこらじゅうで中年のおばさんの井戸端会議が始まる。男たちもひそひそ声で話す。すると、その中から1人、勇んだ男がテューサた

ちに近寄ってきた。

「おい！ お前等どこの奴だ！？」

大きく響いた声に驚き、テューサは何も言えず、シャネラとルビスの後ろに隠れてしまった。シャネラは男をぎっと睨む。ルビスはそれを制するかのように、にっこりと笑って男に話し掛けた。

「僕はネイス国の者です。こっちはシャシル国。彼女はサリナ国です」

あっけらかんと素直に答えた。その返答を聞いて、男は顔を髪や瞳の色と同等くらいに真っ赤にした。

「この野郎！ よくも堂々とこの国に入ってこれたな！！」

男が叫んだのと同時に、井戸端会議をしていたおばさん軍団と、ひそひそ会話をしていた男たちが一斉に野次を飛ばした。

「そうだ！ この国に入ってくるな！」

「子どもだからって騙されないぞ！」

「出てけ！」

「この島は俺たちの物だ！」

テューサたちには何のことか分からないことを一斉に言われ、さすがのルビスも困り果てていた。飛ばされる野次を、しばらく黙って聞いていた。

「あ、あの・・・皆さん落ち着いてください・・・」

テューサは震える体を一生懸命制して、声を振り絞った。しかし、野次は止まらない。

「騙されるものか！」

この一声と一緒に飛んできた人の拳くらいの石が、テューサの頭に当たる。鈍い音がして、次に地面と石が触れた音がした。

「きゃっ！」

咄嗟に、当たった箇所を手で塞ぎこむ。腰を屈めて蹲うつすくってしまう。

「大丈夫！？」

ルビスはテューサに駆け寄った。シャネラは舌打ちして、顔はもう怒り満面だった。今にも、木刀を構え、男たちに振りかかろうとし

ていた。

——と、その時、野次を飛ばす集団の後ろから、声が聞こえた。

「・・・何の騒ぎかな？」

集団は後ろを振り返り、瞬間驚いていた。しかし、最初から勇んでいた男は、驚きもせずに後ろに立っていた老人に大きな声を出した。
「大臣！ こいつら、リイル族ですよ！ ライソカスに乗り込んできたんです！」

「そんなつもりじゃ・・・」

テューサはすぐに誤解を解こうと、顔を上げて男に言ったが、逆に睨みつけられて、たじつとしてしまった。老人は、ずっとこつちを見ていた。この老人もまた、齢で少なくなっていたが、赤い髪をしていた。もちろん瞳も、赤。

「大臣殿ですか？ 少し、お話を聞いて頂きたいのですが」

ルビスは、ずいっと前に出て、はきはきと言った。辺り一同皆が、大臣と呼ばれた老人とルビスに注目していた。

「大臣！ こんな奴等の話なんか、聞く時間が勿体無い！ さっさと追い出しちゃいましょう！」

男はなおも大声を張り上げる。老人は少し考えを巡らせているような態度を取っていた。ルビスはじつと老人を見つめる。老人もルビスをずっと見ていたが、ふと、シャネラの後ろに体半分を隠しているテューサに目をやった。そして、顔色が急変した。

「その者たちを城へ」

一言、周りの者に告げた。勇んだ男はにやっと笑って喜んでいた。

「地下牢ですね！？ 分かりました！！」

ふう、と大臣は溜め息をついて呆れた口調で言葉を付け足した。

「いや、大切な客人だ。牢になぞ、入れられない。・・・さあ、御三方よ。街の者が失礼をしましたな。謁見の間までご案内を致しますよう」

「な、何故ですか！？ こいつ等、侵略者ですぜ！？」

男は納得いかず、辺りに響き、反射するかと思うほど、大声を出し

た。現に、遠くまで響いているようだったが。

「通しなさい。また後で説明しよう」

大臣は役柄の威厳を利かせた。ルビスはすぐさま、大臣の後ろを着いて行った。テューサとシャネラもあとから続く。街の人々は3人を阻みはしなかった。ただただ、呆けて見ているだけだった。

第11部（2）（後書き）

ありがとう！500HIT★☆★
あと2人の仲間を見つけて、完結。
頑張るよ～～？？

第11部(3)(前書き)

大臣の長い、長〜いお話・・・。

第11部(3)

第11部 ―幻の紅いライソカス国―(3)

大臣が案内してくれた部屋は、謁見の間ではなく、小さな一室だった。シートと毛布が綺麗整えられたベッドが1つ、タンスが1つ、本がぎっしり並べられた本棚が1つ、ソファ―2つにテーブルが1つあった。これらを見てみると、どうやら、大臣が使っている、城の数々の部屋の中から拔擢された部屋なのだろう。

大臣は、3人を部屋へ入れるとドアを静かに閉めた。

「ここへお座り下さい。お疲れでしょう。お茶を用意しますので、しばらくお待ちください」

テューサたちは1つのソファ―に3人で座った。ソファ―には空間が余るほど余裕があり、かなり大きな物だった。大臣は彼女らが座るのを確かめてから、赤髪・赤目の侍女を呼び、飲み物の用意をさせた。

「・・・謁見の間ではないようですが」

ルビスはもう片方のソファ―に座りかけている大臣に問いをぶつけた。テューサも真剣に大臣の方を見ていたが、シャネラは街の人々の行動にまだ怒りが収まらないのか、膝を組み、その上で頬づえを置いて仏頂面だった。

「すみませんな。ここはわしの部屋でして。国王様は今・・・お忙しくてな。・・・話を聞いてはくれませぬか」

軽い溜め息をついた後、今いる部屋の正体を明かしてから本題に入ろうとしていた。シャネラはそんな大臣の言葉を聞いて、舌打ちをした。

「・・・街の奴らは俺等の話を聞こうとしなかったのに、俺等にはそっちの話を聞けと？」

テューサは言葉に怒りを込めているシャネラを、「シャネラ」と名

を呼んでいさめようとした。大臣はお構いなしにそれを苦笑で交わした。

「申し訳ない。多分、あなた方は真実の歴史をご存知ないのでしょ
うな。長くなりますが、そこからお話しましょう。しばらくの間、
耳を傾けてい てくだされ」

大臣は、語り始めた。

「大昔、自然と人々が荒れるという、危機がこの世界を覆った。
海は淀み、森林は枯れ、異常な気候が続いた。更に人々の間では紛
争が絶えず、互いが互いを憎しみ合っていた。・・・これが多分、
あなた方の故郷にある歴史書が語っている事柄でしょう。・・・し
かし、現実には違ったのです。

現実が起こったこと・・・それは、単なる人々の口喧嘩から起こ
った戦災だったのです。わしも、その時はまだ生まれておりません
ので、真実を 語っているライソカス国の歴史書を読んで学んだの
ですがね。

その大昔、まだ世界には島が1つしか存在しなかった頃です。島
には4つの国が栄えておりました。現在も存在する、サリナ・シャ
シル・ネイス。そして、ライソカスでした。

4つの国のうち、何故かライソカス国の民だけ、髪と瞳の色が深
紅でした。老いていく者も、新しく生命を宿す子も。このことから、
わしらはク ラーヌ族と呼ばれるようになったのです。クラーヌ・
・『紅い』という意味ですね。サリナ国やシャシル国・ネイス国の
民と同じリイル族なのに。別々に差別されてしまったのです。

そして、色々な貿易都市では喧騒が頻繁に起こるようになりました。
た。このときはどの国も船を所持していたそうです。多分戦争の後、
悲劇を見た くないことを理由に、シャシル国しか持たなくなった
のでしょな。

サリナ国などの他3国の民はクラーヌ族を見つける度、『不吉だ』
『血の色だ』などとライソカス国民を罵りました。そして、腹を立

てたライソカス国民はついに、世界を敵にまわして、世界全土に及ぶ、範囲の大きな、大戦争が起こってしまったのです。

今までの話から分かるように、状況は1対3でライソカス国は圧倒的に不利でした。あつという間に勝敗は決していたのです。

この戦争で、海が人々の流す血で汚れ、火災で森林は朽ち、空には暗雲が広がるばかり。そして、たくさんの人々が命を落としました。戦争は、勝敗を結しても、ライソカス国が滅するまで3ヶ国は止めようとはしませんでした。それもそのはず。自分たちは有利なのですから。

これを止めたのが、5つの魔石です。そう、あなたたちの持っている、魔石です。あなたたちは『平和』の石を持つ者でしょう?」

第11部（4）（前書き）

ミール・ストーンの歴史が分かってきたでしょうか？
いよいよ、大臣のながあいお話も終わります。

第11部（4）

第11部 ― 幻の紅いライソカス国 ―（4）

やっと一息入れた大臣は3人に問い掛けることによって、口を休ませていた。侍女の運んできたお茶を一口飲む。

テューサは首に掛かっている白い石を手で包んだ。シャネラはポケットから真っ青な石を取り出す。ルビスも新緑に染まった石を靴から取り出した。3つの石を確認すると大臣は、にっこりと3人に微笑んでまた話を続けた。

「石の出所・・・生まれた場所は今も解明されていませんが、神なる者が造ったと聞きます。そして、遙か大昔も5人の少年少女が魔石を操り、世界を平和に導いたそうです。しかし、古文書には一度魔力を開放したら、石は朽ちて灰になると書かれています。この理に反して、今現在石が存在している・・・何か、消えてしまっただけではない問題が石にはあるのではないのでしょうか。わしはこう思うのです。・・・世界を1つに戻す。石たちはこれを望んでいるのではないのでしょうか。『平和』の石と呼ばれているくらいですから、そのために消えず、今もなお世界を想い続けている。

話を戻しましょう。魔力を開放したが、消えることはなかった魔石は、世界のいろんな場所に飛び散ったそうです。・・・おまけに魔石使いの5人も 姿を消して行方不明になってしまったとか。この飛び散った時に、世界が割れたのです。人々への戒めだったのでしょうか。遠く、遠くかけ離れた場所に、孤島としてライソカス国は新たに生まれました。そして、現在に至ります」

真剣に、大臣を、紅い瞳をずっと見ていたテューサたちは、息をするのも忘れるくらい聞き入っていた。少しの間、沈黙が流れた後、

ルビスが口を割った。

「・・・そんなことがあったとは、知りませんでした。・・・僕たちの国の学者や研究員、昔の人々は、今大臣殿が話されたような過去を、隠したかったのですね。自分たちの過ちを。だから・・・僕たちの国にある歴史書には簡単にしか触れられていなかった」

ルビスの言葉に大臣は顔を苦くして、こくりと頷いた。テューサとシャネラは何も言わなかった。感想を言うこともなかった。

「実は・・・あなた方に謝らなければならないことが1つ、あるのです」

大臣は申し訳なさそうに、口を開いた。ルビスは愛想良く笑って話すことを薦めた。

ルビスから薦められ、大臣は今まで軽々と動かしていた口を、もごもごとしながら話し始めた。

「・・・我がライソカス国にも、魔石使いがおります。それはご存知でしょう。その者は・・・ライソカス国の王女なのです」

「それが、俺たちに謝りたいことなのか？」

第11部(5)

第11部 ―幻の紅いライソカス国―(5)

シャネラはついに口を出した。大臣は首を横に振った。

「いえ……。御三方、ライソカス国にまつわる、お伽話を聞いたことはありませんか？」

テューサははっと思い出した。リュードの村で聞いた話。そして、それを口にする。

「……『城の農民姫』……！」

大臣は苦笑して話を続けた。

「その通り。それは現実にあった話でしてな……」

「まさか……。その、僕たちの仲間であるこの国の王女が、この城にはいないと……？」

ルビスは大臣に思わず聞いた。こくりと頷き、口を動かす。

「王女は御名をディルと申す。ディル・フィネット様。ディル様は普通の王女とは違い、全然大人しくしておられんです。舞踊よりも習うは武闘。父君である王が止めても、一向に止めず。元気があってよろしいのだが……」

現在15歳でして、16になると王族式が行われます。今、後継ぎはディル様しかおらず、幼き頃から王に無理矢理付けられた許婚と未来を誓わねばなんのです。それが苦に思いになられたのか、ちょうど、15のお誕生の日が巡ってきた日に、姿を消してしまわれたのです。荷物ありませんでした。

これを機に、国王様は病んでしまつて、国民には内密にしてあるのです。あれから半年くらい経ちますが……。一向に搜索報告は掴めないのです。王女が行方不明となり、国王が病氣だと知れば、国が傾きかねない。国王様が今、お忙しいというのは嘘です。申し

訳ない。

だから、あなた方をお願いしたいのです。デイル様を捜してはくれませぬか……」

唐突な大臣の頼みを、3人は飲み込めずにいた。沈黙が広がった。そして、ついにテューサが口を開く。

「……『城の農民姫』ということは……どこかで、密かに農業を営んでいるということですか……?」

大臣は俯いていたが、テューサの質問を聞いて、顔を上げた。

「そのことですが。街の者の噂によると、つい最近、今までよく働いてくれた少女がその働いていた農家を出て行ってしまったとか。更にその少女は身元が不明らしい」

「デイル……とお呼びしてよいでしょうか。その少女がデイルだという可能性は十分高い訳ですね」

ルビスは一言謝ってから、自分の考えを述べた。大臣は頷く。

「どこに行ったのか分かんねえのか?」

テューサとルビスが敬語を使っているのに対し、シャネラは相手が大臣という身分が高い人なのに、普段使うような言葉で喋った。しかし、大臣は気にしない。テューサとルビスはほっとしていた。

「わかりません。下手にわしが聞くと、民も怪しがるでしょう。わしは深く聞いていないのです。城の侍女が、ちらりと聞いてきた話なのです」

「そうですか……」

ルビスはふうと溜め息をついて、その場に立ち上がった。他3人はルビスを見上げる形になった。

「どうなされたのです?」

「窓の外をご覧下さい。もう夕刻です。この場を失礼し、宿へ行こうかなと。……あ、デイルはしっかりと僕らが見つけてきますよ。安心してください」

にっこりと微笑みながら言うルビスに対して、大臣は慌てた。立ち

上がる。

「そんな。城で休んでください。部屋は余っております」
テューサとシャネラも立ち上がった。

「有難う御座います。でも、ご迷惑はお掛けできません。大丈夫です。明日から早速出発しようと思っているので」

「ディルが見つかったら、一度、お城に顔を出しますね」

「街の奴等に、俺たちのこと言っといてくれよ」

テューサたちは一言ずつ言い、頭を下げて順に扉から出て行った。
大臣は何も言わず、ただ彼らの後ろ姿を眺めていた。そして、聞こえない程の声で呟いた。

「・・・頼みましたぞ・・・」

第11部(5) (後書き)

第11部終了です。

ディル姫を捜し出せるのでしょうか!!

まあ、話の流れからして見つけるのですがね。

ストーリー展開をお楽しみに♪

目指せ、600HITです。

みなさん、いつも有難う～～★☆

第12部(1)(前書き)

誤解が解かれました・・・ふう。
よかったね、三人とも!!!

第12部（1）

第12部 ―時を癒すミヤウイザー―（1）

大臣の話を聞き終わり、宿を取るため城を後にした。警備兵が3人に向かって敬礼をする。・・・どうやら、大臣がテューサたちのことを街の者、及び城の兵士らに伝えてくれていたらしい。不思議そうに見られはするものの、軽蔑の眼差しでは見られずにすんだ。3人、ほっと心を撫で下ろす。

テューサは城を出てすぐに、もう一度街へ入る前に唱えた呪文を口に出した。いつも通り、石も声に反応して、輝く。

宿がどこにあるか分からない3人は、商店街へ入って聞き出すことにした。ついでに、『農民姫』のことも。

すると、商店街に入って間もなく、先程の勇んだ男が3人に近づいてきた。シャネラが少し用心して木刀をぎゅっと握り締める。それを隠すかのようにルビスが微笑みながら男に話し掛けた。

「・・・何か御用ですか」

ルビスが話し掛けてくるとは思わなかったのか、男は驚いた顔をしていた。しかし、すぐに口を開いた。

「・・・さっきはすまなかったな。リイル族だったもんだから、『平和』の石のことをすっかり忘れてたんだよ」

男は謝った。テューサは目を丸くしていた。シャネラはふっと木刀を持つ手の力を抜いた。

男の大きな詫びの声が辺りに聞こえたのか、商店街の人々もわらわらと出てきて、口々に

3人に向かって謝った。

「こちらこそ、真実の歴史を知らなかったものですから。・・・すみません」

ルビスは笑って、大きな声で言う。周りに集まる人々全員に届くよ

うに。そして、問う。

「申し訳ないんですが・・・宿はどこでしょうか。僕たち、長旅をしてきて疲れてるんです」

「ああ、宿ならこっちよ。旅人がいないから宿っていう宿じゃないけどね。ウチに来るといいよ」

若い女が3人に向かって手を振りながら叫んだ。空いた人込みの中の道を、テューサたち

は一列になって通る。そして、さっきの女のところへ行き着いた。

「一晩、よろしくお願いします」

「『平和』の者なら大歓迎よ！ さあ、こっちよ。皆、失礼するわねー！」

女は集団にもう一度大きく手を振り、帰路についた。テューサたちも女を追いかけるようにして後に続く。

第12部（2）（前書き）

ハンナの宿の部屋で――。

第12部(2)

第12部 一時を癒すミヤウイザー―(2)

「ここよ。自由に使ってね」

女に案内された一室は、簡素なものだった。ベッドが4つ。それだけしかない

部屋に案内された。

「ごめんなさいね。さっきも言った通り、この国は旅人がいないのさ。だから宿なんていないんだよ」

苦笑いしながら女は言った。

「じゃあ、どうして・・・？」

「たまあに、夫婦喧嘩して家を逃げ出してきたダンナとかが泊まるからあるんだ」

今度は苦笑いなどではなく、普通に笑って、テューサの質問にあっさりと答えた。

「食堂は1階だから。また準備が出来たら呼ぶよ。ゆっくりしてて・・・あ、それと、私のことはハンナって呼んで」

部屋から出ながら、自分の名を告げた。そして、扉が閉まる。トン、トン・・・と階段を下りる音がする・・・。ハンナが去った。

と同時に、シャネラは1つのベッドにうつ伏せに倒れこんだ。ばふっ、と音を立てる。テューサとルビスは少し驚き、顔を見合わせた。

「ど・・・どうしたの？大丈夫？」

テューサとルビスが声を合わせてシャネラに声をかけた。ごろん、とシャネラは寝返りを打って仰向けになり、顔をこちらに向けた。

「ははっ。2人で同じこと言うなよ。・・・大丈夫だ。泳ぎっぱなしで、疲れてる上に、大臣のあんなに長い話を聞かされたんじゃない。身がもたねえよ」

シャネラは笑った。シャネラ自身も、久しぶりに大きな声で笑った気がしたし、テューサ

とルビスも仲間の思いっきりの笑顔が久々に見れた気がした。

ルビスが残っている3つのベッドのうちの1つに腰掛けた。テューサも余りのベッドに

腰掛ける。

「・・・さて、これからどうしようか」

ルビスは少し真剣な目つきでシャネラとテューサを順に見た。シャネラは寝っ転がったま

ま、天井を見上げて言った。

「どうしようもねえだろ。情報がなくちゃあ」

「食事の時に、ハンナさんに聞いてみようよ。今は、休憩しよう？」
テューサがにっこり笑って決断を下した。

「・・・そうだね。疲れてるし・・・」

「ほら、ルビス。久しぶりの布団だよ。それに、毛布。気持ちいいよ」

ころん、とベッドに横になりながら、テューサはルビスにベッドに横になることを勧める。

ルビスも、それに対して横になり、笑った。

「本当だ。気持ちいいね。地面は固いし、冷たいもんね」

「・・・静かにしろよ。こっちは眠いんだよ」

シャネラはぼそつと言った。テューサはくすつと笑って

「食事まで、皆で一眠りしましょうか」

と誘った。この言葉を引き金として、すぐさま3人は眠りの中へと落ちていった。

第12部(3)

第12部 一時を癒すミヤウイザー(3)

私は、宿で眠ったあと、テュクに会っていた。

『よかったですね……。傷が治って……。』

「うん！ ルビスには感謝しなくちゃね。……。それよりも……。ミヤウイザーはどこにいるか、テュク知らない？」

私は、傷が治ったことを体全部で表現し、その後、別の話を切り出した。テュクは悲しげな声で返事した。

『分かりません……。この大陸にいることは確かですよ……。』
「本当!？」

『ランクルに会いたいよう……。』

シャーマが俺に哀願をしてきた。でも、俺にどうしろと言うのだろう。……。シャーマは石なのに。

「……。その、ランクルって奴の、どこが好きなんだよ」

俺は一応、シャーマの話にのってやった。まあ、少し興味があることも確かなんだけどな。すると、シャーマは上機嫌になって、ぺらぺらと喋り始めたんだ。

『えーとね……。とにかく、可愛いんだ……。優しい……。この後、シャーマの、ランクルに対する想いが長々と語られた。俺は、半分聞いてなかった。……。もう、長話は勘弁してほしい。』

「ランクル、ミヤウイザーはどこにいるの？」

『わからないわ……。この大陸にはいそうだけど……。』
ランクルは、僕の質問に対して、困り果てているような、か細い声

を出した。僕は、ちょこつと良心が痛む。

「そ、そんなに気を落とさないで……。大丈夫、ちゃんと見つかるから」

心配させないように、僕はランクルに言う。どうやらランクルは泣き虫で心配性らしい。僕の直感だけど。これ以上、今回夢の中でランクルに不快な思いをさせないように、別の話を持ちかけて話を弾ませた。

現実――。一番最初に戻ってきたのはテューサだった。

「ふわあ。シャネラたちはまだ夢の中みたいね……」

大きな欠伸を1つして、テューサはベッドから出て、眠っているシャネラとルビスの体の上に毛布を掛けなおしていった。シャネラは寝相が悪いのか、毛布はベッドから落ちてしまっていた。

「……。風邪ひいちゃうじゃない……。……。あら？」

テューサがシャネラに毛布を掛けると、戸をノックする音が聞こえた。テューサが「はい」と声を掛けると戸が開いて、ハンナが姿を現した。

「食事よ……。って。寝てるの？」

「疲れてるんですよ」

テューサは笑って理由を述べた。ドアに凭れかかって、くすりとハンナは笑ってテューサに問い掛けた。

「さて、食事の準備は整ってるんだけど……。起こすのは可哀想かしら。寝かせておいてあげる？」

「そうですね……。自然に目が覚めるまで待ってましようか」

「あんたはどうする？ ご飯先に食べるかい？」

眠っている少年たちに向けていた紅い瞳を、テューサに向けた。

「どうしましょう……」

「また後で温め直してあげるからさ。あんたは先に食べなよ。ところで、名前はなんて言うんだい？」

迷っているテューサを強引に食事に誘った。テューサの腹も、鳴っ

た。

「テュ、テューサです……。あっちがシャネラで……。そっちはルビス……」

指さしながら、テューサは3人分の名を名乗った。ハンナはにっこりと笑って

「そうかい。さあ、テューサ。せっかくのご飯が冷めちゃうよ。行こうか」

テューサの腕を引っ張りながら、1階の食堂まで下りていった。

第12部（3）（後書き）

さて、どんな話が聞けるのでしょうか。
次話をお楽しみに。

第12部（4）（前書き）

ハンナとヘルグに情報を聞き出します。

この辺はあまり面白くないかも・・・（汗）

いやいや、やっぱしでも頑張って書いたんで読んでください!!

第12部（4）

第12部 一時を癒すミヤウイザー（4）

それほど大きくない食堂に入ると、1人の赤髪の男が腕組みをして、テーブルにつき待っていた。

「・・・遅い」

「ごめんなさい。この子の連れが寝ちゃっててね。起こそうか話合ってたのよ」

テューサを椅子に座らせながら、ハンナは言った。

「ああ、テューサ。こっちは私の兄貴で、ヘルグっていうの。兄さん、この子はテューサよ」

ハンナが丁寧に紹介してくれた。ヘルグに対して、テューサは軽く頭を下げた。

「テューサです。よろしくお願いします・・・」

「堅苦しい挨拶はいいから、飯にしようぜ。腹が減ってるんだ」

テューサに笑顔を向けて、視線をテーブルの上の料理に向けた。カチャカチャと、音がして、

食事が始まる。

食事が始まってすぐに、ルビスが食堂に下りてきた。

「ルビス！」

「起きたのか？」

「さ、こっちへ座って」

眠そうな顔を、一生懸命笑顔に変えていた。

「有難う御座います。・・・こちらは・・・？」

ヘルグをまだ知らないルビスは、テューサに尋ねた。

4人で食事をしながら、テューサとルビスは情報を集めた。

「あの、街で農家の事について何か噂があるそうですが・・・」

ルビスはハンナとヘルグに尋ねた。

「ええ。あるわよ。私たちも宿の経営だけで生活が成り立ってるわけじゃないからね。畑作をやってるんだ」

「近所の農家から聞いた話だな」

「そのことについて、詳しく教えてもらえませんか」

テューサは意気込んで話の内容を頼んだ。

「ちょうど、テューサたちと同じ年頃くらいの女の子が、農家に突然現れたんだってさ。あれはいつぐらいだっけ？ 兄さん」

ハンナは顎に人差し指を当てながら考えていた。ヘルグは腕を組み、目を瞑っていた。

「・・・1ヶ月くらい前じゃないか？」

「そのくらいになるかしらね・・・。で、不思議なことに、その女の子、身元不明らしいんだよ。でも、その子、てきぱきとよく働いてくれたんだってさ」

「その女の子、今どこにいるか知りませんか？」

ルビスは食事を止め、話を聞き入り、疑問に思ったことを素直に聞いた。

「いや・・・。ついこの前、急にいなくなったらしいぞ」

ヘルグは続ける。

「その農家の人に、話を聞いてみたいか？」

「はい！」

テューサは元気良く返事をした。ヘルグはくすつと笑って席を立った。

「・・・待ってな。今、その人の家への地図を書いて・・・」

ヘルグの言葉が終わらないうちに、上階からどん！と物音がした。

テューサは驚いたが、

すぐに食堂を飛び出し、2階へ駆け上がって部屋へ辿り着いた。

「・・・シャネラ！？ どうしたの！？」

テューサの後ろからルビスとハンナが上ってきていた。シャネラは

床に転がっていた。

「・・・っ。痛てえ・・・」

「シャネラ・・・。ベッドから落ちたの？」

シャネラに駆け寄り、テューサは心配よりも真実を確かめた。

「ああ、まあな・・・」

恥ずかしそうに言う。痛がっている背中を、テューサはさすってやった。痛みが和らいでいくのか、歪ませていたシャネラほころの表情が綻ぶ。

「ベッド小さいかしら？なんなら、余ってるもう1つのベッド、くっつけてもいいけど？」

ハンナが意地悪そうにシャネラに言った。苦笑いして、シャネラはそれを断った。

「・・・少年、大丈夫だったか？ほら、お嬢ちゃん。地図だ」

下で地図を書いてくれていたのか、今まで部屋に姿を見せなかったヘルグが、ハンナの後ろから顔を出した。その長い手で、テューサに紙切れを渡す。

「・・・あ、有難う御座います！」

渡された紙に書かれていることをちらりと見た後、スカートのポケットに閉まった。

「・・・さあ、改めて全員で食事をしようか」

ハンナがにっこり笑って、先頭を切り、階段を下りていった。

「腹減った・・・」

シャネラが一言呟き、立ち上がる。そして、ハンナの後を追った。残りの3人も、食堂へ向かった。

第12部（5）（前書き）

なんか少しつまらなくなっちゃったかも・・・。
でも読んでください！！！！

第12部(5)

第12部 一時を癒すミヤウイザー(5)

次の日、テューサ・シャネラ・ルビスは朝早くから行動を起こした。といっても、ハンナたちが畑作を営んでおり、早朝から畑へ出掛けるから、自分たちも出掛けよう。こう思っただけである。

道を歩いていると、シャネラは昨晚寝る前にもかなり寝ていたのに、テューサの隣で大きな欠伸をかましていた。テューサは、昨日ヘルグに書いてもらった地図を眺めて、一生懸命道を考えている。時折、ルビスがその地図を覗き込んでくる。

迷わずに・・・とは言えないが、早めに行き着くことが出来た。辺り一面茶色。耕した土が軟らかそうだ。その真ん中には家が一軒あった。そこが、今回の話の大元だろう。

その周りの畑に、1人^{くわ}鋤を持って仕事に精を出している男がいた。テューサたちはその男が何か知っていると思い、話し掛けてみることにした。近づく。

「すいません。デッドリーさんですか？」

ルビスが、ヘルグから聞いた男の名前を出して、確かめてみた。衣服が土まみれで茶色に染まり、肌は日焼けをして髪や瞳の色と変わらぬくらい赤褐色に焼けていた。そんな男は、テューサたちを怪しそうに見ていた。

「そうだが・・・あんたら・・・もしかして、城から令が出ている、リイル族3人衆か？」

「はい。確かに、私たちはリイル族です」

テューサはにつこりと微笑んで男に話し掛ける。男はせっせと働いていた手を少し休め、手の甲で額の汗を拭い取ると、テューサに向かって問い掛けた。

「・・・あんたら、最近まで居た娘のことを聞きに来たのか？」

殺伐とした言い方ではあったが、どこか優しさがこもっていた。

「え……。あ、はい。そうです」

先を回られていたことに、動揺するルビス。大して支障はないのだが、今までライソカスの住民たちがここに聞きに来ていて、「もう話すのは面倒だ」とでも言われるのではないかと少し焦った。しかし、そんな焦りもすぐに消え去った。それどころか、また別のことで驚かなければならなかった。

「仕方ない。ほら、あそこの家に行くぞ。中は汚いがな。茶でも飲みながら、話してやるよ」

デッドリーの家に移動したテューサたちは、城とは違い、床に直に座って、デッドリーの入れるお茶を待っていた。……。家の中は土まみれで、確かに汚かった。

座っていると、奥からデッドリーではない人物が顔を覗かせた。

「……おふくろ」

どうやら、デッドリーの母親らしかった。デッドリーはまだ30代くらいに見え、若そう

だったが、母親は痩せ衰えた感じが漂い、細々とした体だった。・

・老人に見えても仕方な

いくらい。

「お客さんかね？」

母親はテューサたちをじろじろと見ながら息子に聞いた。「ああ。」

と答えながら淹れたお

茶を運ぶデッドリー。

「この前の娘のことを聞きたいんだとよ」

「ほお。ディーンのことをかい？」

母親が口に出した名を、3人はしかと、耳で聞き取った。お茶を飲みながらでも、ちゃん

と。そして、3人で口を揃えて言う。

「ディーン？」

「ああ、その、娘の名前がディーンっていうんだ。そりゃ可愛い娘でさ、せっせと働いてくれたんだよ」

テューサは、「『ディーン』なんて、偽名だってバレバレじゃない」と口に出しそうになったのを、急いで堪えた。

「ディーンは、いくつぐらいですか？」

自分たちの仲間だと、一番簡単に手に入れられる情報を、ルビスは突いてみた。

「ちょうど、あんたらくらいだよ」

お茶をすすりながら答えるデッドリー。間髪入れずに、ルビスは質問を重ねた。

「ディーンは、どこへ行ったのですか？」

「さあ・・・知らないな。ある日、礼を言って出て行っちゃったんだ」

「残念だったねえ・・・。あんないい娘なら、あんたの嫁にしとけばよかったのに」

「おふくろ！」

デッドリーの母親は、笑いながら冗談をかましていた。こっちはそれどころじゃないのに。

ルビスはそこまで聞くと、昨日の城でのように、立ち上がり、礼を言った。

「有難う御座いました。テューサ、シャネラ。行こう」

デッドリーとその母親は、呆氣にとられていた。テューサとシャネラが急いで立ち上がり、頭を下げた家を出ていった。

第12部(5) (後書き)

祝600hit♪
有難うございます!!

第12部（6）（前書き）

お姫様搜索開始！！

第12部(6)

第12部 ―時を癒すミヤウイザー― (6)

「こっちは急いでいるのに・・・」

珍しく、ルビスがぶつぶつと文句を言っていた。テューサがそんなルビスを心配そうにち

らちらと見ている。シャネラは相も変わらず、眠そうな顔をして、欠伸をしていた。

「こっ、これからどこへ行こうかしら!？」

重い空気に包まれ、言葉が上擦ってしまった。ルビスは、テューサが自分を氣遣ってくれて

いることに気づき、にっこり笑って詫びた。

「ああ・・・そうだったね。ごめん。今から、あの人工的な洞窟に行ってみようと思って」

ライソカスの島に初めて立った日に、見た洞窟。そこへ行ってみようと、ルビスは言っているのだ。

「なんで、洞窟なんだよ。森にだって、怪しいのはあったじゃねえか」

シャネラはルビスに向かって問いただした。

「森の人工的な場所はどう見たでしょ。何もなかった。食料さえもね。だから、森にはいないと思うんだ。洞窟は、暗くてよく見えなかったから調べなかったでしょ。可能性が高いんじゃないかなーと思っ

「ふーん・・・」

「それに、森で枝とかを拾っておけば、洞窟で灯りとりにもなるでしょ。あんな暗い洞窟には、人々もそうそう足を踏み入れはしない。この前見たときも不気味に思えたしね」

さすがはルビス。頭をフル回転させて、あらゆることを考え、結果を出していた。ここま

で言われたシャネラは、何も言わずに洞窟の方角へ、足を運ばせた。

洞窟――。昼間だけあり、以前足を運んだ時よりも中が明るく見えた。火熾し木が残

りわずかしかなかったので、3人は灯りとなるものを何も持たず、洞窟の中へ入っていった。

「暗いわね・・・」

仲間の顔が見えるほどの明るさで、周りは真っ暗。その暗闇に少し怯えながら、足を前に出していた。テューサの口からは、振るえたような細かい声が漏れる。

「そうだね。でも・・・今のところまだ一本道だから、迷わないよ」洞窟の狭い道を、一列で歩いていく。テューサが一番後ろで、真ん中のルビスが、手が届いてしまうほどの両側の壁を、伝いながら歩いていた。

「そういう心配じゃねえんだろ、テューサ」

暗闇に怯えていることが、シャネラにはばれていた。テューサは何も答えなかった。

しばらく一本道が続き、それに沿って歩いた。

「広い場所に出るみたいだぞ」

先頭を歩くシャネラが、ふいに声を出した。

第12部(7)(前書き)

ついに・・・!!

第12部（7）

第12部 一時を癒すミヤウイザー（7）

列の最後尾を歩いていったテューサがその広い場所まで出ると、暗闇でも分かるほどシャネラはあちこち歩き回った。

「シャ、シャネラ……。暗いんだから、危ないわよ……。？」

そんなシャネラに声をかけるテューサ。ルビスはテューサの隣に立っているようだ。言った矢先に、シャネラは転んだ。

「……。ってえ……。？」

起き上がりながら苦痛な声を漏らした。

「だ、大丈夫！？」

「せっかくテューサが忠告してくれたのに、聞かないからだよ」

ルビスが暗闇に紛れて見えないシャネラにくすくすと微笑んだ。シャネラも、声の聞こえる方を睨みつけた。

「ここに何かあったんだよ。それに蹴躓いたんだ」

この言葉を聞き、テューサは今まで使わなかった火熾し木を使って、火を灯した。こうなったら、徹底的に調べなければならない。

立ち上がったシャネラはテューサから灯し木を受け取り、自分が転んだ場所を照らしてみた。

「……。何もないじゃないか」

ルビスが照らされた部分を見た。

「本当だわ」

「……。？」

黙り込んでしまったシャネラは、しばらく立ち尽くした後、ふいに灯し木を上に向けて辺り全体を照らし出した。

「誰だ！？」

一人の人影が洞窟の壁に映し出され、思わずシャネラは叫んだ。この声で、テューサとルビスはぼっと影ではなく人物そのものに目を

やった。

「・・・あ、あなたたちこそ、誰よっ？　ここから出て行って！」
灯りに映し出された人物は、テューサと同じくらいの少女だった。
テューサは声を掛けた。

「え、えと・・・。私たち、ある人を捜してるのですけど・・・」
「で、出て行ってーっ！」

テューサの言葉を聞かず、喚いている少女。テューサがおろおろと困っていると、見かねたようにシャネラが灯し木をルビスに渡して、少女へ歩み寄った。

「こ、来ないで！　出て行ってって言うてるでしょっ？」
「うるせえな」

ぐい、と少女の左手を取り、体を自分の方へ寄せる。そして、前かがみに引き付けられた少女の体を回し、右手を取る。すると、少女の両手は少女の背中でシャネラに掴まれ、自由を奪われていた。

「シャ、シャネラ・・・」
瞬く間にそれをやったのけ、それを目を見開いて見ていたテューサとルビスは、言葉も出なかった。

「・・・生け捕り成功」
「ちよっとー！　放してーっ！　いやーっ」

シャネラに両腕を掴まれ、自由を奪われた少女は、体を前へ倒したり、シャネラの足を踏んだりと抵抗していたが、シャネラは「痛え」と言うだけで、腕を放しはしなかった。

「生け捕りって・・・。放してあげなよ、シャネラ」
ルビスが少女を見ながら言う。

「もともと殺すつもりはねえし。ってか、こいつなんじゃねえの、
『農民姫』」

「放してってばあ！　喧嘩なら買うんだからっ」
「へえ。俺と喧嘩しようってか。無理だよ。俺強いし。その前に、あんた放したら逃げるだろ？」

妙な会話が成り立っている2人の間に、ルビスが割って入った。

「落ち着いて。僕は君を捕まえに来たんじゃないんだ」

「一緒じゃねえか」

「もんどーむよー！ あんたたちなんか、ぼっこぼこにしてやるんだからー！」

未だシャネラに自由を奪われているのにも関わらず、勇んだ口調で言葉を発する少女。テ

ューサは名を確かめた。

「あなた・・・デイル？」

名を呼ばれ、一瞬ぎくつと体を硬直させた少女。抵抗するのを止め、シャネラは少女をその場に座らせ、自分も座り込んだ。

「・・・そ、そうよ・・・。あたし、デイル・・・」

呆気なく、少女は自白し名を名乗った。テューサは嬉しくなって、少女に抱きついた。

「デイル！・・・デイル！」

「・・・テューサ・・・。すぐに抱きつくその性格、何とかならねえのか？」

シャネラはデイルの腕を放しながら、抱きついて涙を流すテューサに言った。ルビスは笑った。

「いいじゃない。4人目が見つかったんだから。嬉しいんだよ」

「ちょ、ちよつと・・・？」

慌てふためくデイル。そんな少女に、ルビスが説明した。

「僕はルビス・カーソン。ルビスでいいよ。さっき君を捕まえたのはシャネラ。今君に抱きついているのがテューサだよ。よろしくね」

「・・・ここから出ないか？ 暗くて、話がしにくい」

ルビスから灯し木をもらい、一足先にもと来た狭い一本道へ引き返すシャネラ。

「テューサ、聞こえた？ ほら、立って。いったん外に出よう。デイル、来てくれるね？」

デイルはふいと顔を背け、躊躇ったが、すぐにルビスの方を向いて

頷いた。テューサはデイルの首から離れ、デイルの手首を持って歩き始めた。

第12部(7)(後書き)

700hit!!

有難うございます!

第12部(8)

第12部 一時を癒すミヤウイザー(8)

洞窟を出た一行は、入り口の目の前で輪になり、座り込んだ。

「・・・単刀直入で悪いけど、デイル。君は魔石を持っているね？」
ルビスの問いに対し、顔を縦に振った。

「あたしも、テュー・・・サ？ みたいにペンダントにしてあるの
っ」

首に掛かったペンダントの、中央にある真っ黒な石を手の上に乗せて見せた。

「<ルフライイ・リカバム>！」

デイルは突然呪文を唱えた。通常通り、辺りが黒色に染まるかと思いきや、石の周り半径

10cmといったところか、わずかな範囲しか染まらなかった。

「・・・あれ？」

「もつとこう・・・全体に光らねえのか？」

シャネラはデイルに聞いてみた。デイルはにっこり笑って、答えた。
「あたしはミヤウイザー！ 時を癒すんだよ。“時”だと癒す対象の
ものが物質的じゃないもん。だから、それほど光らなくてもいいの
・・・ってラーミアが言ってたわ。でも、ちゃあんと呪文は効
いてるよ。だから、この国では本当の歴史が語られているんだもん
！」

デイルの説明が終わって、ルビスは溜め息をついた。

「・・・どうかしたの？」

「・・・まず、これからお城へ行って国王様や大臣殿にデイルの顔
を見せに行こう。・・・問題は、その後だ。最後のディザードがい
る国についての情報が、全くと言っていいほど、ない」

4人目の仲間が見つかって、喜んだのも束の間。テューサとシャネ

ラはルビスの話したことを聞いて考えた。

「そうよね・・・」

「ここの王や大臣が何か知ってるんじゃないかねえのか？」

「いや・・・その可能性はゼロに近い。国王が知っていることは普通、側近の大臣くらいは知っているはずだし、あの大臣殿だけが知っている情報なら、この前のときに話せばよかったんだ」

3人は一気に肩を落とした。しばらく沈黙が続く。

「・・・とりあえず、お城へ行こうよ」

デイルが口を開いた。

「何だ？ 国王か大臣が知ってるのか？」

「お父様も大臣も知らないよ。そんなことより行こ」

デイルは立ち上がった。それに続いて3人もしぶしぶ立った。

「じゃあ誰か、情報を持っている人がいるの？」

テューサが歩き出そうとするデイルの前に立ちはだかって、聞いた。デイルがそれ avoidance を避けて前へと歩き出す。

「デイル・・・！」

言い終わるが速いか、デイルがくるりと振り返って微笑んだ。長く長い髪が、風に靡いた。

「あたしが知ってるの！」

・・・・・・。

第12部（8）（後書き）

第12部終了です。

第13部もお楽しみに！！

第13部

第13部 ―王女の帰還と旅立ち―

デイルを連れた一行は、ライソカス城に着いた。途中から、道端で会う人々に分からないよう、デイルは顔を隠すように布を被っていた。

城までたどり着くと、デイルは布を取った。紅く、束ねた長い髪が現れる。城の兵士たちはデイルを見て驚いた後、すぐさま頭を下げ、扉を開いた。デイルは兵士たちに「ありがとー」と言って、堂々と中へ入っていった。遅れをとらないよう、テューサたちもあとから続いて入った。

城の中の者はどよめいていた。そして、その騒動に気づき、大臣が姿を現した。一瞬、目を丸くした。

「おお・・・！ デイル様。お帰りなさいませ・・・！ 皆心配しております」

「お父様に会える？」

大臣の言葉をかき消すかのように、デイルは一言、口早に言った。大臣は少し悲しげな顔をした。

「はい・・・。王もデイル様を心配しておりました。お会いになる前に、お召し物を着替えてはいかがでしょうか・・・」

確かに、デイルの今着ている服は、土まみれで、水簿らしい物だった。しかし、デイルはそれを冷たく断った。

「必要ないわー。今からまた、テューサたちと旅に出るんだもん。土なんて、掃えば落ちるわよ。それよりもお父様に会わせて」

大臣はしぶしぶ、デイルとテューサたち計4人を、王の寝室へ案内した。謁見の間でないことから、未だ王が寝たきりの状態になっていることが感じられた。

寝室の警備兵が頭を下げた。頭を上げ、デイルを見たとき、一瞬目を大きくさせて見るかのように、デイルをじっと凝視した。驚いたような顔つきで、慌しくドアを開けた。大臣が一番に入り、次にデイル。最後にテューサたちが入った。

「失礼致します。・・・国王様。デイル様がお戻りになられました」「なに？」

ライソカス国王は寝台から体を起こし、今入ってきた者たちの方へ目を向けた。目の下にはくまが出来ており、食事を十分に摂っていないのか痩せ衰えていた。国王は娘の無事な姿を見てほっとしたようだが、その前に驚いた表情を見せていた。

「おお。我が娘よ・・・。よくぞ無事に戻ってきた。心配しておったのだぞ。ジェムも・・・」

「お父様。ジェムの話はいいです。それよりも、お話があります」デイルは相手が国王であるのにも関わらず、その国王の言葉をさえぎった。体を起こした状態で、デイルの後ろに並ぶテューサたちをじっと見つめた。

「ふむ・・・。そちらの方々は、『平和』の石を持つ者かな？　とすると、旅に出ると？」

「ええ。世界を救う旅に出るわ」こんな話なのに、なぜ自分たちをここまで連れてきたのだろう、とテューサたちは思っていた。城の外でも待っているのに。仕方なく、後ろで立って聞いていた。

「全てが終わったら・・・ここに帰って戻ってくるのだな？」

「・・・分からないわ。でも、ジェムとの話はなかったことにしてほしいの」

テューサたちに、ジェムという人物は分からなかった。それでも、王と王女の会話は続く。

「なんと！　ジェムはお前の婚約者だぞ！」

「あたし、ジェムのこと嫌いじゃない。でも、あたしには別に、愛している人がいるの」

ここまできて、テューサたちはジエムという人物がようやく分かった。王は驚いた様子で、大きな声をあげていた。娘は、落ち着いた態度で口を開いている。

「それじゃ、行ってくるわねー」

きびすを返し、テューサたちと面面向かう。デイルは、テューサの目を見ながら、にっこり微笑んで、「行きましょっ」と3人に聞こえる程度の小声で言った。

「デイル！」

扉に手をかざし、開けようとしている娘を、王は声で止めた。デイルは振り返らない。王も、娘がどのような行動に出るか分かっていいのか、そのまま続けた。

「・・・気をつけて行ってきなさい」

「はい」

デイルは扉を開け、颯爽と出て行ってしまった。テューサたちも部屋から出ようとする。

「『平和』の石を持つデイルの仲間たちよ・・・。娘を、頼む・・・」

「

国王はテューサたちに一言声をかけてから、また寝台に横になった。

「・・・もう私たちは友達であり、仲間ですから」

テューサとルビスはぺこりとお辞儀をして、3人で部屋を出て行った。

城を出てから、商店街で食料の調達を終えたテューサたち。

「・・・で、どこへ行きたいんだっけ？」

「えっとね。ヘルグっていう人と、ハンナっていう人が営んでいる宿屋。お世話になったお礼を言ってから、旅に出ようと思って」

テューサとデイルは、笑顔で会話していた。後ろで、微笑みながらそれを見ているシャネラとルビス。

「・・・あっ、あそこよ。ハンナさーん！」

表で、掃除をしていたハンナを見つけ、テューサが手を振りながら、

大声で呼んだ。

「あ、お帰り。・・・あら。後ろの方は・・・」

「デイル・フィネットと申しますッ。・・・ご存知かしら？」

「お、王女様!？」

ハンナはびっくりしてその場にひれ伏した。テューサたちも驚き、肩をあげる。

「・・・おい。何だよ、うるさいな・・・」

中から出てきたヘルグも、ひれ伏している自分の妹に声を掛けながら、視線はデイルへ行き、言葉と共に動きが止まった。そして、妹の隣へひれ伏す。

「二人とも顔をあげてっ。今日は、テューサたちがあなたたちに会いに来たのっ」

「は、はい・・・」

ハンナとヘルグは顔をあげ、立ち上がった。しかし、俯いたままで、テューサたちの顔を見ることはなかった。おずおずとしている。

「あ、あの・・・。お世話になりました。また、旅に出るんで・・・」

「

「そ、そう。気をつけてね」

「・・・元気だな」

声の上擦りながらも、ハンナとヘルグは一言ずつテューサたちに言った。

「さー、行きましょー!」

デイルの一言で、旅が再開された。テューサは振り返り、ハンナたちに手を振り、街を出て行った。ハンナも、手を振り返してくれた・・・。

第13部（後書き）

第13部はこの1話のみです。14部をお楽しみに（＾－＾）

第14部（1）

第14部 ―暗闇の冒険―（1）

街を出てから、先頭立って歩くデイル。テューサは彼女に聞いたことがあった。多分、シャネラやルビスも同じことを考えていると思うが。

「・・・デイ、デイル？」

「なあに？」

テューサの問いかけに、後ろを振り返る少女。にこやかに笑っていた。その笑顔にどこか安心した感じがした。テューサは続けた。

「これから、どこへ行くの？」

デイルはなおも笑って、テューサを見、そしてシャネラとルビスを見た。

「あたしが見つかったから、あとは最後の一人のディザードを捜したいんでしょー？」

「そ、そうなんだけど・・・」

「だーからあ、あたしが居場所を知ってるんだってば」

テューサたちは彼女の放った言葉を飲み込みきれずにいた。少しの間、沈黙が流れる。

「どうしたの？」

硬直している3人に向かって、心配そうな表情をせずに聞いた。この言葉で、3人は我に返った。

「ど、どこに・・・？ どこにディザードはいるの！？」

ルビスは柄でもなく、大きな声をあげてデイルに尋ねた。デイルは、少し顔を歪ませて口を開いた。

「・・・あたしがいた・・・洞窟の、奥の・・・空の上」

途切れ途切れだったが、しかと聞いた3人はこれまた悩んだ。

「洞窟の、奥の、空の・・・上？」

3人が、口を揃えて言う。くすくすと、上品にディルは笑った。

「行けば分かるよ。びっくりするかもしれないけれど」

「うん・・・」

3人は、少女の後ろをついていった。洞窟に着くまで、一度もディルは3人の方を振り向かず歩いた。口を開くこともなかった。

一行は洞窟に着いた。

「さて・・・。灯し木みたいなのある？」

入り口手前でディルは止まり、振り返って仲間に尋ねた。それを聞いてテューサが皮袋から火熾し木を出す。

「ありがとう、テューサ」

にっこり笑って、木を受け取った。そして火を熾そうとする。

「おい。女がそんなことやったら、手の平がぼろぼろになっちゃうぞ」

最近無口だったシャネラが、木を持ったディルの手首を掴んだ。ディルは見上げる。

「お前、女王なんだろう？ 少し大人しくしてろよ」

「シャネラ・・・。ディルは王女だよ・・・」

ルビスに訂正をくらって、少々照れくさそうにしながらも、自分が今掴んでいる手首の手の平から、火熾し木をぶん取った。ルビスは、ふう、と溜め息混じりに肩を落とした。

「ディル。乱暴だけど、シャネラは根本的に優しい男なんだよ」

ルビスの言った言葉に、くすくすと笑う少女ら。会話のネタにされている少年は、ぶつぶつ言いながら火を熾していた。熾した火を、灯し木に灯す。シャネラはそれを持って立ち上がった。

「行くぞ」

「貸して。あたしが一番歩くっ」

シャネラは素直に灯し木を渡し、先頭を歩かせた。「ちゃんと着いて来てねー？」と言って、ディルを先頭に、ルビス・テューサ・シヤネラの順で洞窟に入っていた。

第14部（1）（後書き）

近づく度に言ってますけど・・・

目指せ、700hit!!

いつも読んで下さってありがとう。

第14部（2）（前書き）

すいません。前回、「目指せ700Hit」って言いましたが、800Hitの間違いでしたね・・・（汗）戻してどーする、私！！

第14部（2）

第14部 ―暗闇の冒険―（2）

テューサたちは、壁に手をつき、伝いながら歩いていた。灯し木の光だけでは、足元や周りを見るのに心なしか頼りない。しかし、歩き慣れているのか、デイルは手も壁に伝わせず、灯し木だけを握ってすたすたと歩いていく。足が速く感じて、何か焦っているような気がした。

しばらく狭い一本道を歩いた。先日訪れたときと変わらず、灯りはデイルの持っている灯し木だけで、辺りは真っ暗だった。テューサは暗闇に恐怖心を抱いていた。

「ルビス待つて・・・っ！」

テューサの前を歩くルビスに、もう少しゆっくり歩いてもらうよう促す。

「テューサ？　どうしたの？」

歩き続けながらデイルは聞いた。ルビスは後ろを振り返ってくれたが、真っ暗なのでテューサの顔が見えるか見えないか際どいところだった。振り返ったルビスは、彼女のどこか怖れている表情が感じ取れた。彼女に向かって、優しく微笑む。テューサはその笑顔を見て、少し表情を和らげ、安堵の息をついた。

「真っ暗なのが怖いんだとよ。・・・ったく、俺が後ろにいるっつの」

シャネラが溜め息混じりに、デイルの質問に答えた。「何が怖いんだか」と後ろでぶつぶつとテューサに向かって言っていたが、少女にはそれを返す余裕はない。デイルは怖がってなんかいないのに、自分だけ怖がっていることに恥ずかしくなってきた。誰にも見えないうが、テューサは顔を赤らめる。

「＜チャールク・ネス・アーソイリー＞。・・・もう大丈夫だよ、

テューサ」

狭い一本道が、急に緑色に輝いた。すぐに光は消える。

「あ、ありがと……」

「暗闇が怖いって言ってるのに、何で自然を癒す必要があるんだよ？」

「一応、だよ。洞窟が荒れる心配もないし。こんな暗闇で洞窟に襲われたら大変だもん」

「わけわからねえな」

「喧嘩にならないでよー……？ あ、広い所に出るけど……休憩する？」

先頭のディルから順に、先日ディルと出会ったあの広い場所へ出ていった。全員がいることを確かめて、

「たぶん……もう外は夕方だと思う。どうするー？ このまま歩くー？」

体が時間間隔を覚えているのか、ディルは時刻を予想した。シャネラはその場にどかと座り込んだ。

「疲れた。眠いんだけど」

「女の子さえまだ音を上げていないのに……。仕方ないわねー」
ディルもその場に座った。自分の鞆から、パンとジャムを取り出す。それを見て、ルビスとテューサも座ってご飯にすることにした。

「疲労は蓄積されるんだよ。ったく……」

「薪はこっちにあるわ。夜は冷えるし、焚火しよっ」

シャネラを無視し、ジャムを塗ったパンを口に銜えて立ち上がり、薪を数本持ってきた。灯し木から火を灯し、薪をくべて火を大きくする。ぱちぱちと火の粉が舞い上がった。それと同時に、暗闇で覆われていた狭い視界が、だんだん開けてきた。

「これでよしと……ありゃ？ シャネラもう寝ちゃったのー？」
一口パンをかじりながら、焚火を挟んだ正面に座っているシャネラを見た。頭が前に垂れ下がり、ぴくりとも動かない。

「ふう。ごちそうさまでしたッ。あたしも寝よっかな。おやすみい・

・・」

最後の一口を口の中に放り込み、ごくりと飲み込んでから横になった。まだ食事を摂っているテューサとルビスは、デイルに声を掛けてからまた食事に没頭した。

「・・・テューサは、暗い所嫌いなのか？」

唐突に、ルビスは聞いた。ぴくっといったん体を硬直させた後、テューサは口の中に入っている物を飲み込んだ。

「えっと・・・嫌いっていうか・・・言葉にするの難しいんだけど・・・体が拒絶するって感じかな？なぜか知らないけど、怖いって思っちゃう・・・」

自分でもよく分かっていないのが、小首を傾げながら喋るテューサを見ると、よく分かった。にっこりとルビスは笑った。

「そっか。でも、皆いるから大丈夫だよ。変なこと聞いてごめんね・・・ふわぁ。僕も眠いから寝ようかな」

欠伸の出たルビスはそう言いながら食料を鞆にしまって、横になった。

「テューサは寝ないのか？」

「あ、私も寝るわ。たくさん歩いて、くたくただもの」

水を一杯飲んでから、テューサも横になった。地面は冷たくて硬かった。あまり、心地良いとは言えない。ただ、目の前には焚火があった、顔が熱かった。

「怖くない？」

「え？　だ、大丈夫。隣にはデイルもシャネラもいるし・・・」

「そうだね。おやすみ」

くすくす笑いながら、夜の挨拶を交わし、眠りに就いた。

第14部(2) (後書き)

何はともあれ、800Hit有難うございます。

第14部(3)(前書き)

それぞれの、夢の中へ・・・

第14部 (3)

第14部 ―暗闇の冒険― (3)

俺は夢の中で木刀を振っていた。なぜか、木刀までもが夢の中にあった。ぶん、ぶんと木刀の風を切る音がする。

『シャネラ・・・何やってるの・・・？』

俺の行動に、いちいちシャーマが興味を抱く。別に構わないけど。話をするために、俺は少し手を休めた。その場に座り込む。

「ふう・・・。剣術の練習だよ。やべえな。最近全然闘ってないから、腕が鈍ったかも・・・」

手の甲で額の汗を拭った。くすくすと、シャーマの笑い声が聞こえる。

「何だよ？」

『平和が一番なのに・・・。闘うだなんて・・・。仮にも君は僕の使い手だよ・・・？』

笑い声は止まなかった。俺は溜め息をついた後、立ち上がってまた、木刀を振り始めた。

「この前みたいに、盗賊が襲ってくるかもしれねえだろ。今の四人の中で、俺ぐらいじゃねえか。まともに喧嘩出来るのは」

『ラーミアの使い手の娘も、結構強いらしいよ・・・』

「女なんかあてにできるかよ」

俺は舌打ちした。もうこのことについて話したいとは思わず、話題を変えることにした。

「何か、情報はねえの？」

今まで続いていた笑い声がぴたりと止み、静かなシャーマの声が響いた。

『五人揃ったら・・・』

「五人揃ったら？」

シャーマの後に続けて、俺が繰り返す言う。ちよつとの間、空白を空けて、シャーマは口を開いた。

『・・・ネイス国の砂漠へ向かって・・・』

「ネイス国の・・・砂漠？ 何があるんだよ？」

俺は木刀を振る手を止め、顔を上げた。シャーマは何も答えなかった。俺は、はっとあることに気づいてしまった。

「ちよつと待て！ ネイス国ってことは・・・！ 俺らにもう一度あの孤島を渡れって言うのか！？」

ディルの夢の中・・・。

あたしは、ここでラーミアと語り合っていた。テーマは、恋愛について・・・。

『もうすぐね・・・』

「うん！ ミクヤに会えるー！ 楽しみっ」

地べたに座り込み、姿の見えないラーミアと語り合う。これは、あたしの日課のようなものになっていた。ミクヤっていうのは、あたしの恋人！ だから、お父様が勝手に決めたジェムとのお付き合いは断ったの。

「ミクヤの方が、ジェムよりも断然かっこいいもん！」

『これこれ・・・。比較してはいけません・・・』

「だってー・・・」

だって、と言ったものの、続ける言葉がなかった。少し俯いてしまったあたしに、ラーミアが優しく聞いてくれた。

『テュクの使い手やシャーマの使い手とは、どうですか・・・？』
ぱつとあたしは顔を上げた。自分でも、このとき顔が綻んでいたと思う。

「テューサたちのこと？ あたし、仲間が・・・友達が出来て、本当に嬉しいの！」

今まで、王宮を逃げ出して一人で生きてきた。王宮にいた十五年間

も、友達と言えるような存在は、誰一人としていやしない。周りにはあたしに頭を下げながら、へこへこして敬語を使う大人たちばかり。お父様が勝手に決めた許婚のジェムは、あたしのタイプじゃなかったし・・・っと、これは失言ね。そんな王宮が嫌になって出てきたのはいいけど・・・。結局、外の世界でもラーミアしか話す相手はいなくて、それも話す場所は夢の中。日中は本当に一人ぼっちで、寂しかった。でも、お城に帰る気はなかった。ミクヤともあまり会えないし。

『よかったですね・・・』

「うん。シャネラが洞窟であたしを捕まえたときは、何がなんだか分からなかったから、お城に連れ戻されるのになって、少し怖くなった。『平和』の石を持つ人たちが、ライソカスまで来てくれたなんて、思わなかったもんね」

ニコニコしながらあたしは喋った。ラーミアはそんなあたしの言葉を遮らず、ずっと聞いていてくれた。

ルビスは夢の中で、そこにあった自分の医学の本を読みふけていた。

僕が本を読んでいると、ランクルが不思議そうに尋ねてくる。

『本読んできると・・・眠くならない・・・？』

こういう質問は、何度かあった。テューサにも、された気がする。

僕はこのような質問に、同じような答えを度々返していた。

「そうでもないよ。僕、本を読むのは好きだし。ランクルは嫌いなのか？」

問いを返してあげる。これによって、ランクルは退屈しない。ランクルは少し考えた。

『私は・・・好きではないわ・・・。でも、嫌いでもない・・・』

「そう。この本があったおかげで、テューサは死なずに済んだんだ。良かったよね」

本から顔を上げて、にっこり笑って見せた。ランクルは、多分僕の表情を見ていたと思う。なにせ、ランクル自体が、僕には見えないんだから。

『そうね・・・ルビス・・・今度、武術の本でも読んでみたら・・・？』

ランクルが、意外な話題を出してきた。僕は瞬間驚いた。ランクルの口からそんな言葉が出てくるなんて。でも、僕はすぐに笑って返答した。

「そうだね・・・襲われたとき、シャネラとデイルにばかり任せておいちゃいけないもんね。でも、武術は読むより体で覚えた方が頭の中に入るって聞くんだよなあ」

僕は、本をパタンと閉じた。表紙が見える。＜世界の医学＞っていうタイトルだ。分厚いだけあり、結構大それた名だ。

『シャネラに習ったらどう・・・？これから逢うデザイナーでもいいかも・・・』

「そうだね・・・。シャネラは『面倒くさい』って言って断られそうだな。デザイナーも武術出来るんだ？」

僕はその場に立ち上がった。本を脇に抱えて。

『分からないけど・・・。なんとなく、今私を感じるオーラが強そうだから・・・』

「何だよ、それ。じゃあ、僕は戻るね。また今晚お話ししよう」
くすつと笑って、僕は現実へ戻った。

私は夢の中ではしゃいでいたわ。デイルが見つかったのだもの！更に言うなら、これから最後のデザイナーに逢うのよ！楽しみだわ！・・・こんなことをテュクに報告していた。テュクは、時々相槌を打ってくれた。あとは、静かに私の話を聞いてくれた。「でもこれからデザイナーに逢うのはいいけれど・・・私的に、デイルの恋人にも逢ってみたいなあ」

こんな私のボヤキに、テュクはくすくすと笑った。

「どうしたの？　・・・まさかテュク、あなたデイルの恋人を知ってるの？」

『いえ・・・見たことはありませんよ・・・。ヒントと言うなら・・・素敵なチカラをお持ちのようね・・・』

上品なテュクの微笑みに、私は疑問にしながらもテュクは続けた。
素敵な・・・って何だろう。気になる！

『とにかく、テューサ・・・。ディザードを仲間にしたら、ネイス国へ行くのです・・・』

テュクの出した、デイルの恋人のヒントを元に考え込んでいた私を、テュクが話題を変えてそっちに集中させた。私もそれに見事に乗ったのだが。

「ネイス国！？　また海を渡らなくちゃいけないの？　大変！　でも何でネイス国に？」

『ネイス国に着いた夜の夢の中で、また何らかの情報をお話しましょう・・・。それまでは、気を急かないように・・・』

テュクがそれだけ言うと、私の視界は白んでいった。ぼやけていく。ああ現実へ戻るのか、と私は考えながら、分かったとテュクに言った。

第14部(3) (後書き)

いつのまにやら900Hit!!
有難うございます・・・!!
目指せ、4ケタく★☆

第14部(4) (前書き)

ちよつと甘々? ★ ☆

第14部（4）

第14部 ―暗闇の冒険―（4）

現実。夢から一番に覚めたのはルビス。目を擦りながら、昨晚焚火で燃やしきった牧の燃えくずを横に寄せ、牧を新しく持ってきて真ん中に焚火を作った。まだ夜が明けて間もないのか、4人のいる洞窟は、周りが見える程度にほんのり明るくなっていたが、冷え込んでいた。

焚火を作っていると、テューサが目を覚ました。

「・・・うー・・・ん。あ、おはよう、ルビス。まだ、寒いわね・・・」

火が少しずつ大きくなってきた炎は、牧をどんどん飲み込んでいく。テューサは両手を上に挙げ、大きな伸びをした。テューサを包む周りの空気が冷たいことに気づき、ぶるっと身震いした。

「おはよう、テューサ。まだ夜が明けたばかりなのかもね。ほら、近くに寄って。少しだけど、温かいよ」

ルビスの言葉に甘え、テューサは一步前へ前進した。小さな焚火が、周りの空気を温める。テューサは、正面に座る少年にこっと笑いかけた。笑顔が少年から戻ってくる。

「二人は起きないのかしら？」

両手を焚火にかざして温めながら、テューサは両隣の少年少女を見た。ルビスも2人を見つめた。

「うん・・・。この中じゃ時間が分からないから、起こすにも起こせないよね・・・。家から時計を持ってくるべきだったなあ」

ぽりぽりと頭を掻きながら、ルビスはふうと溜め息をついた。

「もうちょっとしてから起こそうか・・・」

「そうね・・・。シャネラはいつもお寝坊さんだけど、ディルはどうなのかしら・・・そうそうルビス、聞いた！？　ディザードを仲

間にしたら、ネイス国へ向かえだつて！」

夢の中で、テュクに聞いたことを、ルビスに話した。テューサが夢で取ったリアクションと同じものを、ルビスも取った。

「ええ！？　またネイス国へ行くの！？　大変だなあ・・・。」

パチパチと音を立て、だんだん大きくなっていった焚火の炎は、ルビスの顔が見えなくなるくらいまで成長した。驚いた表情は十分見えたが。

夢での話を二人で確認しあっていると、デイルが目を覚ました。

デイルは寝ぼけたような顔はせず、すぐに笑顔になって二人に朝の挨拶をした。テューサとルビスもそれを返した。

「・・・そっかあ。ラーミアはそんなこと一言も言っていなかったなー・・・。むー・・・。まあ、とにかく今日デザイナードを仲間にしてッ、それから渡り方を考えましょ！」

テューサたちから、夢での話を聞き、状況を知ったデイル。冷静に判断を下した。さすが、王家の者だけある。

「御馳走様でした」

一足速く食事の終わったテューサは、残りの食料を鞆へ詰めた。まだ木の実を頬張っているデイルは、一つテューサに頼みごとをした。「あ、テューサ。・・・もう食事も終わるし、出発するから、シャネラ起こしてくれない？」

何とも簡単な頼み。テューサはすぐに承諾してシャネラを起こしにかかった。ルビスも、二人のやり取りを見ながら、食事を終わらせようとしていた。

「シャネラ。シャネラ、起きて」

横になった体をゆさゆさと揺すり、声をかけてみた。この期に及んで、まだ心地良さそうに眠るシャネラ。テューサはもっと大きくシャネラの体を揺すった。

「シャネラ！　起きて！　出発するわよ！　置いてっちゃうわよ！

！」

いっそう声を張り上げて起こしてみた。……まだ眠る少年。今度は頬を軽く叩いてみた。

「シャネラったら！」

パンパンという音が、洞窟中に響き渡る。ルビスとデイルはもう支度を終え、焚火を消して灯し木を掲げていた。

「もう……起きてって……何度言わせるのよ……！　シャネラ……！」

耳元で叫んでみた。びくっと一瞬体を震わせ、シャネラは目をうつすらと開けた。

「……うっせえな……」

「ほら、立って！　出発よ！」

シャネラの両手をぐいと引っ張り、無理矢理立たせた。ルビスとデイルは一緒に溜め息をつき、灯し木を持っているデイルを先頭に、昨日来た道の逆側の狭い道へ入っていった。テューサもシャネラを引っ張りながら後を追う。

「おい……。俺、飯まだなんだけど……」

「食べながら歩けばいいでしょ。寝坊したのに、贅沢なこと言わないの」

「分かったよ……。逃げねえから、手、離せ」

シャネラに言われて、ぱっと手を離れた。先を歩くルビスの後ろを、テューサが歩いた。昨日と同様の順番になったようだった。シャネラは、離してもらった手で鞆からパンを出し、口に放り込んだ。

どのくらい歩いただろうか。真っ直ぐ直進したり、ぐねぐねと曲がりくねったり……。あるとき、テューサが悲鳴を上げた。

「きゃっ……！」

壁を伝うために触れていた右手を、慌てて自分の方へ引いた。悲鳴に驚き、デイルとルビスが後ろを振り返った。

「テューサ……。そんな驚くな……。俺の手だよ」

シャネラが苦笑しながら、右手をふらふらと振った。

「手……？」

テューサ・ルビス・ディルが、声を揃えた。シャネラは苦笑いしながらテューサの頭をぼんぽん、とあやすように叩いた。

「壁に手をつきながら歩いてたんだよ。俺一番後ろだし、暗くてテューサもよく見えねえんだ。だから、手が重なっちまったんだよ」

「本当……？」

テューサがびくびくしながらシャネラを見つめた。ふっと口を緩めて、シャネラは「ああ」と頷いた。

「もう……驚かさないでよ……」

ディルの口から呆れた、という溜め息がこぼれた。ルビスは何も言わず、微笑んでいる。

「びつくりしたあ……」

「ったく。こんなことで悲鳴上げるなよ……」

「だって……」

「ほら、行くわよー！ テューサもそんなに怖がらないのっ。ここは何にもコワイものなんかないんだからー！」

ディルに叱られ、テューサはしゅんとなった。仕切られ、列がまた前へ歩き始める。シャネラが、叱られて落ち込んでいるテューサに、もう一度あやすように頭を叩いた。

第14部 (5)

第14部 ―暗闇の冒険― (5)

その後も歩き続けると、正面に光が見えてきた。・・・出口。やった、と思った瞬間、四人は宙に浮いた。

植物の蔓だった。体中蔓に巻き取られて、身動きできなかった。

「何だ・・・？ これ・・・？」

「何で蔓が動くの？」

「デイルの嘘つき！ 怖いものは出ないって言ったじゃない！」

シャネラとルビスは蔓に疑問を感じていたが、落ち着いてはいた。テューサは喚いている。

「うるさいわねー。全っ然恐くないじゃん。あたしここを通るときいつもこいつら退治出来てたよ？」

デイルも落ち着いた口調で話す。言い終わるが速いか、デイルは腰に備えておいた短剣を

抜き、蔓を切った。すどん、と地面に降り立つ。

「おい、それ俺にも貸せ。木刀じゃ切れねえ。こっちの手に持たせてくれ」

シャネラは、デイルに短剣を貸してもらうと、体に巻きついていていたというのに、綺麗に蔓を切り刻んだ。軽々と地面に下りる。

「シャネラ。僕の蔓、切ってくれないかな。僕、そういうのあまり使ったことないんだよね」

「仕方ねえな」

ぶつくさ言いながらも、速い剣の振りで、ルビスに巻きついた蔓も、綺麗に切り落として

しまった。落ちるときに、上手く受身の取れなかったルビスはしり

もちをついた。

「いたた……。まあ助けてもらったんだし、文句は言えないけどね……」

ふっとルビスを笑いながら、シャネラはまだ宙に浮いているテューサを見た。

「おい。お前、ナイフ持ってたっけ？」

「持ってるけど……。手が動かせないんだもん……。シャネラ、早く切ってよ……」

両手が自分の胸の前で拘束され、腰に装備しているナイフには届かなかった。テューサは、

シャネラに哀願した。シャネラは面白がってなかなかテューサを助けようとしなない。ディ

ルは、しりもちをついたルビスが立つのを手伝っていた。

「どうしよっかな。おもしれえし、このままでもいいんじゃない？」

「面白くなんかないわよ！ 早く、切って……」

泣きそうな声になっていく。ルビスを立たせたディルは「付き合ってるらない」とでも言うかのように、さっさと出口へ向かって行ってしまった。

「あたし、先に外出てるねー」

「じゃあ僕も」

ルビスは、ディルを一人にしてはいけなと思ったのか、ディルの後について行ってしまった。テューサは焦った。

「え……。ちょっと待ってよお……」

姿が見えなくなっていく二人を、テューサが呼び止めようとしたが、無意味であった。ふ

う、と軽く溜め息をつき、シャネラは短剣を振った。テューサを縛る蔓が、切られて地面

に落ちる。次にテューサの体も、地面に急降下した。

「よいしょっと」

体に衝撃があまりなかったことに疑問を感じて、瞑っていた目を恐れ開くと、地面にぶつかるはずのテューサの体は、シャネラの左腕に倒れこんでいた。にんまり笑ってシャネラが言う。

「俺に一つ借りが出来たな」
ばたばたとシャネラから離れた。俯き加減に、テューサは礼を言った。

「あ、有難う・・・」

「ほら、行くぞ」

シャネラに背中を押されて、洞窟を出た。

第15部（前書き）

第15部はこの話で終わります。

第15部

第15部 ―空を癒すディザード―

久しぶりに眼に差し込んだ光は、痛いほど眩しかった。思わず、手が眼の上に来て、光を遮ろうとする。光に目が慣れてきて、辺りを見回してみる。目の前には、綺麗な湖が広がっている。真っ青だ。そして、それを取り囲む、生い茂った草木。洞窟の出口の横では、ルビスとディルが、座っていた。

「やっと来たー」

ディルが洞窟から出てきたテューサとシャネラに声をかけた。2人も、ディルたちを真似て、座り込んだ。

「で、さっきの蔓は何だったんだ？」

シャネラが座るのと同時にディルに聞いた。

「ルビスにも言ったけどね。あたしがここに来るとき毎回、あの蔓に襲われるの。別に今回みたいに切れればいいだけだから、そんなに大事に思っていないけどー。多分、アムタワ国への侵入妨害の罠でしょ。ふふっ」

さらにディルは答えた。しかし、シャネラには新たに疑問が浮かぶ。

「アムタワ国って何だよ？」

「ディザードがいる国！」

「ディザードはどこにいるんだよ？」

第三の質問に対し、ディルが空を指さした。三人は、ディルの指に沿って、示された場所を目で追う。

そこには、空に浮かぶ何かがあった。よく見てみる。すると、家のような、城のような建物らしきものが見えた。

「あ、あれ・・・」

「あれが、アムタワ国。ディザードが住んでマス」

ぽかん、と呆氣に取られたただ虚空を見つめるテューサたち。なぜ浮かんでいるのだろう。どうやったら浮かぶのだろう。色々な疑問が浮かんできた。しかし、口にすることはなかった。

しばらく沈黙が続き、テューサが口を開いた。

「どうやってあそこに行くの？」

デイルはそれを聞かれて溜め息をついた。

「知らない。でも、大丈夫！ あっちには、あたし達の姿が見えてるから。すぐにディザードも降りてくるよ！」

「もう降りてきてる」

テューサたちにとって聞き覚えのない声が、湖の左横に生えている木々の間から聞こえた。

反射的に、その方向へ顔が向く。木々の間から、一人の少年がこちらに向かって歩いてき

ているのが分かった。木々を抜け、少年の顔に陽が射し、顔が見える。シャネラと同じ黒

髪に、瞳は空色だった。

少年の声を聞いて、デイルががばつと立ち上がった。名を呼んで、駆け出す。

「ミクヤ！」

駆け寄る勢いで、ミクヤと呼ばれた少年に抱きつく。少年は抱きつかれたことと、それを見られていることにそれほど羞恥心を感じてはいなさそうだった。それどころか、むしろ無表情と言った方がいいかもしれない。一応、抱きついていて少女の頭を撫でてやってはいた。そのあとすぐにその空色の瞳を、テューサたちに向けてきた。「あ、これがディザードだよ、みんな。ミクヤ・グレイルーっていうの。確か」

体から離れ、デイルが少年を紹介した。テューサたち三人はその場に立ち上がり、ひとり一人自己紹介をしてみた。

「僕はルビス。ラルウィだよ。よろしくね」

ルビスが最後に笑顔を付け足したが、相手から笑顔は返ってこなか

った。

「わ、私はテューサ。ウィテュードです・・・」

「ウィーシャのシャネラ」

三人が言い終わったのを見計らい、ミクヤは「よろしく」の代わりに頭をぺこりと下げた。

何か言いたそうに、デイルは三人を見てにこやかに笑っていた。それを見て取り、ルビスがどうしたのか、聞いてやった。

「えへへ・・・。あのね、この前お城でジェムのこと聞いたでしょ？」

「うん。婚約者だよな」

ルビスが相槌を打つ。デイルが訂正しながら続けた。

「元、ね。何でジェムとの話を蹴ったか、分かる？」

ルビスは大体分かっていたが、あえて分からない振りをした。

「さあ？ 分からないな」

「発表しちゃいます！ ミクヤはあたしの恋人なのです！」

ミクヤの右腕を挙げて、ミクヤを強調させた。ミクヤは何も言わない。テューサがわっと

歓声を上げた。

「本当！？ きゃー！ すごい！ だから、居場所を知っていたのね！」

・・・どうやら気づいていなかったらしい。シャネラも大体想像できていたのか、テューサの

言った言葉に、溜め息をついた。テューサは柄にもなく、まだ騒ぎ続ける。

「デイル！ こんなにかっこいい人見つければ良かったわね！」

「ありがとう、テューサ！」

少女らはきやあきやあと騒ぎ合った。ミクヤはすすつとそこから逃げ出し、シャネラたちの方へ来る。

「・・・お前・・・脅されたとか違うよな・・・？」

「大丈夫だ」

ミクヤはこくりと頷き、デイルを見つめていた・・・。

第15部（後書き）

第16部をお楽しみに。

第16部 (1)

第16部 ―ネイス国へ……― (1)

騒ぎが収まり、今度は座って真剣にこれからのことを考えていた。

「それで、テュクから聞いた話なんだけど、どうやってネイス国へ戻ろう？」

テューサが一度、皆に夢の中でテュクに聞いたことを話した。洞窟の中で話したが、ミクヤも加わったことで、今一度話してみることにしたのだ。

「はあー。またあのたくさんあった島を一日ずつかけて渡れって言うのかよ……？」

シャネラが溜め息を吐いて、ぼやく。確かに、来たときと同じルートをとるとなると、かなりの時間が必要だ。時間が惜しい5人にとって、この方法はかなりつらい。かといって、これ以外に渡る方法などなかった。

「ライソカス国に、船はないの？ 王女様？」

ルビスは『王女』を強調して言った。もしもあるのなら、『王女』の位を利用して船を貸してもらえないかと思ったのだ。しかし、答えは呆気ない。

「ライソカス国に船はないわよ。この前お買い物をした商店街を見たら分かるでしょ？ 魚介類の食べ物にはなかったはず。……アムタワ国にも船はないよね。あつたら奇跡かー」

肩を落しながら、デイルは言った。「なるほど」とルビスは納得する。二人の会話を聞き、シャネラが木刀を支えにして立ち上がった。

「泳ぐ、に決定だな……。そうと決まれば……。行くぞ」

「待て」

立ち上がったシャネラに、今まで口を挟まなかったミクヤが止めた。

腕を組み、あぐらをかいて座っている。

「何だよ、ミクヤ」

「ラルウィの力を借りれば・・・渡れるかもしれない」

そう言っ、ミクヤは立ち上がり、自分が先程来た道を、何も言わず引き返して行っ。

「僕力？」

「ミ、ミクヤ！？」

背を向ける少年に対し、デイルが慌てて声をかける。ミクヤは何も言わずに、森へ姿を消していった。シャネラがそれを追いかけてしようとする。

「シャ、シャネラ待って！」

「何だよ」

シャネラの足が止まり、顔が3人の方へ向く。デイルがシャネラに駆け寄って、自分たちが座っている場所へ、強制的に連れ戻した。

「ミクヤには、何か考えがあるのよ。少しだけ、待っててあげて？」

シャネラは軽く溜め息をつき、その場に座ろうとした。

その時。

急に、4人のいる場所全体が暗くなった。大きな物の影に、覆われたよう。合図も何もしていないのに、4人は一斉に、何気なく自分たちの真上の空を見上げた。全員の目が、丸くなる。

——何か・・・落ちてくる・・・？

第16部(1)(後書き)

第16部に入りました。

今のところ第19部まで完成しています。

いよいよ大詰めの場合に入ってきたかな？

これからよろしく願います！

あ、まもなく1000Hits♪

いつも有難うございます☆★

第16部(2)

第16部 ―ネイス国へ……―(2)

――何か……落ちてくる……？

少し遅れて、脳からその判断が送られて来たとき、誰もが口を開けて、呆けて見ていた。しかし、シャネラが声を出す。

「……かたまれ……っ！」

シャネラは、自分の発する声と同時に、左腕でテューサの体をルビスの方へぐいと押して、木刀を持った右腕をデイルの腰の辺りに巻き、ルビスの方へ連れた。瞬間の出来事で、力加減が分からず、自分も彼らに覆い被さるようになって倒れこむ。シャネラがこれをやり遂げた直後、大きな音が辺りに響いた。

どすーん………。

砂埃が立ち、4人は一斉に咳き込む。瞳に砂が入らないよう、目蓋をぎゅっと閉じる。しばらくして次に開いた瞬間、またもや目を丸くした。

「な……何、これ……」

テューサが体勢を整えながら、目の前にある物を凝視した。目の前にある物……それは、大きな大きな竹籠たけかごと、大きな大きな布地だった。

「こ、こんな物があたしたちの上に落ちてきたら……怪我どころじゃ済まなかったわね……。有難う。シャネラ……」

デイルも、体勢を整えながらシャネラに礼を言った。冷や汗を掻いている様で、ごくりと唾を飲み込んでいた。シャネラも起き上がりながら「ああ……」と頷いた。ルビスもテューサも忘れずに礼を言う。確かに、こんな物が自分たちの体の上に落ちてきたらひとまりもない。間一髪で、シャネラのおかげで助かった。

ずっと落ちてきた箆と布を見ていると、ミクヤが鞆を肩から下げ

て、森から姿を現した。

何も言わず、両手をポケットに突っ込んで、ただただ呆けて見ている少女少女らのもとへ足を運んでいた。

「ミクヤ・・・」

足音に気がついたデイルは、駆け寄りもせずミクヤの名を呼んだ。すると、しゃがみ込んで呆けている4人に対し、片膝について彼らと視線の高さを合わせた。

「・・・無事だったようだな」

「え？」

4人が口を揃えて言った。すると、ミクヤは彼らから視線を外して、落ちてきた物の方へ向けた。少しの間それらを見つめた。

「気球を造ろう」

ぼつりと吐いた言葉が、飲み込みきれずにいた。しばらく沈黙が続き、一番最初に口を開いたのはシャネラだった。

「じゃあ・・・これ落としたの・・・お前か・・・？」

「ああ」

落下物を見つめ続けながらミクヤは頷いた。シャネラは顔を憤怒の表情に変えて、ミクヤの胸倉を掴み、叫んだ。

「落とすなら行く前に言えよ！ こっちはもう少しで怪我するところだったんだぞ！ いや、怪我だけじゃ済まなかったかもしれないんだ！！・・・おい！ 聞いてんのか！？」

叫ぶシャネラの声を、無視するかのようにミクヤは何も言わなかった。胸倉を掴んでいるシャネラの手を叩いて、体を自由にさせた。すぐに、足を落下物の籠の方へ向けて、歩いていく。完全に無視されて、シャネラは気が立っていた。

「シャ、シャネラ・・・。私はまだミクヤのことよく分からないけど、あまり喋らない人なのよ、きつと・・・。ネイス国へ渡する方法を持ってきたんだし、怒らないで・・・」

シャネラの木刀を持った右手は力が入り、今にも木刀でミクヤに振りかかろうとしそうだった。デイルは申し訳なさそうな顔をして、

ミクヤに駆け寄る。ちょうど視線のぶつかったテューサは、こくりと頷いて「行ってあげて」と目でデイルに訴えた。それが分かったのか一心にデイルはミクヤへ駆け寄る。テューサはシャネラに寄り添った。ルビスは落ちている布の方へ歩いていった。

「シャネラ・・・」

恐々とテューサが名を呼んだ。名を呼ばれ、シャネラがぎろりとテューサを睨んだ。びくっと、体をふいに硬直させてしまう。怒り交じりに皮肉った笑みを浮かべる。

「何だよ。怒鳴った俺が、悪いって言うのか？皆してアイツの肩を持つなよな」

「ち、違う・・・。ミクヤが言ってくれてればシャネラは怒らずに済んだわ。怒鳴ったシャネラも少しは悪いけど、ミクヤも悪いわ。お互い様よ」

シャネラの力を入れている右手をそっと自分の手で包みながら、テューサは微笑んだ。その笑顔に、シャネラは胸を突かれた感じがして、ふっと右手の力を緩めた。それが伝わってきたのか、なおも微笑み続けた。

「ね。皆仲良くしましょ。楽しい旅の方が、絶対良いわよ。シャネラ、笑って」

今まで真一文字だったシャネラの口が緩み、小さな笑い声が漏れた。

「ほら、気球造りを手伝いましょ。ルビスが1人でやってて、大変そうだよ」

包んでいた手を、拳から手首へ移動させ、ぎゅっと掴んだ。そして引っ張るように歩き出す。テューサは笑った。

「・・・これで貸し借りなし、ね」

シャネラの方を振り返りながら、にっこり笑って言った。シャネラも、「ああ」と言って微笑み返した。

デイルも、ミクヤの説得に一生懸命になっていた。ミクヤは空から落とした籠を、人が乗れるように仕立て、衝撃でへこんだ部分を直していた。

「ミクヤー……。少しは喋ってよお。あたしと2人の時は喋らなくても良いからさ……。シャネラなんか気が短いから、無視すると勘違いしちゃうわー」

「構わない」

手を動かしながら、ミクヤはぽつりと呟く。ふう、と溜め息をつき、デイルは口を開いた。

「ミクヤ。空からこんな大きな物を落としたこと、どう思っているの？」

デイルの問いかけに、答えは数十秒返ってこなかった。諦めかけたとき、ミクヤは口を開く。

「仕方ない。こんなもの、持って降りれないんだから」

「でも、行く前に言っておいてくれたっていいでしょー？本当に、シャネラが助けてくれなかったら、これに押し潰されてたかもしれないのよ？」

ミクヤも、溜め息をついた。デイルの方を見ずに、作業に没頭している様子で最後に一言言った。

「悪かった」

「・・・」

デイルは何も言わなかった。呆れた表情で、少年を見つめていた。

第16部(2) (後書き)

1000Hit!!

有難うございます) (泣)

これから頑張らせてくださいね!

あ、1000Hit記念ということで、番外編を書かせて頂きました!!

本編とは別で投稿してありますので、少し探すことになっちゃうかも・・・。

是非?読んでみて下さい。

デイルとテューサの、一昔前のお話です。

第16部(3)(前書き)

ネイス国へ戻るためのお仕事・・・

第16部(3)

第16部 ―ネイス国へ・・・― (3)

5人がそれぞれ作業に取り組んでいた。デイルとミクヤは籠の修復。テューサ・シャネラ・ルビスは、ミクヤがアムタワ国から持ってきた何本もの短い針金を、ぐねぐね曲げて布に刺し、取り付けていた。

作業に一心不乱に打ち込み、時間を忘れて辺りが暗くなるまで続けた。

「すっかり時間を忘れていたわねー。どう、そっちは？」

デイルが手の甲で額の汗を拭いながら、布の作業を行っている3人に状況を尋ねた。3人も手を休ませた。

「もうちょっとかかるかしら。明日の午前中のうちに出来ると思うわ」

テューサは笑いながら言った。シャネラは広げた布の上に寝転んでいる。

「ねえ、ミクヤ。僕、前に本で読んだことあるんだけど・・・。気球って、まだ何か足りない気がするんだけど・・・」

「明日の朝持つてくるつもりだ。デイル、手伝ってくれ」

「はい」

ルビスが少し心配そうな顔をして聞いたので、何か危ないことだと周りには思ったが、思い過ぎだった。作業で疲れてはいるものの、陽気な声でデイルは返事をした。

「じゃあ、今日はここで寝ようか。布が吹き飛ばされないように、僕はこの上で寝るつもりだけど・・・。皆はどうする？」

ぽんぽん、と自分が座っている下の大きな布を叩きながら、ルビスは言った。デイルは周りを見渡す。

「あたしは・・・この籠の中で寝ようかなー・・・」

「じゃあミクヤも籠の中で寝ろよ」

シャネラは籠を指差しながら、ミクヤを見てすかさず言った。ミクヤはふうと息をついただけだった。テューサはそれを見て、慌てた様子を示す。

「テューサはこっちだ。文句言うなよ」

シャネラがそれに気づき、テューサの肩を掴んでルビスの方に寄せた。

「あの2人は、朝早くに部品を取りに行くんだろ。寝てんの邪魔されるの嫌だしな」

シャネラはにと笑う。テューサは「分かった・・・」とだけ言って、皮袋を自分の方へ持ってきた。

何も会話がないまま、食事が始まり、終わる。静かな夜だった。皆が眠る前に「おやすみ」と言葉を交わすだけ。

テューサたち、布の上で寝る3人は、自分らが寝転んでも十分布が余ったので、布に包まって眠ることにした。そのため、3人は並んで寝た。ルビスがテューサとシャネラの真ん中に入る。喧嘩にならないようにと、2人からの希望だった。

デイルとミクヤは、肩を寄り添って籠の中で座ったまま眠りについた。これで、この日の晩は、焚火をつけなくても温かくして眠ることが出来た。焚火などつけたら、風で布に引火してしまい、危険である。こうして眠れたことは好都合だった。

第16部(4)(前書き)

さあ、行きましょう。

目的地へ――！

第16部(4)

第16部 ―ネイス国へ……―(4)

翌朝――。まだ夜が明けたばかりで、辺りが薄闇の頃。ミクヤは目を覚ました。そして、籠の中から顔を上げて、空を見渡す。無意識に、手の中には自分の『平和』の石が入っていた。ぎゅっと握り、空を見つめながら小さく呟く。

「<ディーキー>……」

籠の底で握っている石から、紅い光が放たれる。この言葉と光で、自分の右肩に頭を乗せていた少女が目を覚ました。「うーん……」
と言って、ごそごそと動き出し、ミクヤの肩に額を乗せる。目をゆつくりと開いて、自分が額を乗せている肩の主を見つめた。

「おはよー……」

まだ眠そうな、紅い瞳をしながら、ディルは呟いた。ミクヤは何も言わず、口元だけで静かに笑った。それが嬉しかったのか、ディルはにっこりと笑う。

「……行くー?」

小声で話し掛ける。まだ夜明け直後だとディルには分かっていた。だからこそ、普段の大きさの声を出して、シャネラを起こしたら、怒らせてしまいかねない。ミクヤはディルの問いかけに、こくりと頷いて静かに立ち上がった。ディルも真似て音を立てないように静かに立つ。籠から出たミクヤは、ディルの手を取り、籠から出るのを手伝った。籠から出て、森の方へ歩き出す。足元に、無造作に生える雑草を踏むことで、音が少々出してしまうが、こればかりは仕方なかった。最小限に音をおさえて森の中へ入っていった。

森へ入った方がいいが、やはり、ディルはアムタワ国へは行けなかった。森の奥深くまで来たところで、ミクヤの指示があり、ぽつんと取り残されてしまった。手近な木の幹に凭れかかって、彼の帰還

を待った。

しばらくして、ミクヤはデイルのいる場所に帰ってきた。デイルに手伝ってくれと言ったのに、ミクヤの持っている物は長い紐と食料が入った鞆だけだった。

デイルが、戻ってきたミクヤに駆け寄った。彼女はミクヤから鞆を受け取り、テューサたちのいる場所まで運ぼうとしたが、ミクヤが断り、長い紐だけを持つことになった。

2人で並んで歩いた。会話は何もない。だがデイルにとって、隣にミクヤがいてくれることが、とても嬉しかった。沈黙のまま、しばらく歩く。そして、結局何も言葉を交わさないまま、まだ夢の中のテューサたちがいる場所まで戻ってきてしまった。デイルが少し、会話がなかったことに気を落としていると、ミクヤはそれに気づき、彼女の頭にぽんと手を乗せ、紅い髪を撫でた。・・・ミクヤに出来る、精一杯の愛情表現だ。デイルはミクヤに向かってとびきりの笑顔を返した。

それからまたしばらく経った。3人の中で一番に目覚めたのはルビスだった。籠の外で食事をしていたデイルとミクヤに声をかける。「おはよう。・・・ミクヤ、気球に必要なもの、持って来てくれた？」

ごくりと食べている物を飲み込んでから、ミクヤは短く返事をした。「それで・・・。何で僕の力が必要なの？」

「・・・」

ミクヤは答えなかった。デイルが慌てて、彼の代わりにルビスに答えた。

「えっとねー。多分ミクヤが考えているのは・・・。ルビスの自然を癒す力を借りて、風を利用し、気球を飛ばそうとしているのよ」

「・・・えーっと・・・。僕、自然は癒せるけど、風をそこから利用するなんてしたことないよ？それに、僕の力だけで5人が乗った気球なんて、飛ばせないと思うけど・・・」

1つの疑問を解決すると、また別の疑問が浮かんでくる。デイルは、

喋らないミクヤに代

わって、ルビスと話した。

「大丈夫！ 多分出来るよっ！ それに、ミクヤが飛ばすとき手伝ってくれるから！」

ディルが笑って、ルビスを安心させようとした。これ以上聞いてもらちがあかないと考えたのか、ルビスもそれ以上聞かなかった。自分もその場に座って、朝の食事を始めた。陽はもう水平線から全部顔を出している。

3人の食事が終わった。

「それでミクヤ。今日は何をしたらいい？」

ルビスが、食事の残りを鞆にしまいながらミクヤに尋ねた。

「・・・布を籠に取り付ける」

ミクヤは口を開いた。ルビスには、珍しく思えて、思わず笑みがこぼれた。

「分かった。昨日つけてた針金を、籠にも通せば良いんだね」

言葉に、こくりと頷く。ルビスはそれを確認して、作業を始めようと布がある方へ振り返った。・・・まだチューサとシャネラが寝ている・・・。ルビスは軽い溜め息をついた。そのまま2人に歩み寄り、体を揺らして起こしてみた。

「チューサ、起きて。朝だよ。ほら、シャネラも起きて」

優しい口調で寝ている2人に声をかける。うーんと唸るチューサとは真逆で、シャネラはうんともすんとも言わなかった。

「昨日の作業、そんなに疲れたかなあ？」

後ろを振り返り、座って事の成り行きを見ているディルとミクヤに、苦笑いしながら尋ねてみた。

「あははー。あたしはそんなに疲れてないよー。シャネラはいつも通りだと思うけど、チューサは昨日洞窟でびくびくしっぱなしだったから、安心してぐっすり眠っちゃってるのかなあ？」

笑いながら、ディルが返してくれた。ミクヤも顔を綻ばせながらこっちを見ている。そう

こうする間に、テューサが目を覚まして起き上がった。

「おはよう……。あ、私ったら寝坊しちゃった!？」

視線を感じ、辺りを見回しながら慌てふためいた。しかし、テューサは自分の隣を見て、

少し落ち着いた。

「あ……。まだシャネラが寝てるのね……」

「さ、テューサ。ご飯食べなよ。僕は先に気球を造ってるから」

ルビスは笑って優しく言うてくれた。せっかくの言葉に甘え、布の上からどいて湖の近く

で朝食を摂ることにした。ルビスは次に、シャネラを起こす。

「もう。シャネラ! 起きなよ。君がそこにいと、作業に取り掛かれないじゃないか」

ゆさゆさと体を強く揺すってみた。……。起きる気配なし。ルビスは諦めて、シャネラの体を

ごろごろと転がし、朝食を食べているテューサの所にまで連れてきた。ルビスはここでも

う一度溜め息をついたあと、作業をするため布がある方へ戻っていた。

「……。シャネラ。起きなさいよ……」

テューサがパンを一口かじりながら横で眠っているシャネラに声をかけてみた。返事はな

い。……。呆れて、このまま放つとくことにした。

第16部（4）（後書き）

1100Hit有難うございます!!

こうやってHit数を祝うのも、11回目・・・ですかね。
増えていくたび、感謝の気持ちが増えます。

これからもよろしく!

第16部(5)

第16部 ―ネイス国へ……―(5)

シャネラは目を覚ました。大きな欠伸を1つ、最初にかまして、目を擦った。

「ふわぁー……。よく寝た……。けどまだ眠い……」

一言、二言ぼそりと呟きながら、辺りを見渡した。自分は何かに凭れて、座ったまま眠っ

ていたらしい。正面にはデイルとミクヤが肩を並べて座り込んでいた。ミクヤは俯いていた。テューサとルビスは立っていた。

「おはよう、シャネラ」

デイルがシャネラに微笑んだ。シャネラがきよろきよると辺りを見回していると、くすっ

と意味ありげにもう一度笑った。テューサとルビスも振り返って、シャネラを見て笑って

いた。ルビスの手元では、光が放たれている。

「長いこと寝てたわねー……。ふふっ。あなたが眠っている間に、たあいへんなことになっちゃってるわよー。ふふっ」

不思議な笑みを浮かべるデイルが怪しく感じ、シャネラは勢いよく立ち上がった。そして

ら、周りの景色が見えた。

――一面真っ青。海の色ではなく、スカイブルー。空だ。

シャネラが頭で理解しきるには、少々時間がかかった。沈黙が流れる。その間、絶えず

テューサとルビスとデイルは微笑んでいた。

「き、気球か……!」

シャネラが理解できたとき、5人が今いる場所が分かった。そう、

気球。シャネラが眠っ

ている間に完成し、ライソカス国を発っていたのだ。・・・かなりのスピードで動いている。

「この気球ね、ミクヤとルビスの能力で動いているのよ！」
ちから

テューサが満面の笑顔で言った。

「能力・・・？」

「ミクヤの念力と、ルビスの自然を癒す能力よ」

「・・・念力い！？」

一気に眠気が消えた気がした。驚きのスケールが大きいあまりに、
ついつい声のトーンも

大きくなってしまう。テューサとディルがぱっと反射的に両手で耳
を塞いだ。

「アムタワ国の民は、念力が使えるのよー。すごいでしょー？アム
タワ国が空に浮かんでいるのはあ、昔の人々がアムタワ国の核コアに自
分たちの能力を溜めておいたからなんだってー。現在能力を注ぐの
は、王家の者の仕事だそうよお」

ディルが自慢げに人指し指を立てて話す。シャネラは彼女を見下ろ
して、一生懸命聞き入

っていた。テューサとルビスも、静かにそれを聞く。

「それでー、ミクヤはその念力を使ってー、この気球を浮かせてい
るのー」

「それを飛ばす手伝いをしてるのが僕だよ」

「この核石に能力を送っているんだって」

テューサが示したものは、籠の底に埋められたひとつの小石だった。
そこらへんに落ちて

いそうな、見た感じ何の変哲もない石。

「ほら、シャネラ見て。もうすぐネイス国よ。見えてきたわ」

テューサが籠の際に立つ。ぐらりと気球が傾く。

「ちよっとー。もう少しゆっくり動いてよねー・・・」

「ご、ごめん・・・」

「ミクヤ。聞こえる？もうネイス国の上空だ。降ろそう」

「ああ」

俯いていたミクヤが顔を上げた。ルビスは『ランクル』に力を送るのを止めた。石は輝き

をなくす。すると、気球は浮いているが、前に進むことはなくなった。次にミクヤが、ふ

ー……っと長い吐息を漏らした。吐かれた息と一緒に、徐々に気球も降下していった。

どさり。

気球が重たそうな音を立てて地面に着陸した。

「お疲れ様。ミクヤ、ルビス」

デイルが、ミクヤが立ち上がるのを手伝いながら礼を言った。シャネラは一足先に籠から出て、テューサを降ろすのを手伝っていた。

「ここは……」

「砂漠の一步手前だね」

テューサが呟いた一言の後に、ルビスが付け足した。そう、彼ら5人は、平原と砂漠の狭間に立っていたのだ。一步前に踏み出せば砂漠。後ろへ後退すれば、緑の生い茂る平地。デイルとミクヤも籠から降り、全員がネイス国領に足をつけた。

「さて……。僕らは砂漠へ行かなきゃいけないんだよね？」

ルビスが、誰、と指名せずに呟くように尋ねた。

「うん。何があるんだろう……？」

「考えたって仕方ねえ。行くぞ」

ルビスの疑問に答えたのはテューサだったが、そのテューサも、新しい疑問を見つけていた。すぐにシャネラがそれを掻き消す。だが、シャネラの意見も掻き消されてしまった。

「待って!!」

「何だよ」

急に大声を出したデイルは、焦った様子でミクヤを片肩で支えていた。

「ミクヤ、能力を使って疲れてるの。どうせ、夢であの人たちに情報を貰わなくちゃいけないでしょ？今日はここで休憩しようよ」
ディルがいう『あの人たち』というのは、ラーミアやテュクといった、『平和』の石のことだ。

「・・・仕方ねえな」

「もうちょっと街に近かったら、僕の家で休めたんだけどね。歩くのもミクヤが可哀想だし、ここで休もうか」

シャネラが溜め息を吐いたので、ルビスが苦笑した。そう聞くと、ディルはにこっと笑い、

ミクヤと一緒に気球の方へ歩いていった。そして、気球に凭れて座り込む。

「ルビス・・・。私、それでも街へ行きたいんだけど・・・」

「どうしたの？」

せっかく話がまとまったのに、と遠慮がちにテューサが上目遣いでルビスに頼んだ。ルビスは愛想よく笑う。シャネラは怪訝そうに2人を見ている。

「火熾し木と・・・食料がないと思うの」

確かに、ライソカス国の洞窟で火熾し木を使い果たしてしまっていた。そして、テューサ

に指摘されて、その場にいるテューサ以外の4人が、思わず自分の鞆の中を調べた。・・・本

当だった。これから砂漠を歩こうというのに、水筒の中の水は雀の涙ほどしかない。それ

ぞれの食料も、砂漠を歩くのには確実に量が足りなかった。

「げ。本当だぜ・・・。・・・おし、買いもんに行くぞ」

大食いのシャネラは、鞆の中を見て青ざめていた。ルビスも頷いて、テューサから地図を

受け取った。

「今は・・・。空から見る限りでは、あのたくさんの孤島の上空を

真っ直ぐ来たから……。海を越えた後に山があつて……。山を越えてすぐに降りたから、このへんかな……。じゃあ、ギロの街が近いかな」

地図の上を、ルビスが指でなぞっていく。ライソカス国は載っていないが、孤島の一部が

記されていることから推測していった。現在地を確認すると、地図をくるくると丸めて紐

で止め、テューサに返した。

「えっと……。街に行く人は……？」

ルビスがきよろきよろと仲間を見回した。デイルがそわそわと落ち着いていない。ルビス

は目が止まり、ふっと微笑んだ。

「じゃあ、テューサとシャネラと僕で行ってくるよ。デイル、ミクヤを頼むよ。疲労回復の薬なんて、悪いけど僕は作れないからね」座っているデイルの視線の高さに腰を屈めて合わせた。デイルが申し訳なさそうな表情を

して「ごめん」と謝る。

「決まりだな。行くぞ」

「デイル。1日じゃ帰ってこれないかもしれないから、私の分の残りの食料あげるね。じゃあ、行ってきます」

テューサは皮袋から、水筒と巾着のような袋を出してデイルに渡した。

「ありがとう。いってらっしゃーい」

デイルとミクヤを気球の降り立った場所へ残し、3人はギルの街へと発った……。

第16部(5) (後書き)

第16部終了です。

第17部からもうろしくお願いします。

さ。目指せ、1200Hit!!

第17部（前書き）

ルビスの、悲しい過去話・・・。

第17部

第17部 ― 2人の、悲しいお話 ―

ギルの街へ向かったテューサとシャネラ、ルビス。やはり、1日では着かなかった。一晚野宿して、翌日午後には街に入れた。

「ふうーっ。やっと到着かよ……。疲れた……。このまま宿に行って寝ようぜ」

木刀を両手で持ち上げ、真上に背伸びをする。力を抜いて手を下ろし、溜め息混じりにシャネラが言った。

「駄目だよ。デイルたちが待ってるんだから。買い物が済んだら、すぐに出発するよ」

ルビスがはつきりとシャネラの意見を拒否した。それを聞いて、シャネラは舌打ちして口を尖らす。ふう、と苦笑って、ルビスがテューサと目を合わせた。テューサも、くっくと小刻みに笑った。

「それじゃ、二手に分かれる？ 食料と、お水。服はある？」

「俺はいらねえ」

「僕もいいや」

「じゃあ、私はお水を買ってくるわ」

「いや、僕が水を買って来るよ。重いからね。」

テューサとルビスは笑って、買い物相談をした。「ありがとう」

と礼を言って、計画は決まった。それを黙ってシャネラが見ていた。

「なあ。俺はどっちに行けばいいんだよ？ 俺だけ宿で寝てていいの？」

「そんなお金ない！！」

冗談とは聞こえないシャネラの言葉を、2人が声を揃えて反撃した。

「もう……。！　じゃあシャネラはルビスの方へ行って。水は重くなっちゃうからね。ルビス、シャネラをどんどん使っちゃっていいからね。シャネラ、ちゃんと働かないと駄目よ！！」

まるで、母親のように場を仕切る。

「じゃあ、1時間後に街の外で会おう」

「うん」

テューサたちは二手に分かれて買い物に走った。

テューサはまず、手頃な市場に入った。置いてある品は、木の実、果物、山菜など。今までライソカスで買った、小麦を練って焼いたパンを食べていたので、どうもぱっとしない感じがした。迷った挙句、木の実と山菜を少量ずつ買った。

「お魚が食べたいけど……。シャシル国じゃないし、ないわよね・・。」

本音をぽろりと口にした。市場の者は、テューサの言葉を聞いていたが、何も言わなかった。巾着のような袋に木の実を全て入れ、山菜は取っ手のない紙袋に入れてくれた。胸の前でそれを担ぐ。

少し歩くと、キノコの市場があった。テューサはそこへ入り、品を見てみた。

「お、いらっしやい!! 何がいいかね?」

店の者に聞かれると、テューサは少し迷ったあと、口を開いた。

「・・・一番安いのをください」

「一番安いのか・・・。これだな。これは健康にいいぞ! どのくらい欲しいんだ?」

これも少量だが、適当な数字を言って、山菜の入っている紙袋に入れてもらった。

「まいど!!」

店の者の声と共に、市場から出た。まだ軽い紙袋。これだけじゃあ、食べ盛りの5人にとっては1週間もたないだろう。残っている金で、肉は買えないだろうか。テューサはお金を手の平に出した。・・
・買えるかもしれない。テューサは、肉の市場へ走った。

ルビスとシャネラは、ルビスの知り合いの水市場へ行っていた。

「ごめんください」

ルビスが、市場の者に声をかけると、その人は振り返った。

「おお、ルビス!!」

「久しぶりだね、カンル」

カンルと呼ばれた男は、にっこりと笑った。ルビスも笑顔だ。シャネラは後ろから2人のやり取りを見ていた。

「どうしたんだよ、急に」

「水を買いに来たのさ。今ちょっと旅をしてるんだよ」

「へえ。いいぜ! 昔から世話になってるしな。まけてやるよ」

「ありがとう」

ルビスは素直に礼を言ったあと、水の量を注文した。ボトルのような水筒を5本買った。

「また、薬作ってくれよな」

「任せて。じゃ」

「おう。気をつけろよ」

カンルは手を振り、ルビスとシャネラを見送った。ルビスも、カンルに手を振り返す。

「アイツはなんなんだ?」

シャネラが、カンルが見えなくなった頃に聞いた。ルビスはシャネラを見て、笑いながら答えた。

「僕の、弟。もつとも、カンルはそのこと知らないけどね」

「よくわかんねえな」

自分から聞いたのに、シャネラは考える素振りも見せなかった。気にせず、ルビスは続けた。

「小さい頃、両親が病気を患ってね。僕は5歳だった。カンルはまだ赤ん坊だった。両親が病気で倒れてから、収入がなくなる。僕は僅かなお金で両親の看病をして毎日を送っていた。カンルは・・・孤児院に預けたんだ」

ルビスが一息ついた。テューサとの落ち合い場所に着いたので、持っていた2本の水のボ

トルを地面に置いた。運び疲れた手をぶらぶらさせる。シャネラも、持っていた残り3本をその場に置いた。

「結局、両親は病死。僕は、まず働いた。情報紙配達が最初だったかな。君らに出会うまで住んでいたあの家に住んでたんだ。少しずつ、お金が貯まってきて、カンを引き取りに行こうと思ったら、もうカンは別の人が引き取っていた。まあ、カンは本当のこと知らない方がいいのかなって思って、そのまま。友達としてやってきて、今に至るんだ」

哀しいような笑顔をシャネラに見せる。別に、シャネラは同情しない。ルビスもそれは分かっていた。

「テューサには言ったが……。俺も、海で、幼馴染を亡くした」
「うん」

シャネラは、ルビスを見ずに、どこか遠くを見つめていた。ルビスは、その場に座り込んだ。膝を抱え込んで、シャネラと話す。

「・・・テューサも・・・小さい頃、親に捨てられたんだって」
「そうか・・・」

「ディルも、王宮を逃げて1人で生きてた。ミクヤも、話さないけどどこか、悲しい面を持っている感じがする。僕たち5人は・・・そういうところで選ばれたのかな。石たちに。悲しみを知っているからこそ、世界を救えるのかもしれないね・・・」

シャネラが、街の壁に凭れて腕を組む。軽く空を見上げた。

「これ以上、悲しみを増やしちゃ・・・」
「シャネラーっ！ ルビスーっ！！」

遠くで2人の名を呼ぶ声が聞こえた。テューサだ。声がかぶり、シャネラは話すのを止めた。ルビスが立ち上がる。

「助けてよぉー！」

テューサが両腕いっぱい紙包みを持っている。よたよたと危なっかしげにこちらへ歩いてきていた。前が見えているのだろうか。荷物が今にも落ちそうだ。シャネラがゆっくり歩いて、テューサの方へ向かった。

「あつ、シャネラ！ 持って。重いー！」

テューサのところまで行き着くと、シャネラは荷物を半分以上持たされた。何も言わずに、溜め息がこぼれてくる。

「重かったー。鞆の中に入らないんだもの……。どうしようかと思っちゃった」

「お疲れさま。食材係が2人の方がよかったかな」

ルビスがテューサに向かっていつもの笑みを投げる。シャネラは黙ってそれを見ていた。

第17部（後書き）

第17部は以上です。

私的には、第18部は結構お気に入りです★☆☆

あ、1200Hit有難うございます。

目指せ、1300Hit♪♪

第18部（1）（前書き）

お気に入りの18部が始まります♪♪
しつこいx2あの人たちがやってきます★

第18部（1）

第18部 ―意外な合流―（1）

買出しの済んだテューサたち3人は、デイルとミクヤの待つ場所へ急いだ。しかし、どれだけ急いでも一日はかかる。一晚野宿した。そして翌朝、また歩き出す。

「くはぁーっ。疲れたなぁ……。おい、まだ着かねえのか？」

片手で伸びをしながら、シャネラがいちいち愚痴をこぼす。もう一方の手は、食材を持っているので、出来ない。ルビスも、両腕いっぱい水の水ボトルを持っている。その顔は、困惑に歪んでいた。

「おかしいなぁ。確か、ここらへんだったはずなんだけど……」

「デイルも、ミクヤもいな……」

テューサの言葉は最後まで続かなかった。シャネラが、空いている方の掌でテューサの口を塞いだからだ。驚いて、テューサがシャネラを見やる。彼は、珍しく真剣な顔をしていた。その真剣さに、びくりと体を震わせてしまった。何も、言えない。それをシャネラは確認すると、塞いでいた手を外し、持っていた荷物を全部その場に降ろした。そして、木刀をぎゅっと握る。

「シャネラ……？」

「出てこいよ」

テューサとルビスの声が被るのと同時に、シャネラが一言、放った。すぐに、3人の周りにあった草むらや木陰から人が数人出てきた。テューサには、見たことのある顔ぶれだった。

「またお前らか……。今度は何だ」

落ちていて、しかし怒りを含めて、シャネラは言葉を出した。周りを取り囲んでいる男たちの、1人が口を開いた。

「前に貴様らを襲ったとき、その女が綺麗な宝石を持っていたの思

い出してなあ。盗賊の俺らには持ってこいのカモだろお？」

そう、以前テューサとシャネラを襲った盗賊たちだった。相変わらず短剣を構えていて、

にやけた顔を並べている。テューサは、困惑していた。

「な、なんで……!？ 私、呪文唱え……」

「なんでかあの時は俺ら全員倒れてて、いつの間にか貴様らは消えていたが……。おかげで俺らの恨みは倍増だぜえ!？」

「……うるせえよ。テューサ、ルビス、下がってな」

ずい、とシャネラが2人よりも前に出る。にやつと盗賊の頭は、シャネラの行動を嘲笑って、仲間に指示を出した。

「やっちまえ!!」

声と共に、首領は自分もシャネラに短剣を向けて襲い掛かる。10人くらいいる盗賊が、全員シャネラに向かってきた。シャネラには、全員の攻撃を交わせるなどとは思っていなかった。倒せるなどとも。避けはするが、やはり交わし切れず、刃が肉を裂く。赤い液体が、飛び散る。

テューサとルビスの方にも、盗賊が数人向かってきた。戦いに慣れていないルビスが、必死になって守る。しかしルビスも、交わせぬ攻撃を喰らい傷を負ってゆく。テューサは何も出来ず、どうすべきかわからなかった。目の前で赤く染まってゆく少年ら。何を、すればよいのだろう。

ついに、シャネラが地にしりもちをついた。必死に、木刀を支えにして立とうとしていた。しかし、力が入らぬのか、立つことが出来なかった。それを、楽しそうに見ている盗賊ら。

「くっ……」

シャネラは苦し紛れの声を漏らした。盗賊の1人が、無防備なシャネラに向かって、短剣を振り下ろそうとしている。条件反射で、テューサがシャネラに駆け寄った。

「シャネラ!!」

「来るなっ・・・！」

時は既に遅し。テューサは血だらけのシャネラを抱え込んでいた。そこへ、盗賊の短剣が振り下ろされる。それは、ほんの少し道筋を外れて、テューサの左肩から腕を切り裂いた。ぶしゅっ、と嫌な音がする。

「きゃあああっ！！」

第18部 (2) (前書き)

テューサがシャネラをかばって・・・！？

第18部 (2)

第18部 ―意外な合流― (2)

「きゃあああっ!!」

ぼたぼたと、血が流れる。傷つけられることをよく知らないテューサは、気を失いそうになり、ふらりと体を傾かせる。

「テューサっ! テューサっ!!」

揺らいだ彼女の体を、シャネラが懸命に抱き、起こそうとしている。抱えられている彼女は涙し、うめいていた。ルビスも、そちらで起こっていることを見ていたが、目の前の盗賊が邪魔をして2人の元まで辿り着けない。ただでさえ、ルビスも怪我をしていて息を荒げている。

「女まで傷つけんなよな。どこかに売り飛ばせるかもしれないだろ」

「へへっ。すみません、首領。さあて。女と宝石を俺らに渡せば、助けてやらないでもないぜえ?」

テューサを切りつけた男が、笑いながら首領の説教に答える。そして、シャネラには無理な交渉をしてくる。とたん、鈍い音がしてその男はその場に倒れこんだ。倒れこんだ男の後ろには、ミクヤが太目の木の枝を持っている。背中合わせで、デイルが拳を作って構えている。拳には布のような物が巻かれていた。そういえば、周りに転がっている盗賊の数が、増えているような・・・。

「お前らがやったのか・・・?」

シャネラは、ミクヤたちを見上げ、質問する。にこっとデイルは笑って、ルビスに加勢しに行った。

「大丈夫か」

シャネラの質問に答える気配のないミクヤは、膝をついて、シャネラが抱えている少女の体を、抱き起こした。

「う・・・っ。ううえ・・・んっ。ううー・・・」

痛そうに、顔を歪ませ泣いている。切られていない方の左手で、自分の顔を覆った。

「ミクヤ！！ こっち先に手伝ってー！！」

デイルから大声の呼び出しを食らう。ふうとミクヤは溜め息をついて、テューサをもう一度シャネラに預けた。優しく、動かす。

「これ。借りていいか」

疑問形だったのにも関わらず、許可をもらうまでもなく、ミクヤは言い残してシャネラの木刀を持って行ってしまった。

ミクヤはデイルとルビスの元へ辿り付くと、木刀を使って、相手をどんだんなぎ払っていく。ミクヤの剣術も、上手かった。

テューサは泣き続け、シャネラの胸に顔を埋めていた。ずっと城で過ごし、痛い思いなど、これっぽっちもなかっただろう。かなりショックだ。

「ううあ……。ふ……。えー……。」

「テューサ。おい。大丈夫か。テューサ」

声をかけることしか、シャネラには出来なかった。背中をさすってやる。それ以外に、何をしてやればいいのか、分からなかった。

しばらくすると、残りの盗賊を片付けたのか、3人がシャネラたちのところへ寄ってきた。

「痛たた……。大丈夫だった、シャネラ……。？」

ルビスが、苦痛に顔を歪ませながらも必死に笑顔を作ろうとしていた。デイルは、拳に巻き付けていた布を取っている。ミクヤはルビスの鞆から包帯などの、手当て道具を出していた。

「俺よりも……。テューサが……。」

「テューサ。大丈夫？……。って、大丈夫じゃないね……。ほら、泣かないで」

ルビスが、テューサの髪に手を伸ばし、撫でてやる。確かに、テューサの肩の傷から流れる血は、止まる気配はなかった。

「テューサ！ そんなことで泣いちゃ駄目よー！」

デイルが喝を飛ばす。それを、溜め息をつきながら

「お前と一緒にするな。ほら、手伝え」

ミクヤが呟き、ルビスの傷を消毒してゆく。デイルも手伝いに、腰を下ろす。

「痛た……。やっぱり僕も何か武術を習おうかなあ。それにしても、デイルは強かったねえ」

「お褒めに頂き光栄ですわ」

にっこりと笑ってデイルが言った。ミクヤは黙々と手当てをし続けている。

「つ……。まさか、デイルが体術を使うとは思わなかったよ」

「体術だけじゃないわー。剣術も使えるの。うふふっ」

「出来たぞ。ルビス、テューサを頼む。俺はあいつを……。」

包帯を巻き、ミクヤが合図する。ルビスは「ありがとう」と言って、テューサの手当てを急いだ。デイルも、それについて行く。ミクヤも、テューサのところにシャネラがいるので、それに続いた。

「遅くなってごめんね。テューサ、手当てするから。少し、体を起こして。デイル、ちょっと支えててあげて」

デイルは、ルビスに指示された通りにした。それから袖を破り、傷が見えるようにした。傷はそれほど深くはなかったが、浅いともいえなかった。腕がぱっくりと割れていて、どくどくと、血が流れている。シャネラからテューサが離れて、ミクヤもシャネラの手当てに取り掛かった。

「テューサ、ごめんね。少し、染みるよ」

清潔なガーゼに消毒液を浸け、傷口をなぞってゆく。瞬間、テューサが体を震わせる。

「……。っ！ うー……。いつ……。た……。いよ……。お……」

健全な方の手で、デイルの服の袖を力強く引っ張る。正直、ルビスは手当てしにくかったが、一生懸命頑張った。ガーゼが、流れた血液を吸った分、どんどん赤く染まる。それで傷口の周りも拭いた。

「テューサ！ 泣いちゃ駄目ー！ あたしなんか、剣術の修行でい

ろいろな場所まわってるときに、相手の真剣が脇腹を切ったのよー。
大丈夫よー！　ちゃんと治るからー！」

必死に、ディルはテューサを慰めていた。いちいち、ミクヤがそれを聞いていて何か言う。

「お前と一緒にするなって・・・」

「何よー、ミクヤ。この痛み分かるのー？」

ミクヤは黙った。会話が続かなくて、ディルは頬を膨らました。そして、ミクヤはシャネラの手当てを終えた。

「すまねえな。・・・テューサ。大丈夫か・・・？」

ミクヤに礼を言い、すぐにテューサの元へ駆け寄る。しかし、自分も怪我をしているので、動きは遅かった。顔を俯かせて、ディルの袖をぎゅっと掴んでいるテューサの服は、真っ赤に染まっていた。顔もまだ痛みに堪えていて、強張っていた。

「だい、じょうぶ・・・。シャネラも、だいじょうぶ、ぶ・・・？」

精一杯テューサは笑顔を作った。しかし、シャネラにとってその笑顔は痛々しかった。ディルに凭れて体を預けているテューサの髪を、静かにシャネラは撫でた。

「俺は大丈夫だ。・・・ごめんな、痛かっただろ」

「・・・いたい、よ。でも、だいじょうぶ。だから、そんな顔、しないで。ね？」

確かに、シャネラは今、申し訳なさそうな表情をしていた。今のシャネラには、笑い方が分からずにいた。テューサが毒蛇に噛まれたときよりも酷く顔を歪ませていた。

第18部(2)(後書き)

お久しぶりの更新です。

お待たせしました!!

いつのまにか1400Hit。

めざせっ! 1500Hit♪

これからもよろしく願いしますね★☆

第18(3) (前書き)

デイルちゃん大活躍♪♪
書いてる私でも、何気にカッコよくなっちゃって、
もう惚れちゃいそう・・・笑”

第18(3)

第18部 ―意外な合流― (3)

「・・・はい。テューサ、手当てできたよ。当分の間は動かさないでね」

「ありがとう・・・」

肩から手首の少し上まで、テューサの腕は包帯でぐるぐる巻きにされていた。見ていて痛々しい光景であった。

「さ。手当ても済んだことだし、場所を変えましょー」

「持ってやる」

ミクヤは一足先に片付けを終えていて、鞆を背負い、テューサの皮袋に手を伸ばしていた。

「持てる、よ。買ってきたものとか、持って？」

「平気なのか？」

「そんなに、優しくされたら、デイルが、やきもち妬いちゃう」

肩が痛むのか、言葉が途切れ途切れになる。ふっとミクヤが笑う。

「そんなことないわよっ！！ 仲間なんだから、助け合って当然じゃないのー」

「俺らはこっちを持つぞ」

「もう・・・」

返事をして、テューサたちが買ってきた食材の紙包みを持った。シヤネラとルビスも、各自の荷物を持つ。

「・・・おい、俺の木刀は・・・」

「そこだ」

いろいろな会話をしながら、その場を立ち去ろうとした。

「シヤネラー。木刀あたしに貸してー」

シヤネラが許可を出す前に、デイルは半ば強引に木刀を奪った。そして、にこりと笑う。

「さ、行きましょ」

シャネラの背を押すようにして、結果的に4人の一番後ろにまわった。ぶつくさ言いながら、シャネラは歩く。シャネラの前を、ルビースとテューサがお互いをかばい合って歩いている。ミクヤは何も言わず、黙々と歩いている。

ふと、デイルは足を止めた。ちらりと、後ろを振り返る。

「・・・意外としつこいのねー・・・」

振り返った先には、先程自分で倒した盗賊の一人がよろけながら立っていた。息を荒げている。デイルは、荷物を全て地面に置いた。

「ち、畜生・・・。待ちやがれ・・・。許さねえぞ、おい・・・」

毒づいた言葉を、デイルに投げかけてくる。デイルは、一つ溜め息をつき、盗賊との間合いを詰めた。相手は短剣を構えている。

ふいに、デイルの動きが素早くなる。ダメージの蓄積された盗賊の体では、動きを捉えきれなかった。盗賊は、気づくと腹に痛みを感じていた。デイルが、瞬速といえるような動きで木刀を、盗賊の胴に叩き込んでいた。ついででデイルは、咳き込みながら倒れこむ盗賊の後頭部を拳で殴っていた。・・・確実に、仕留めていた。

「もう・・・。手間取らせないでよねー。これ以上追って来ないでよー・・・」

デイルは、奥のほうで倒れている盗賊たちに向かって、口に手を当て言った。

そして、テューサたちを追った。

第18(3) (後書き)

第18部終了です。

次話からは19部!!

結構クライマックスに近づいてきてます。

1500Hit有難うございます。

そいえば、28日に小説<ミール・ストーン>が

私の中で完結しました。そのうちココでも完結すると思うので、

最後までお付き合いお願いします★★★

第19部（1）（前書き）

始まりました、第19部！！

クライマックス間近！

最後までお付き合いをお願いします。

第19部 (1)

第19部 ― 砂漠の神殿― (1)

テューサたちはやっと、砂漠に足を踏み入れた。盗賊と闘ってから、2日過ぎていた。

そこは、ネイス国なのに木々はおろか、雑草すらもない場所だった。一面茶色。いや、黄色がかっている部分もあるが。こんな所で迷ったら、生きて街に戻る確率は低いだろう。

ちょうど、夜になる頃合だった。太陽が、顔を隠そうとしている。砂漠はオレンジ色に見えた。

「夜だけどー……。ねえ、もう休もうよー……」

珍しく、ディルが弱音を吐いた。ミクヤが彼女を見やる。それほど心配してなさそうだったが。

「どうした」

「疲れたのよー！ 荷物重いんだものー。それに、砂漠歩いてると足がもつれるしー……」

金切り声をあげる。ミクヤが迷惑そうな顔をして、溜め息をひとつ。ルビスが笑って、2人を止めた。

「石から情報もらわなくちゃいけないし、今日はこのへんで休もうか」

ルビスが一足先に荷物を下ろす。負けずと、ディルも急いで下ろす。まるで、「あたしが一番に休むのよ！」とでも言うかのように。そして、自由になって腕を上上げて伸びをする。

「ふうっ。……本当に何も無いわねー……。つまんない」

「何があればつまるんだ」

「ミクヤのばかーっ」

ディルとミクヤが口喧嘩を始める。テューサは腰を下ろして2人を見ていた。くすくすと笑いたくなる衝動にかられる。ルビスが手を

伸ばし、テューサに炒った木の実と炒めた山菜を渡した。「ありがとう」と言って口に運ぶ。

「あっ!!」

ルビスが叫んだ。全員の動きがぴたりと静止する。デイルとミクヤの、一方的な口喧嘩さえも。ルビスは、服のポケットに手をつっ込んで、ごそごそと何かを探している。

「<チャールク・ネス・アーソイリー>」

取り出した石を握って、囁くように詠った。うっとり、テューサは目を細めてそれを眺めた。周りの自然だけでなく、自分も術に落ちるような感覚があった。そのくらい、ルビスの呪文は心地良かったのだ。

うっとりとしてぼーっとしていると、シャネラが心配そうに声をかけてきた。

「・・・どうした？ 大丈夫か？」

テューサは現実に戻された。はっとして、シャネラに笑顔を返す。

「大丈夫よ！ ルビスの呪文が少し、心地良かっただけ・・・」

「そうか」

素直に、理由を話した。まだテューサの肩の傷を気にしているのか、シャネラに笑顔が戻っていなかった。それを見ると、テューサよりも逆に痛々しい。シャネラも、充分それが分かっていた。しかし、素直に笑えなかった。

会話が途切れたまま、テューサはルビスからもらった夕食を口に入れた。シャネラも、テューサの正面に座って、食事にありついた。騒がしく聞こえる、デイルの声。一方的な口喧嘩を見ながら、食事を終えた。

「あれ、もう寝るの？」

横になりかけたテューサを見て、ルビスが声をかけた。シャネラはそちらを見ていたが、デイルとミクヤは未だ勝敗の結している喧嘩を行っている。

「うん。眠いし・・・。テュクから早くいろんなこと教えてもらい

たいもの」

「そっか。おやすみ。よい夢を」

にっこりとルビスが微笑んだ。テューサも笑い返し、目を瞑るとすぐに夢の世界へおちていった。

第19部 (2) (前書き)

デイルの、お説教タイム・・・。

第19部（2）

第19部 ― 砂漠の神殿 ―（2）

「おやすみ。よい夢を」

につこりとルビスが微笑んだ。テューサも笑い返し、目を瞑るとすぐに夢の世界へおちていった。それを見計らい、ルビスとデイルがシャネラの方を一斉に向いた。急な、そして突飛なその視線に、シャネラは思わずぎくりとする。ミクヤは無言で食事を買っていた。

「・・・シャネラ。あんた笑いなさいよ・・・」

「なっ・・・」

デイルが口にした言葉に、先程よりもぎくりと焦る。今度はルビスがシャネラを責めた。

「笑ってあげなよ。テューサは、君を盗賊の一撃からかばったんだ。なのに、君がそんなにも痛々しい表情をいつまでも作ってたら、テューサは『かばってよかった』なんて思えないよ」

いつのまにか、ミクヤの食事の手も止まっていた。合計6つの目が、シャネラを映していた。シャネラは、どうしようもなく、俯いた。

「かばってもらわなくてよかったんだ・・・。冷静に、周りを見ながら闘えなかった俺が悪いんだ・・・」

「確かに、そこまで傷を負ってまでしても、冷静になれなかった自分も悪いわー。でもね、かばってくれなくてよかったなんて、言わないの!!」

ぱんっ！ とデイルがシャネラの頬を平手打ちした。あまりに急なこと、それよりも予想できなかったことで、シャネラは交わすことなく、もろに張り手を喰らった。信じられない、というような顔で、殴られた箇所を手で触れながら、目をつろとさせていた。

「あたしたち、仲間なんだから！ 友達なんだから！！ 危険な目に合ってるのに、助けたくないのは、当然じゃないの！？ シャネラの馬鹿っ！」

両手で目を押さえながら、肩を震わせてディルはその場に泣き崩れた。それを見て、ミク

やはゆっくりと立ち上がり、ディルのところまで来ると、頭を撫でるようにしてあやした。

「シャネラにとって・・・ひっ・・・。あ、あたしたちは、何なのよー・・・つく・・・。シャネラの、馬鹿あー・・・」

何も言わず、ミクはディルの頭を撫で続けていた。ルビスは、微笑を浮かべながら、軽く溜め息をつく。

「悪・・・かった・・・。俺らは・・・仲間だ・・・」

「そうだよ。まだ僕らは、知り合ってから短い時間しか隔ててないけど、立派な仲間であり、友達だ」

『大変・・・でしたね・・・』

テュクが、私の肩のことを気にして言っていた。私は、それを笑顔で返す。

「うん。でも、大丈夫よ。ねえ、砂漠に来たけど、これからどうすればいいの？」

私は、どこを見渡しても真っ白な場所の、真っ白な地面に座り込んでいた。テュクの優しい声が木霊する。

『もう少し・・・先を進むと・・・神殿があります・・・』

「神殿？」

思わず、聞き返す。神殿って、神様を奉ってある場所のことよね。あまり身近にないから、想像も出来ないのだけれど・・・。

『そこに行けば、全てが、分かります・・・』

「全て・・・？」

『そう、全て・・・』

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

第19部(2) (後書き)

1600Hit有難うございます♪

第19部(3)(前書き)

仲直り、しましょ??

第19部 (3)

第19部 ― 砂漠の神殿 ― (3)

テューサは目を覚ました。辺りはまだうす暗かったが、確実に太陽は昇り始めている時刻だった。まだ、仲間は眠っていた。

テューサは体を起こした。体を支えるために地面につき、力を入れた左腕が痛んだ。

「――っ!!」

声にならない声をあげる。逆の掌で、傷口を包帯の上から摩る。

しばらくそうしていると、ひとり、目を覚まし、体を起こして座った。シャネラだった。

「あ……。おはよう」

頭を掻き、振って視界を安定させると、周りを見やって、テューサと目が合った。そのまま、緊張した趣きで声をかける。

「おはよう。シャネラにしては早いわね。珍しい」

テューサも摩る手を止め、声をかける。何か言いたいのか、シャネラは黙ったままだった。どうしたのだろう、とテューサが考えていると、シャネラは口を開いた。

「その……。悪かった……」

「え？」

語尾がだんだん小さくなっていくシャネラの言葉を聞き返そうと、ふいに声が出る。もう一度、シャネラは黙ってから、言葉が続けた。「……。だから! テューサに怪我させて、俺が1人で責任感じて! いや、俺が悪いんだけど!! テューサは、笑ってくれてんのに……」

じれったそうに、けれど遠回しに。もはやシャネラは、テューサの顔を見てはいなかった。

テューサは嬉しそうに、微笑みながら、シャネラを見ていた。顔を

真っ赤に染めて、視線

を自分から外し、謝るということに慣れていないぎこちなさをも出し出している彼を。

「シャネラが責任感することじゃないよ。私は、シャネラを助けたかったの。上手く避けきれなかっただけ。今まで、いろんなところでシャネラは私を助けてくれたわ。だから、今度は私が助けたかったの」

にっこり笑って言った。ふ、とシャネラはテューサに向き合って、

「ありがとう」と小声で言った。

「仲直りしたのー？」

デイルは起きるなりそう言った。テューサは肩で溜め息をついた。

「もともと、喧嘩はしてないわよ」

「まあ、いいんじゃない。さ、みんな起きたんだし、出発しようか」
ルビスが立ち上がりながら仲間たちに声を掛けた。テューサも、シャネラに助けられながら立ち上がる。

「ええー。あたし、朝ご飯まだなのー？」

「起きるのが遅いお前が悪い。歩きながら食べる」

「ええー。王女様がそんな下品なことしていいのー？」

ぶつぶつ言いながら、デイルは結局歩きながら食べた。

デイルが食べながら思い出したように言葉を発した。

「そういえば聞いたあ？ この先に、神殿があるんだってー」

「聞いたよ。そこに行けば、全てが分かるって」

「何が分かるのかしらー。楽しみねっ」

ルビスとデイルが笑いながら喋っていた。デイルが最後の一口を食べ終える。ふと、他にも

も声が聞こえる気がした。

「ねえ・・・何か、聞こえない？」

第19部(3) (後書き)

久しぶりの更新です。

もうちょつとで終わりますので、

最後までお付き合いおねがいします。

第19部(4)(前書き)

デイルに異変が・・・っ

第19部 (4)

第19部 ― 砂漠の神殿 ― (4)

「ねえ・・・何か、聞こえない？」

テューサが、恐る恐る仲間たちに問い掛けた。その問いかけに、全員が耳を澄ます。すると、急にデイルが静寂とした中で舞い始めた。

「『待っていた 待っていた

我らを解き放つ子らよ

今一度 平和を望むべし

今一度 平和を謳うべし

ミール・ストーンを持つ子らよ

今一度 平和を願え

今一度 平和を愛せ

待っていた 待っていた

今こそ 世界が一つになるとき』」

デイルの歌と舞が終わるまで、誰一人喋ろうとは思わなかった。否、舞が美しすぎて、目を奪われていた所為もあっただろう。デイルは、自分で考えて歌い、舞っているのではなく、ただ、何かに共鳴したような、操られていたような、そんな感じだった。

舞い終わったデイルが、ふらりとふらついた。4人ははっとして、夢現ゆめうつの中から現実へ引き戻された。慌てて、ミクヤが駆け寄り、デイルの体を支える。

「デイル！ デイル！」

ミクヤは、柄にも無い大声で、心配そうに何度も名を呼んだ。デイルは気を失っていた。テューサたちも、続いて駆け寄る。

「デイルは・・・何が、あったの？」

テューサが思わず疑問を口に出す。誰にも分からないことだったが、口に出さずにはいられなかった。しかし、ルビスは見ていた。

「・・・舞っているとき・・・、デイルの石が光ってたよ・・・。
・・・もしかしたら、神殿とやらが近いのかもしれない」
それから、ミクヤはデイルを背負い、「進もう」と呟いた。3人は
頷いて、ただ黙々と歩き続けた。

『目を覚まさない・・・。デイル・・・』
声が聞こえた。ラーミアの、声。「なによー」って言うつもりだっ
たんだけど、なぜか声が出ない。

『「なによー」じゃありません・・・。神殿が近いのですよ・・・』
・・・あたしの思ったこと、通じてるのかな。

『あなたが謳ったことが、何よりの証拠よ・・・』

——謳った？ あたしが？ いつ？

『ごめんね・・・。あなたの体を借りて、私が謳いました・・・』
——あたしの体？・・・を、使って？ 謳った？

もうあたしは理解できなかった。話が飛びすぎている！ それどこ
ろか記憶がない。どうしてー！？

『まずは現実に戻って・・・。ちょうどいい頃合だわ・・・。戻っ
たら、すぐに呪文を唱えてね・・・。通り過ぎちゃうから・・・』
ちよっと待ってー！！ あたしの、次々と浮かび上がってくる疑
問は解決してくれないのー！？

第19部(4) (後書き)

1700Hit有難う♪♪

完結するまでに2000いけるかな!?

第19部(5)(前書き)

更新遅れてすみません!!
ついに、神殿現る!!

第19部 (5)

第19部 ― 砂漠の神殿 ― (5)

いくら歩いても、神殿が見えなかった。歩きつかれた一行が、少しの間足を止めたときだった。デイルが、ミクヤの背中で目覚めた。ぱちくりと目を瞬かせ、もぞもぞと動く。すると、ミクヤを始めとして、仲間が気づいた。

「目、覚めたか。デイル」

「デイル！ 大丈夫！？ 何があつたの、いったい？」

「体の調子はどう？」

「いきなり踊り始めるから、びっくりしたぜ」

次々と声がかけられ、対応し切れなかった。デイルは「ちよつと待って―」と促すと、胸元に掛けてある石を、両手で包み込み、ミクヤにおぶられたまま呪文を唱えた。

「・・・＜ルファイ・リカバム＞・・・」

ラーミアに言われた通り、目覚めてすぐ、呪文を詠唱した。呪文の最後の詞が終わり、数瞬、時が流れたかと思うと、蜃気楼のようにある場所が空間ごと、ゆらゆら揺らめいた。

その変化に5人はすぐに気づき、瞬きも忘れそうなほどその一点を見つめた。しばらくして、その変化のあつた場所には古臭い、今にも崩れそうな建物が姿を現した。

「これ・・・！」

テューサが思わず口を開く。誰かから、ごくり、という生唾を飲み込む音を聞いた気がする。

「これが・・・神殿？」

ルビスもまだ、その建物を見つめたまま呟いた。

皆、立ち尽くしたままだった。突然姿を現した、謎の建物への驚きと、この建物を目の前にしてどうするべきかという困惑が浮かん

でいた。

しばらく、その場には静寂が流れた。

デイルは、ミクヤの背中から降りて、神殿へ近づいた。仲間たちははっと我に返って、デイルに後ろから声をかけた。それを、振り返ったデイルは真剣な眼差しで仲間たちを見、言う。

「デイル！」

「・・・入ってみようよ。あたしの呪文で出てきたんだから、何かあたしたちと関係があるんだよ、きっと。うん、多分これが神殿だ
ー・・・」

もう一度神殿と自分で言った建物を見て言った。そして、足を前へ出し、また一步近づく。デイルを追って、4人も慌てて建物へ近づいた。

「・・・筒抜けだねー・・・」

デイルが呟く。扉も壁もないその建物は、四隅の柱と屋根で成り立っていた。その真ん中には、女神のような銅像が2つ置かれ、間に台座のような石が置いてあった。

「ねえ、この大きな石。窪みが5つあるよ。僕らの石をはめ込むの
かな・・・？」

ルビスは言いながら、自分の緑色の石をはめ込んだ。ぴったり入った石は、わずかに輝きだした。

「光ってる・・・。僕、呪文唱えてないのに・・・」

「あたしも置いてみよーっと」

コトリ、と音がして、デイルの黒石も光りだした。

「ほら、皆も入れてみなよー」

テューサ、シャネラ、ミクヤも順に石をはめてみた。5つはめ終わると、急に2体の銅像が動き出した。銅像自体ではなく、それが持っている槍のような武器が、台座の真上で交じり合った。

カチン、と触れ合った音がして、すぐに台座の上の5つの石から真上に光がほとばしった。眩しくて、テューサたちは反射的に目を伏せた。

第19部(5)(後書き)

もうすぐ1800Hitです。
いつも有難うございます♪

第19部（6）（前書き）

5人が生まれる前の今までの話が語られます。
ついに・・・明らかに！！

第19部（6）

第19部 ― 砂漠の神殿―（6）

しばらくすると光は止んだ。目をゆっくり開けてみると、そこにはまた、ゆらゆらとうごめく人の姿が5つあった。人といっても、半透明で足はあるけれど宙に浮いていた。霊のようで、そうでないもの。

「な、なに・・・？」

デイルは一番に声をあげた。その5つの人影に向かって。一人は老婆。一人は若い女性。一人は幼き女の子。もう一人も幼き男の子。最後の一人は若い男性。そして、一番に男の子が口を開いた。

『うわあ。5人が顔を合わせるのなんて、何年ぶりだろうねー』
とても嬉しそうにしている。にこにここと、顔を微笑ませながら。

『久方ぶりですねえ。年寄りには数えれんわ』

老婆も、嬉しそうに微笑んでいる。急に、男の子に女の子が抱きついた。

『会いたかった！ 本当に会いたかったわ！』

『僕もだよ！』

『おうおう……。若い者は元気でいいこと……。』

『……。』

若い男性は口を噤んだままだった。

『おおと……。ほれ、やめなさい。子どもたちが待っておる』
老婆は、テューサたちに今更ながらも気づいて、声をかける。それまでもずっと、デイルを始め、4人は成り行きを見つめていた。ふいに、テューサが声を出す。

「……。お母さん？」

言葉に驚き、シャネラたちがテューサを振り返る。テューサはとても不安そうな顔をしていて、今にも泣き出しそうだった。お母さん、

と問いかけられた若い女性は、ふ、と口元を緩ませた。

『ばれてしまったわね。・・・大きくなったわね、テューサ』

抱きつきたい衝動に2人はかられるが、生身の人間と、霊体のような状態の2人は無理なことを理解していた。代わりに、瞳を潤ませている。

『おやおや。あれだけ秘密にしておきたいと言っておったのに』

『傷つけたくなかったのです』

苦笑いをしながら、テューサの母は答えた。

『さて、もうお分かりになられたかしらね。私が、ラーミア。こちらからテュク、ランクル、シャーマ、そして、ディムア』

自分で名乗った老婆・ラーミアがひとり一人、名を紹介していった。
やる。

「あなたたちが・・・！」

ルビスが感嘆の声をあげた。

『さて。昔話を聞かせましょうかね。長くなるが、うたた寝するんじゃないよ』

ラーミアは優しく笑うと、話し始めた。

『真実の歴史はライソカスで聞いていることでしょう。その辺は飛ばそうかね。まず、あなたらが共通して持つ、この石。まとめて＜ミール・ストーン＞っていうんですよ。覚えいてね。＜平和の石＞って意味さ。』

ミール・ストーンを使った、この平和への計画は、あなたらが生まれると同時に発動しました。だから、一番年上の・・・シャネラとミクヤかしらね。誕生日が早いのはどちらか知らないがね。最後のデイルが生まれると、私ら5人はそれぞれお告げを聞いたのです。『ミール・ストーンに宿り、平和を謳え』とね』

『ミール・ストーンっていう名は、世間には知れ渡ってないから、僕最初何のことかわかんなかったよー』

シャーマは困った顔つきで言った。それに対して、ランクルがうん

うんと頷く。ディムアは無口で、一言も喋らなかった。テュクは、未だに娘と見つめ合っている。

「宿るって・・・？」

ルビスは問いを口にした。その問いは、他の4人も気になっていたことだった。

『魂となって、ミール・ストーンと一体化し、君らを護るってことだ』

ディムアが初めて声を出した。その声は、やはり成人男性らしく、低めの声であった。

「じゃあ・・・お母さんたちは、し、死んじゃったの・・・？」

第19部（7）

第19部 ― 砂漠の神殿―（7）

「じゃあ・・・お母さんたちは、し、死んじゃったの・・・？」

母親から目を離さずに、話を聞いていたテューサが恐々と言った。

『・・・ええ。しかしこれは栄誉ある死。悔いてはいません。あなたを置き去りにしたこと以外はね』

『私ら5人はそれぞれでこの神殿へ足を運び、仲間を待ちました。

5人が揃い、幾日か過ぎると、台座に供えられたただの石ころが輝きだし、色を持つ宝石へと変わったのです。そして、私らは宿りました』

ラーミアが一度話を切ると、ルビスがそこへ詫びを入れた。

「僕たちを護るために、このような姿になって頂いて、有難うございます。そして・・・申し訳ないです。僕らが、未熟だから・・・」

『違うよ！ あたしたちにはまだお仕事があるのよ！』

慌ててランクルが言った。

「仕事・・・？」

テューサたち5人の声が揃った。テュクたちも揃って、ふ、と笑う。

『ええ。あなたたちの前にも、ミール・ストーンを使って世界を平和に導いたってことは知ってるわよね？ ライソカスが、世界から孤立したときのこと。あのときも使い手が5人いて、石の中にも5人宿っていたの。そして、少し残酷に聞こえるけど・・・。災いを起こした世界への戒めとして、ミール・ストーンに宿る5人の魂たちを使って、平和を取り戻した。・・・意味、わかる？』

テュクは最後のほうを自信なげに聞いた。聞かれた5人は、こくこくと頷く。

「ライソカス国を孤立させるために、森や海に平和を取り戻すために、魂を使っただけですよね・・・」

ルビスは言葉を選びながら、慎重に話した。

『その通り。此度の私らは、反省した世界を1つに戻すことが使命なんです』

ラーミアが最後の言葉を紡いだから、暫く沈黙の時間が流れた。誰もこの沈黙を壊そうとはせず、また、何を話していいのかも分からなかった。立ち尽くしたままの時間が、過ぎる。

第19部（7）（後書き）

やばいです・・・。

なんか最近Hitが増えてる気配なし・・・。

長らく更新が止まってたから、仕方の無いことだとは思いますが・
・・。

皆さん、読んでください！！

最終章（1）（前書き）

5人の運命は・・・？

最終章（1）

最終章　―世界のために、平和を謳おう―（1）

沈黙が流れている中、デイルははっと、不可解な点を見つけ出した。恐る恐る口にしてみる。

「・・・あのー・・・。あたしたちの前の使い手たちは、どうなったんですか・・・？」

『いい質問ですね、デイル。そこが、あなたらにとって、最も残酷な点です。私も話すのが辛い

・・・。年寄りの心臓はもたんわい・・・』

ラーミアたちは、ふうと、肩で溜め息をついた。その意味がデイルたちにはわからず、首を傾げることになる。

『いいですかね・・・？　辛いから、一度しか言いませんよ。・・・

使い手は、石を操り、最後まで呪文を唱え、世界に貢献し、私らと共に、此処を、旅立つのです・・・』

「・・・遠まわしに言ってるが、ようは俺らも死ぬってことなんだろう？」

ぶつ切りにして紡ぎだしたラーミアの言葉を、いともあっさり、シヤネラは訳してしまった。ラーミアたちは皆俯いていた。

今まで愛しげに娘を見つめていたテュクが、使い手の子どもらを全員見渡して口を開いた。

『ウィテュードは、世界の人々の孤独を。ウィーシャは、この世界の海を。一緒に、海に流れつく川も。ラルウィは、この世界の自然。ミヤウィザは、時間を。あなたの呪文で、世界の人々の過ちを浄化します。それにより、あなたたちのことが後の世に語り継がれることでしょう。ディザードは、この空を。そして、5人の呪文により、世界がひとつに戻るのです。アムタワ国も、4つの国の上に存在することになるでしょう。これが、あなたたちの最後の役目です』

テュクの話聞いて、使い手たちは黙りこくってしまった。デイルが、沈黙を破る。

「・・・なんで・・・あたしたちなんですか・・・？ あたしたちは、このためだけに、生まれてきたんですか？ 生まれたときのあたしたちに、世界を救う以外の未来はあったんですかっ!？」

弾けたように、仲間の分まで貯めていた疑問をぶつける。唐突に曝された自分たちの未来を、否定したいかのように、つい語尾が荒くなる。ついには、ミクヤに後ろから両肩を押さえられるまで、前のめりになって、息を荒げて、涙目で、テュクたちに問い掛けていた。デイルの言葉を聞いて、テューサとルビスは涙ぐみ、シャネラとミクヤは顔を背けていた。

『あなたらの運命は、私らが決めたのではないので、どうと言うことができません・・・』

『みんなが、人一倍海を愛していたり、世界を任せられるような人たちだったからだよ! ここにいるみんなが、そういう人間だよ!』
ラーミアの苦し紛れの言葉を、シャーマが笑顔で続けた。シャーマの笑顔に、シャネラがふと微笑む。

「ああ。俺は、後悔してねえ。今までの旅も、この運命も、これからの未来もな。だから俺は、海を癒す。世界を救えるなんて、誇らしいことじゃねえか」

「でも・・・っ。でもっ・・・」

デイルはミクヤにまだ押さえられたまま、頭を垂れて泣き出していた。

「分かってるって。未来が見たかったんだろ？ ミクヤが好きなんだもん。俺だって、まだやりてえことたくさんあるんだよ。お前の国やミクヤの国で剣豪を探して、手合わせして、倒して、世界一の剣術使いになる、とかな」

垂れ下がったデイルの紅い頭を、軽く叩くように撫ぜた。するとデイルは、ミクヤの拘束から抜け出し、自由になった手で顔を拭い、シャネラを見た。

「・・・ごめんなさい。皆思ってること同じなのに、あたし1人拒んじゃって・・・」

テューサたちを見回した。そして、笑う。

「あたし、癒すよ。世界を救う！ この世界には、大切な人たちがたっくさんいるんだもんね！」

「ディル・・・。うん。僕らが一緒だよ。最後までね」

「さ、決心が揺るがないうちに最後の役目を果たしましょう！ お母さん、どうすればいいの？」

笑顔の戻った使い手たちを見て、石に宿る魂たちは胸を撫で下ろしていた。テュクは優しく微笑んだ。

『台座を5人で囲んで、呪文を唱えるだけです』

『呪文はいつもの通り、私らと一緒に聴こえてきた言葉を言えばいいのさ』

言われた通り、テューサたちは僅かに光を放っている石が置いてある台座を囲んだ。

最終章（1）（後書き）

1800Hitも有難うございます！

ついに最終章に入ってしまった。寂しいです・・・。
最後の最後まで、お付き合いお願いします！

最終章（2）（前書き）

いよいよ最終章です。

そして、この回で＜ミール・ストーン＞は終了です。

最終章（2）

最終章 ―世界のために、平和を謳おう―（2）

「・・・ミクヤ」

「なんだ？」

「・・・大好きだったよ！　ずっとずっと、愛してる！　生まれ変わっても、ミクヤを好きになる！」

「・・・ああ。待ってるよ」

ディルとミクヤは、最後の言葉を交わしてキスをした。それを見たテューサたちも、ディルとミクヤをよそに、3人で別れの言葉を紡いでいた。

「今まで、助けてくれて有難う。たくさん心配させちゃったし、怪我させちゃったし。ごめんね。シャネラと一緒に旅ができて楽しかったよ。仲間になれてよかった！」

「ああ。俺も、迷惑掛けたな。最後の戦いでは護れなくてごめん。もし後世で逢ったら、今度こそ護ってやるよ」

テューサはシャネラに抱きついて、シャネラもテューサをきつく抱きしめる。そして言葉

を交わすと、体を離して2人はルビスの方に向き直った。テューサはルビスにも抱きつく。

ルビスはテューサの頭を撫ぜる。片方の手はシャネラとの握手に使った。

「ルビス、お薬とか作ってくれてありがとね。ここで、全員で旅の終わりを迎えられるのは、ルビスのおかげだよ。私、たくさん怪我とかしちやったから・・・。ルビスが仲間でよかったよ。今まで本当にありがとね！」

「・・・お前、武術はからっきしみたいだから、本当は剣術とか教えたかったんだよな。でも、お前が医術出来るおかげで、安心して

旅が出来たんだ。ほんと、仲間でよかったよ。ありがとな」

「2人とも、僕も、2人が仲間でよかったよ。生まれ変わっても、きつと、友達になろうね。今度は、僕から探しに旅に出るよ」

言い終えると、テューサは体を離し、シャネラも手を解いた。そして、台座を前にする。

「テューサ、シャネラ、ルビス、あなたたちが友達になってくれて、本当に嬉しかったよ」

「今度は、たくさん話そうな」

「うん！」

『さ、準備はいいかね。目を瞑って、耳をすましてごらん』

ラーミアに促されるようにして、目を瞑る。すると、どこからともなく微風が吹く。

風を感じながら最初に謳ったのはテューサだった。テュクの声も微かに混ざる。

「涙散らして笑顔集う

孤独を消して歓び集う

寂しさは愛に

平和を温もりで満たせ

平和はいつも心の内に

<サリテュード>」

輪唱するかのように、テューサが旅で出来た仲間の順に、前の謳が終わる前に使い手が謳いだした。

「揺るる海原果てなく続き

揺られて行き着く先は海

惑星^{ほし}を潤^ほおす波しぶき

波よ静けさ取り戻せ

海よ平和を取り戻せ

<オールズ・シャナー>」

「ざわめく木の葉よ

疾走^{はし}る風よ

支える地よ

平和を謡い 永久とわに想え

<チャールク・ネス・アーソイリー>」

「時空の怒り自然に彷徨い

留まることなく全土を侵す

後悔の念よ 真実へ導け

裁きの神よ 君臨し

過去を浄化し未来を刻め

<ルフィライ・リカバム>」

「陽光ようこう我らの生命なり

雨雲あめくも我らの恵みなり

我らの営み全て虚空からの贈り物

大事を心に刻み 我等は慕う

虚空よ 我等を永久とわに見つめよ

<ディーキー>」

瞬間。

世界が

輝
いた。

F
i
n.

最終章（2）（後書き）

ついに、連載終了しました。

今まで読んで下さった方、長い間お付き合い有難うございました。最後の展開については、皆様の想像力で自分の思う未来を思い描いてみてください。

また、時間があれば、最近執筆中の別のお話を掲載していきたいと思います。

そのときはまた、よろしく願いしますね。
では暫く私は休憩に入ります。

また、会う日まで。

さようなら。

有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5087a/>

ミール・ストーン

2010年10月17日15時11分発行